
インフィニット・ストラトス～太陽の翼～

フウ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜太陽の翼〜

【Nコード】

N7515R

【作者名】

フウ太

【あらすじ】

少年はかつて少女に夢を語った
自由に空を翔けることが自分の夢だと
だが、夢はいつしか色褪せて、少年の焦がれた天駆ける翼は、鋼鉄の双翼と剣に変わり、戦場を突っ切るだけのものになる
時は流れる

夢を失くした少年の前に、情熱^{いろ}を持って夢を語る少年が現れる。

それがまるで定められていた運命であるように

これは作者の思いつきで書かれた、W主人公によるインフィニット・ストラトスの再構成物です。

オリ主と一夏を主人公に、作者の好き勝手な妄想が詰め込まれた駄文になるかもしれませんが、そのようなものが嫌な方はできるだけ見ないことをオススメさせていただきます。

ちなみにメインヒロインは、シャル&箒でいく予定です。

では、ご覧ください。

ブローグ

視界いっぱい広がる向日葵畑で、日差しが反射してキラキラと光る金髪と純白のワンピースを着た彼女は俺の手を取ってこう言ってくれた。

——もう泣かないって約束してね？

——寂しいから悲しいからって、自分から死んじゃおうとしちゃ駄目だよ？

俺は素直に頷き返す。

彼女はそれに満足したのかヒマワリのような笑みを浮かべ、背筋を伸ばし、自分の服が汚れるのも構わずに抱きしめてくれる。

俺は意味もわからずに泣きそうになった。

だが、今しがた泣かないと約束したばかりだからそれを堪える。いい匂いと共にぬくもりと優しさが彼女から伝わってきて、自分の中にある『何か』を溶かしてくれるのを感じ、自分の中にある惨めさも痛みも悲しみも絶望も拭い去ってくれる。

——空を飛びたいの？
「うん！」

大きな入道雲が西の空一面を覆い東の空で飛行機がまるで華麗なワルツを踊るように飛行し、夏の暑い日差しが大地に燦々と降り注いでいた。

茹だるような暑さから避難するように俺と彼女は大きな木の下に逃げ込み、そこから空に向かって精一杯手を伸ばしてみる。

あの時の俺は地上が嫌いだった。まあ今でも嫌いなのは変わらないが……

両親のいない寂しさも、それを嘲られる悔しさも、異国で一人生きないといけない現実も、食うものにも困る貧乏も関係ない。

自分を縛りつける全てから解放されて、あの青い空を思いっきり飛びまわりたい。

それだけ、それだけが俺の願い。

そんな願いを、彼女は笑って信じてくれる。
それはまるで自分のことのように。

——飛べるよ！
「そう………かな？」

——うん！……絶対…絶対に大丈夫！

その時の彼女の笑顔は今でも忘れられない。
大嫌いなこの地上でここまで美しいものが存在しているのか？
そう思うぐらいに、そしてこれから先もそう思い続けるぐらいに彼女の笑顔は優しく優しくて暖かだった。

——私の名前は

！

——貴方の名前は？

彼女の優しい声が、俺に名を問いかける。
俺はそれに答えるために、必死になって応えた。

そう……俺の名は…

「よお……ちゃん」

そこで彼は目を覚ます。

そして目の前でなぜかウサ耳をつけた巨乳の女性が、ベッドで寝ている彼のお腹の上で上機嫌に手を振っていた。

人類がもつとも不幸になる瞬間、それは幸せの絶頂でいきなり絶望の底に叩き落される瞬間である。誰が言ったか定かではないが、絶対そうであると彼は確信した。

たとえば、どんなに美人でナイスバディで胸が大きくても、人間それだけで幸福になれるわけではない。

心って言うのは、こうもつと複雑で繊細なものではないのだろうか？

「何をそんなに不思議な物を見た目になっているのかな？それとも、この束ちゃんに見惚れちゃった。」

自分の上に跨っている『ウサ耳付き巨乳女』を蹴落として、枕元の時計を手に取り時間を見る少年。

年の頃は15・6の少年といった所だが、その表情は極めて不機嫌極まりないものであった。

時計を見れば深夜の三時を回ったところ、彼が何も考えられないぐらいに疲労のピークに達しながらも何とか意識を繋ぎとめてベッドに入ったのは12時ごろ、ちょうど三時間ほどの睡眠時間だった。

年頃の男子とはいえども疲労は取れることもなく、だが脳味噌だけは完全に覚醒させられてしまっているため、全身に言い知れぬダルさだけが襲いかかり、彼の機嫌を悪くしているのだ。

そもそも疲労する原因を作った張本人が、ちょうど久しぶりに見た夢を中断させた上に上機嫌で寝ていた自分の上で飛び跳ねているのだ。

結果、プチギレた彼は枕の下に忍ばせていたオートマチックの拳銃を取り出し、床の上で『束ちゃんのミラクル頭脳に支障が出たらど

うするんだい！このおバカちゃん！！』とかのたまっている巨乳美女のこめかみにこすりつけるといふ暴挙に出た。

「とりあえず死ね。いますぐに」

「もう！照れ屋な。よぉちゃん！」

「それがお前の遺言になると思うと僅かばかりの感慨も湧いてくるな。まあ三秒で忘れてやるが」

「そのクールな目が女を虜にしちゃうんだぞ！！よっ！この色男！！」

人の話を聞く気のない目の前の美女の脳髓をぶちまける覚悟の決まった少年が引き金を引こうとした時、部屋の入口を蹴破って、突如十数人のマシンガンなどで武装した黒人の男たちが大声で早口の英語を言い放ちながら侵入してきた。

一瞬で二人を取り囲むと、何やら英語で言い放つが、早口すぎるのと聞く気がなかったため少年には男たちが何を言っているのかわからない。

「もう！しつこいよこの黒ブタ共！！ようちゃん！ぶつちらかして！！」

目の前の美女を見る少年・・・大方目の前のコイツが何かしたんだろうと勝手だが高確率でそうである仮説を立てた少年は、男達を見もせず言い放つ。

「コイツに用があるなら好きにしろ。まったく見ず知らずの赤の他人だ」

「ああ！ヒドイ！！私はこんなにもようちゃんを思っているのに！！」

「ゾツとする台詞だな、戦慄が走るぞ」

「あ・い・し・て・るゝってことだよ！」
「き・え・う・せ・ろ！ってことだよ」

漫才のような会話を繰り広げる二人に苛立ったのか、男達が銃口を二人に向けて引き金を続けざまに引く。

銃弾の嵐が、ベッドを、時計を、部屋のすべてを次々に破壊していき、硝煙が辺りに立ち込める。

これが普通の人間相手ならば死体は穴だらけどころか、引きちぎれて五体バラバラになっているところなのだが……

「……とりあえず理由は何なんだ？」

「ん？……私のアパートの前で白い粉を売ったりするからいけないんだよ！私の部屋の中まで飛んできたらどうする気？」

「麻薬^{ヤク}の売人共か……」

まったく平然とした日常会話が聞こえてきて、男達に動揺が走る。

緊張感を増して銃口を声のする方に向ける男達。

そして煙が晴れた時、彼らが目にしたものは

― 黒い機械の腕―

― 青い鋼鉄のスラスターがついた双翼―

― 胸に黄金の不死鳥のマーク―

男達は今度こそ、度肝を抜かれた。

否、常識としてあり得ない物を見たと言ってもいい。

鋼鉄の機械の鎧を身に纏った少年が、手と翼を盾にして銃弾から女性と自分を護っていたのだ。

・ オトコガISSヲ身ニ纏ッテイル―

これは今の世界においてあり得ないと言ってもいい、絶対といってもいい。

だがしかし、目の前でそれは現実として起こっているのだ。

ISを身に纏った少年の手から男達の放った弾丸が零れ落ちた、その光景だけで男達は戦意を完全に失う。

自分たちの死はすでに確定してしまっている。この世界でISに対峙するとはそういう意味なのだから。

だが、少年は翼を広げると突如部屋の窓から女性を引き連れて壁ごと窓を突き破って飛び去ってしまう。その光景に茫然と立ちすくむ男達……。

しばらくして、我を取り戻した男達の視線の先には、飛びだっていた二人の姿はどこにもなかったのであった。

「ようちゃん！私はいつ等ぶつちらかしてって言ったのよ？」

「やりたきやお前がやれ、俺をイチイチ巻き込むんじゃない」

「いけず〜！」

真夜中の空をISを使つて高速で飛行する二人。一応殺すとか死ねとか言いながらも女性を抱えながら飛んでいる所はなんだかんだ言

って彼の性格が出ているのかもしれない。

「あ、そうだ！ようちゃんようちゃん！！」

「ん？手を離してほしいのか？だったらすぐに放り出してやるぞ」

「ちがうよー！」

満面の笑みと人差し指を差し、少年に次のことを美女は言い放つのであった。

「ようちゃんはこれから日本に帰って、IS学園に入学してくださいー！！」

「はああ？」

何を言っただこの女、とツツコム前に女性は更に告げる。

「すでに向こうにはね、連絡ついてるよ！」

「いや……………オイ……………」

「ちーちゃんのことは覚えてるでしょ？うん、大丈夫大丈夫！寂しくなったらいつでも私に電話してね？」

「だから待て……………」

「ちーちゃんの弟のいっちゃんって子がいてね、それがようちゃんと同じ年でまた可愛いの……………あ、焼きもち焼いた？」

「話聞け！！放り出すぞ！？」

空中で急停止して、腕の中の女性を怒鳴りつける。

「お前はいつもいつもそうやって……………」

「ついでにようちゃんの預金口座も私の名義にしておいたよー」

「何のついでだ！」

勝手に自分のライフラインを確保して脅してくる女性を怒鳴りつけようとした瞬間、少年の動きが止まる。

それはいつものこと。

女性が口元だけ笑って目が笑わずにこちらを見てくる、この目をするときは何かしらの意図がある目。

この非常に評価に困る美女……善意とも悪意とも無邪気とも邪悪とも、どれにでも取れることを平然とする目の前の女性が時々するこの目は少年を非常に困らせる目なのだ。

少年が押し黙ったことを確認した女性は、豊満な胸元から一つのデータスティックを取り出して少年の目の前に差し出し、再び満面な笑みを浮かべて言い放つ。

「ようちゃんはそこで3年間みっちりと学生生活を送ってもらってから覚悟してね」

「今までさんざん人の人生掻き回しといてどこういう風の吹き回しだ？」

「…………それは…………あらっ？」

女性が手元にディスプレイを表示し、何かの信号をキャッチする。それを見ていた少年は嫌な予感を覚えた。ものすごく嫌な予感がしてくる、絶対に何かある嫌な感じだ。

「軍からスクランブルがかかったね……………このIS（子）、攻撃力は世界最強レベルだけど隠密性は今一つだから」

「なっ！追撃の第一陣が来るまでの時間は！？」

「うん、後30秒ってとこかな？」

女性の返答に背筋を凍りつかせる少年。

「んで！いくらなんでもっ！！」

「だって発見されたの5分前だもん！」

つまりはかなり早い段階でリーダーに引っかけかかっていたのだ。

よくよく考えれば当たり前のことなのだ。ISは世界最強の兵器、そんなものが無許可で自国の上空を飛び回っていて黙っている国軍は存在しないだろう。

だからといってなんで一言先に言ってくれんのかと嘆きたい気持ちを胸いっぱい秘めて少年は言い放った。

「…………振り切るぞ。」

「おう！命かながらのデスレースだぁー！！」

まったく緊張感なく両手を上に上げる女性を落とさないように抱き直した少年のISのスラスターがうねりを上げて火を噴き、夜明け前の空を駆けていく。

普通ならIS操縦者ならともかく、腕に抱かれている女性は完全に失神するGだが、なぜだか女性は平然としている。おそらくISの慣性相殺システムでも服の中に仕込んでいるのだろう。そんなことはこの女性なら容易い事だ。

なぜなら彼女は、世界最強の兵器を一人で作り上げ、世界に「女尊男卑」なる男性には何一つありがたい物を作り上げた稀代の天才科学者にして稀代のトラブルメーカー『篠ノ之束^{しののめむね}』なのだから。

そしてそんな彼女をいつも護衛しているのが、彼女によって存在がひたすら隠蔽され、実しやかに囁かれる噂だけが広がり、本来は『女性にしか使えないIS』を操縦できる『男のIS操縦者』という都市伝説にされてしまっている少年『火鳥陽太^{かとり ようた}』なのだ。

世界最強の兵器を操る少年……火鳥 陽太という都市伝説が日本
につくまでの時間、大体3時間。

ひたすら逃げ惑う陽太の嘆きの声を受け止めてくれる者はおらず、
結局彼はこの日も十分な睡眠も安らぎも得ることはなかったという。

出会い・一つゝ前編ゝ（前書き）

しょっぱなから前・後編に分けちゃったのは、べ、別に読みやすくするためとかじゃないんだからね！www

出会い・一つ前編

そもそも現行の兵器をただの鉄屑に変えてしまふほどの超兵器たるISのもつとも特異な点とはなんであるか？

それは操縦者が全員『女』であるという一点である。

ちなみになぜそうなったのかは未だに解明されていない。

こればかりはISの心臓部であるコアを世界で唯一開発できる篠ノ之束に聞いてみるしかない。まあ、まともな返答が返ってくるかはわからないが。

そしてISが日本で日本人によって産み落とされ、その技術が日本で独占されることを恐れた諸外国は、運用協定という名の脅迫状と意義不服申し立てを含めた通称『アラスカ条約』なるものを成立させ、そして超国家機関であり、半ば不可侵な独立国家を思わせる『IS学園』を設立。世界中はこぞってこの学園に優秀な操縦者のタマゴと試作型のISを送り込んでいた。主に自ISのデータ収集と他国のISのデータを求めて……

だが、世界中を動かすことができるこの学園で、今、とてつもない事態が起ころうとしているのだ……主に『今の世界の常識』ではあり得ない、二名の『男のIS操縦者』の存在によって…

「全員揃ってますねー、それじゃあSHRをはじめますよー」

IS学園一年一組の教室において、自分の受け持つ生徒と変わらな
いやや低めの身長と、それをより強調するかのようなだぼとした
服装と、サイズが合っておらず若干ずれた黒斑眼鏡をかけているシ
ョートヘアの女性、山田真耶^{やまだ まや}はガチガチに緊張していた。

ただでさえこの学園に入学してくる子供達は、厳しい難関を潜り抜
けてきた生え抜きのエリート^{エリート}の卵達である上に、自分のクラスには
『極めて特殊なケース』である生徒を受け持つことになっているの
だ。

しかも今朝になってその事態は更に深刻さを増した。
尊敬すべき同僚であり、このクラスの担任である教師から『もう一
人増えることになった』といきなり告げられ、しかもその生徒が時
間になっても学校に来ず、入学式を過ぎても未だに姿を現さないの
だ。

一応クラスの担任として同僚が校門まで迎えにいつてはいるが、戻
ってくるまでの間クラスの副担任として自分がこの生徒たちを受け
持つことになるのだが、先ほどから『極めて特殊なケース』な生
徒が自分のほうをチラチラ見るは、その生徒のためか、クラスは物
音すら一切立てない静寂に包まれ、それが彼女の緊張感をよりいっ
そう増やしているのだ。

「……………（早く帰ってきてくださいー！）」

心の中で同僚にSOS信号を送ってみるが、その返事が返ってくるのは用事を済ませた後であり、結局同僚が戻ってくるまでの間、このお通夜のようなSHRは終わりが見えることはなかったという……。

その頃、問題になっている校門では、

「……………」

よく鍛えられている過肉厚のないボディラインとスラリとした長身に、黒のスーツにタイトスカートを着こなし、狼を思わせる鋭い目をした女性が腕組みしながら、足元の「それ」を眺めている。

そこにはボロボロになって、地面に行き倒れている少年——火鳥陽太が立派な行き倒れになっていた。

事の結末はこうである。

あの後、腕の中の束からまったく協力も要領も得ないまま、某国の空軍のジェット機やらステルス機やら果ては国家代表のISに追撃され、死に物狂いで逃げてきた陽太は半ば不時着するように、IS学園の前に降り立った。

せめて束がいなければ反撃も出来たのだろうが、彼女を抱えたまま戦闘することは流石に出来ず、逃げの一手をとりながら、ここまできたのにも関わらず束は『おもしろかったよ、それじゃあ私はやることあるのでここでおサラバなのだ！またね！』と何処かに去っていきやがった。

途中で感じていたが日本の領域に入った途端に追撃が止んだのと、日本国側から何のリアクションも起きなかったことを考えると、束は空中で何かしらのハッキングを行っていたのは明白であった。

「（そんな暇があるなら最初から軍のレーダーを攪乱するなり使い物にできなくするなりしろよ……駄目だ、もう何も考えられない……）」

入学式ギリギリまでドッグファイトをさせられ、心身ともに疲れ果てた陽太はもう何も考えることが出来ず、疲労した体に鞭打ってここまでなんとか来てみせたのだが、それももう限界のようであった。

「（もう僕はいいよね……ゴールさせていただきます。おやs・）」

ガスッ！！

アスファルトが砕け散ると同時に、陽太の顔面が地面にめり込んだ。彼の後頭部を力いっぱい踏みつけながら、それはそれはとてつもなく冷え切った視線で織斑千冬は足元の見下ろしながら言う。

「三年ぶりか、でかくなつたな小僧……だが、入学式早々遅刻とはいただけん行為だ」

「！？！？」↑（足元で必死にもがいております）

「他のひよっこ共より先にキサマに言っておこう。私の受け持つクラスにおいて遅刻は厳禁だ。次回からはグラウンド10週だ、例外はないぞ？」

「！？！？！？」↑（まだもがいております）

「そして私の言うことは絶対だ、逆らうのは構わんが従ってもらつていいな？」

そう言つと足を離して陽太を開放する。

足が離れたと同時に起き上がり、胸一杯に酸素を取り込んだ陽太はそのまま千冬に猛然と詰め寄った。

「てめえ！死ぬとこだ・」

「黙れ」

その瞬間、音速で彼の額に出席簿の角が突き刺さった。激痛のあまりに再び地面に転がる陽太に慄然とした態度で千冬は足元に置いてあつた学生鞆を投げよこすのであつた。

「束から預かつているお前の学生服と教科書類だ、三分以内に着替えて教室に向かうぞ？」

「だから、なんで勝手に・」

「黙れ」

今度はこめかみに角が刺さった。

もう痛いんだか情けないんだか、あまりの理不尽に涙がこみ上げ来て大声で泣き出した気分だが、残念ながら目の前の女性には泣き落としなど一切通じないことを陽太は承知していたので、もうどうすることもできずにあきらめて受け入れるしかなかった。

「早く着換えろ、残り2分45秒」

「……………どこで？」

「ああ」

迷わず即答されると陽太は一瞬だけ押し黙ってしまふが、だからといって引くわけにもいかない。さすがに路上でいきなり服を脱ぎだすほど彼は羞恥心が欠如しているわけでもない。

「さすがに外では……………」

「安心しろ」

「？」

「警察が来たら迷わず突き出してやる。しばらく獄中で社会勉強と
いうのも悪くはないだろう」

「せめて身元引受人になるとか言ってよ！」

あまりの扱いの酷さにブチギレそうになるが、さすがにそれをこの
場で押しとどめる陽太。

なんせ、目の前の女性は現時点では非IS操縦者だが、かといって
油断して侮るには過去の偉業が凄まじすぎる御仁なのだ。

「とつとと着換える、ちなみに時間は残り2分。時間がくればパン
ツ一丁でも引きずっていくからな」

「ちよつとまって！」

言ったことは絶対にするのが織斑千冬の特徴である。さすがにパン
ツ一丁で人前に出されてはたまらんと猛烈な勢いで着替えを始める
陽太であった。

「……………」

状況を確認するように思考を高速展開する。

自分は私立のある学校を受験しに来て、なぜかその場でISを動かせてしまい、そのあと黒服の人だとか政府の人だとかあと多種多様な人達のマシンガンのような質疑応答のすえ、ISを実際に動かしたテストを行い、なぜかその相手となった試験官が自爆してしまった末に、このIS学園への入学が決定して、そしてなんだか知れないウチに入学式を終え、沈黙が続くクラスに戻ってきて、その沈黙に耐えかねたクラスの先生らしき人物から順番に自己紹介を行っていき、そして今、自分の番が回ってきてとりあえず名前だけをつたが後に何を言ったらいいのかわからずじまいでこの場に立ち尽くしている。

以上―――おりむら いちか織斑一夏が脳内で一秒で纏め上げた現状であつた。

「（結局何の解決にもなつてねえー！）」

自分の思考に一人ツツコミを入れるが、誰かそれにツツコンでくれる訳でもなく何を話したらいいのかわからずじまいのまま硬直が続く。

「（何の話！？趣味か！？趣味の話か！？だがしかし、自己紹介でいきなり趣味の話をするのも……………サボテンの飼育と枝分けが趣味ですとか言われてもドン引きさせるだけだぞ！！……………ちなみに俺の趣味はサボテンの飼育でも枝分けでもないけど……………」

もう思考はグダグダである。しかも周囲の状況が彼にプレッシャーを与えることとなっていた。

女、女、女……………周囲のどこを見回しても女子しかない。

更に彼に対して女生徒から熱い視線が注がれる。『もつとお話聞きたい』とかいう類の……それが彼に終わりのない終着点を与えていることに気がついてはいなかった。

「……………」

チラッと、彼は窓側の席に座っている一人の女生徒に助けを求めるような視線を送る。

そこに座っていたのは整った素顔と容姿を持つポニーテールの美少女、彼の幼馴染である篠ノ之箒^{しののけ}であった。

だが彼女はブスツとした不機嫌そうな表情のままあえて一夏の視線を無視し続けている。

「（このやろう！それが6年振りにあった幼馴染に対してする態度か！？）」

救援は見事に拒否された。

こうなってしまうてはもはや彼にできることはこれしかない。

意を決した一夏は深呼吸を一度行い、キリつとした態度でなぜか無駄に男前な表情を浮かべてこう言うのであった。

「以上です」

がたたたっ！と何人かの女生徒がずっこけるのが一夏に見えた。何をそんなに期待しているのか？とツツコミたいところだが、今はこれ以上目立つのは勘弁願いたいと思い、席に座りかけた時である。

廊下から、何やら騒がしい声が聞こえてきたのは……………。

「イタタタタタッ！！！」

「黙ってキビキビと歩け、バカ者」

「耳っ！耳が引きちぎれ。」

すさまじい音で教室のドアが開いたかと思えば、一人の男子が宙を舞いながら開いていた座席に突っ込んだ。

人間とはIS無しでも空を生身で飛べるものなのかと、一夏がツツこもつとしたがそれよりも早く席に突っ込んでひっくり返っている少年を見て、もはや何も言うことができなくなってしまふ。

陽太を放り投げた千冬はそのままキビキビと何事もなかったかのように教壇の前に立つと、ドン引きして完全に硬直している生徒達に向かつて、わかりやすく伝えるのであった。

「我がクラスにおいて守ってほしいことは一つ、私の言うことを聞け。守れないと今のように空を飛ぶことになるのでそのつもりでいるように……………」

はい、と答える全員の声。

この時、集まって間もないクラス一同の意思が一つに纏まったのだ。

「ゲウ……………ガクッ」

ひっくり返ったまま動けなくなっている少年のお陰で……………

その後、他の生徒たちの自己紹介も恙無く終了し、残すところはひ

つくり返った机を直しながらひたすら小声で「何で俺が……」「どうしてこんな目にあわんといかんだ?」「俺か?俺はそこまで悪いことしたのか?」とエンドレスでブツブツ言っている少年だけであった。

「おい小僧、早く自己紹介を済ませろ」

「じ、自己紹介?」

「後はお前だけだ。しないなら今日からお前の名前は「ポチ」か「タマ」で済ませるぞ?」

「教師ってそこまで横暴になってもいいもんなのか!?!?」

「私はいいんだ。なぜなら私だからな」

フンツと勝ち誇った顔になる千冬と、齒軋りしながら悔しそうな表情になる陽太を不思議そうな目で見つめる一夏。

「（千冬姉があんなに親しそうに話するなんて珍しいな……）」

自分以外の男と話しているのも結構レアな光景だが、なによりこの二人のやり取りが普段の自分と目の前の女性とのやり取りそのもので、なんだか胸の中でモヤモヤとした感情が渦巻いてたまらなくなる。

そんなモヤモヤを抱える一夏の目の前で、陽太はうつむき肩を震わせながら搾り出すような声で自己紹介を始めるのであった。

「名前は…… 火鳥陽太。好きなものは特に無し、嫌いなものは……」

…… 横暴で暴力しか働かない教師です」

「ほおう?」

挑戦的な目で千冬を睨む陽太と、それを真っ向から受け止める千冬。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことをよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる」

ツカツカと歩きながら自己紹介を始めた千冬の態度に、教室の緊張感が一気に高まる。まるで開戦直前の戦場のソレのような凄まじいプレッシャーが教室を支配した。

ゴクリと、息を呑む一夏の隣の席……つまり陽太の席の前で止まる千冬。

何が起こる？

教室の緊張感がピークに達したとき、それは起こった。

「！！」

千冬が出席簿を高速で陽太の側頭部を狙い撃つ。

他の生徒ならば反応すら出来ない速度であつたが、なんと陽太はそれを自分の腕で受け止め、ニヤリとしてやったといわんばかりの表情で千冬を見る陽太。

対してホンの一瞬だけ驚いたといった表情になる千冬……だが、

「ぐっ！」

次の瞬間、余裕を取り戻した千冬の表情に今度は陽太が愕然となり、気がついた時にはすでに宙を舞っていた。

即座に繰り出した掌抵アッパーによつて顎を撃ち抜かれた陽太は再び華麗に空中を舞っていた。それはそれは見事な放物線を描いて。

「私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛えることだ。逆らっても

いいが私の言うことは聞け、いいな？」

陽太が見事に床に激突して大の字でのびたのを確認した千冬は更に言葉を続ける。

「後、逆らうのは自由だ、元気があるのもいい。むしろそれぐらいの覇気があったほうが私も鍛えがいがあっていい。私は構わんぞ、来なければいつでも来い。手が空いていたならいつでも相手になつてやる」

誰に向かって言ったのか？

だが、完全に恐怖政治を敷いた独裁者の様相を呈している千冬に誰が逆らえるのであろうか？

一夏はこの時人知れず心の中でこう呟いていた。

「（千冬姉……………RPGの職業選択で戦士よりも魔王が似合ってるんだよな）」

一組における支配の構図？を目の当たりにしてすっかり硬直していた生徒一同であったが、休み時間のチャイムの音を聞き我を取り戻し、千冬と真耶が教室を出て行ったと同時に大の字で伸びている陽太の周りに集まる女子一同と一夏。

先ほどまではあまりの事態に気にもしていなかったが、常人なら普通に粉砕骨折になりかねない一撃を顎に食らっていたはず、ひよつとしてかなりの重体なのではと心配になった一夏が彼に触れようとした瞬間、

「……………いつてえゝな、オイ」
「ぬおっ！」

何事もなく立ち上がる陽太に、クラスの全員が後ずさる。だが当の陽太は、何にも気にせずそのまま席に戻ると、机の上に倒れこむようにつつぶせになり、そのまま動かなくなってしまう。ダメージが今頃になってきたのか？
再び心配になった一夏がクラスを代表して声をかけてみた。

「おゝい……………」
「……………」
「おゝい、おゝい……………」
「……………なんか用か？」

返事が聞こえてきて少し安堵する一夏。

「いや、なんか思いつきり千冬姉にぶっ飛ばされてたからさ、心配になって……………」
「ハデに飛んだのは自分から後ろに跳んだからだ。人間が耐えるにはあの人の打撃は強烈過ぎる」
「うんうんわかるぜ、その気持ち……………俺も何回あの重いパンチで頭を殴られたことか……………」
「うるせえ。もう寝かせろ……………こちとら一昨日からまともに寝てねえーんだよ」
「そうなのか、そいつは悪かったな。だけど次も千冬姉の授業みた

いだからそれまでには起きといた方がいいぜ？」

「ちよつと待て……千冬姉？」

陽太が首だけを反転させて一夏の方を見る。一夏は満面の笑みで手を差し出し、握手を求めてみた。

「俺は織斑一夏。千冬姉がお世話になってたみたいだな！」

「織斑……」

ポツリとそれだけ言うと、陽太が再びそっぽを向いて居眠りを開始するために目蓋を閉じようとする。

「そ……そんだけ!？」

「……何度も言わせるな」

握手を求めた状態で宙ぶらりんになっている手をぶんぶん回しながら、再びコミュニケーションを求めてくる一夏にうつとしそうな声で対応する陽太。

「何を求めているのか知らんが、俺はお前なんかに関わりたくもない。話しかけんな」

「な、なんだよ！なんでいきなりそんな・」

「……………」

それっきり何を話しても返事もしない陽太の態度に、一夏は『自分が何か気に障る事でもしたのか?』と考え続けていたが、それも授業開始を告げるチャイムによってかき消されてしまう。

隣の少年のこのつつけんどんとした態度も気になるが、ISの基礎知識などという高等言語は今の自分の脳内には保管されていないことを思い出した一夏は急いで教科書を開き、付け焼刃の予習をしてみるのだったが、それはまったくの無意味だと思い知らされるの僅

かに授業が開始されて10分後のことであつた。

一時間目は何とか我慢してみせた。

イライラと眠気襲い掛かってくるが、それ以上に目の前に立つ黒服の怪物が怖かったから。

二時間目も何とか我慢して見せた。

イライラと違和感と眠気が口から出てしまいそうだったが、それ以上に目の前で睨んでくる黒服の悪魔が恐ろしかったから。

だが三時間目ではもう限界だ。

イライラと違和感と眠気がピークに達したため、休み時間が始まると同時に屋上に早足で向かう。

廊下の途中で女生徒がすれ違つたびにチラチラとこちらを見ってくるが、それがまたイライラを増長させられる。

陽太は女性が嫌いというわけではない。一部を除いて地上のあらゆるものが大嫌いなのだ。

陽太は目の前のドアを蹴破る勢いで蹴り開け、屋上に一人佇む。

当たり前だが屋上は教室よりも空が近い、それに今日はいいい天気であつた。頬に当たる風が春の陽気を内包し、陽太のイライラを幾分か緩和してくれる。

とりあえず給水タンクの上によじ登ると、天辺で寝転び昼寝をすることを決意した陽太。

授業をサボれば千冬が後で怖い、所詮怖いだけだ。
この胸の中に蓄積したイライラに比べればまだ黙殺できる感情である。

「（……………もう何も考えたくない…………）」

昨日、というよりも今日の朝方からかけての劇的な展開に精神力をすっかり使い果たした陽太が目蓋を閉じて、あのひまわり畑の女の子のいる場所に行こうとする。

「（いまさら学生とか言われても…………）」

「……………初日からエスケープとは、やはりお前はいい根性しているな？」

声が聞こえた瞬間、陽太は即座に飛び退いたがここが屋上の給水タンクの上であることを失念していた。

「やばっ！」

あわや、地面に向かって突撃しようとする陽太のベルトを掴んだのは、音もなく陽太の隣にいつの間にか現れた千冬であった。

「落ち着け、それにまだ休み時間内だ……………時間内なら厳密に言えばサボリではない」

「そんなことよりもどうやって現れた！量子化して瞬間移動でもしてきたのか！？」

「ロートルの私に隙を突かれるとは、お前もまだまだのようだな？」

引つ張りあげられた陽太であったが、ブスツとした表情のまま礼を言うわけでもなく、そのまま胡坐をかいてあさつての方向を向く。

千冬はそんな陽太の態度を特に咎めることはせず、黙ったまま仁王立ちして問いかけるのであった。

「そんなに学生であることが不服か？」

「……………下らない説教かよ？」

「落ち着いて聞け馬鹿者……………」

ハア、と一度だけため息をついた千冬が今度こそ陽太の不満の確信をつく質問を投げかける。

「……………相変わらず、他人との距離を取りたがるな、お前は……………」

……………そんなに他人も自分も嫌いか？」

「……………」

「『地上は嫌な思い出しかない。だからそれから解き放たれたいから空を飛び続ける』……………お前が以前話していたISの操縦者をする理由……………今でもそうなのか？」

「……………」

「だが、私はお前がココに来たことは良かったと思っている。それだけは束に感謝しろ」

「何に感謝しろと？」

陽太が重い口を開いた時、千冬が珍しく笑顔になり、

「お前が思うほど悪いものばかりじゃないということさ。そしてお前が思うほどお前は下らない存在ではない」

「……？」

「それともう一つ……………お前の中の思い出は本当にすべて『嫌なもの』しかないのか？」

違う。

そんなはずはない。

なぜなら、今もこの胸の中で微笑んでくれる彼女は確かに美しい……少なくとも空を飛びながらも、地上のしがらみから抜け出せない自分などよりも遥かに……

そんな陽太の心の声が千冬には聞こえたのか……黙って給水タンクの上から飛び降りた千冬は、スタスタとドアに向かって歩き出す。

「今日だけは特別だ。放課後までサボることを許してやる。だが放課後になつたら私か山田先生の所に来い。お前の住む寮の説明がある」

「……………」

「返事はどうした小僧？」

千冬が返事を求めてくるが、今の陽太にはそれどころではない。先ほどの言葉が心の中をグルグルと渦巻き、気がついたときには自分は言うつもりがなかったことを口走ってしまった。

「俺が束の元で何してたか知ってんだろ！ だったら、なんでそんな俺がこんなところで普通の学生出来るなんて思える！！？ おかしいだろうが！ どう考えても！！！」

感情が迸る——もうこうなつては止まらない。

溜りに溜まっていた……否、どうしても他人にぶつけたくてもぶつけれなかった疑念をこんな場所で彼女にぶつけてしまう自分を陽太は止める術を知らないのだ。

「今さら……………今さらだ！！俺は……………」

「……………それでしまいか小僧？」

千冬は冷静な声で陽太にそう問いかけると……陽太がもう言葉を紡ぐことを出来ないとなると、諭すわけでも注意するわけでもなく……ただ微笑んできた。

「!?!?」

そしてそのまま踵を返すと、チャイムが鳴ると同時に階段を下りていく。

彼女の笑顔に戸惑い、返す言葉も見つけられず、ただ呆然と立ちおくむ陽太……

しばらくして我に返り、頭をくしゃくしゃと掻きながら思い切った不貞寝してみるが、彼に再び眠気が襲ってくるまでの間、千冬の問いかけがずっと彼の心の中で木霊しつづけていたのだった。

出会い・一つゝ前編ゝ（後書き）

オリ主が分かりにくい奴になっちゃった気がする……………。

出会い・一つゝ後編ゝ（前書き）

前後編の後半です。

なんか尻切れトンボな感じがしてたまらないな……

出会い・一つ後編

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

陽太が屋上で千冬と会話をしていた頃、教室で一人参考書……本来なら入学前にみるべきものを、穴が開くかと思わんばかりにガン見していた一夏に声をかける少女がいた。

僅かにロールがかった鮮やかな金髪と白人特有の透き通ったブルーの瞳が釣りあがりながら一夏を射抜く。

このいかにも『私は高貴です』というオーラを発している少女の名は、セシリア・オルコット。

イギリスのIS代表候補生にして入試主席の才女である。

「……………」

だが、そんなこと欠片ほども知らない一夏にとってしてみれば、はじめて戦闘機を見た秘境の原住民のような怪訝な表情になって、対応してしまったのは仕方のないことなのかもしれない。

目の前の少女にはその態度がどうにも癪に障ったようである。

「聞いています？お返事は！？」

「あ、ああ。聞いてるけど……………何か用か？」

一夏がそう答えると、目の前の女子はかなりわざとらしく声を上げた。

「まあ！なんですよ、そのお返事？わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

押し黙る一夏、彼は正直この手のタイプは苦手であった。

昨今、ISという超兵器の登場により、女性はかなり優遇されていた。

ISは原則、女性しか操縦できないとされているため、その優遇のされ方は半端ではなく、逆に男など街中で声を掛けただけで犯罪者扱いされてしまうなどということすら起こる始末。

ISを使える「IS操縦者は偉い」「IS操縦者は原則女性。

この構図を持って理不尽な横暴を働く女性が少なからず存在することとを、一夏は憤りを覚えることがあった。

姉の千冬は確かに横暴な面があるが、理不尽な行いは…………… たまにする時もあるが、だが、人間としてやはり間違いは間違いなのだ。

「悪いな、俺、君が誰か知らなくて」

それに、今の一夏は膨大なIS関連の知識を短時間で頭の中に叩き込まなければならぬうちに、想像もしていなかった姉が担任だったということのほうが百倍ショックキングだったため、他の人間の自己紹介をすっかり聞き流していたのだ。

それに隣の席にさつきからいない、自分以外で唯一の男子のことも気になって仕方ない。

よってセシリアに割く意識の度合いが限りなく皆無になっていたの

だが、それがいけなかったのかもしれない。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「あ、質問いいか？」

「ふん、下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですね。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

こけた。

その瞬間クラスメイトの何人かが盛大にこけた。どうやらかなりの人数に聞き耳を立てられていたようだ。

目の前のセシリアにいたっては、ものすごい剣幕で額に三本ほど血管が浮き出てもおかしくないほどの怒りに燃えていた。

「あ、あ、あ……………」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

「……………」

セシリアは怒りが脳内を一周して逆に冷静さを取り戻し、心底頭の痛い返答をしてくれた目の前の一夏に、憐れみすら秘めた深い深い愚痴を話し出す。

「信じられません。信じられせんわ。極東の島国というのは、ここまで未開の地なのかしら？ここまで文明人の常識が通じないなんて…………アレなのでしょうか？実はまだテレビが普及していないとか、ラジオが最新文明機器だとか、そのレベルの……」

「日本は昭和初期から遥かに成長してるよ…………それよりも早く座

「なくてもいいのか？」

目の前ですでに着席している一夏を見て、怪訝な表情になるセシリア。みれば他の生徒もすでに着席を済ませており、視線をさらに教卓のほうにむけると困った顔の山田先生がこちらを心配そうに見つめていた。彼女だけが授業開始のチャイムに気がついていなかったのだった。

「セシリア・オルコット」

そこへ凜とした声でセシリアのフルネームを言う千冬。しかもすでに自分の隣にスタンバっている始末である。

セシリアが何か言い訳をしようと必死に思考を張り巡らせるが、だが、彼女が何か言う暇もなく、満面の笑みを浮かべた千冬の出席簿がセシリアの頭部を華麗に打ち抜くのであった。

「ではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目までとは違い、教壇の上には山田ではなく千冬が立っていた。よほど重要なことなのか、同じ教員の山田までノートを取り出してしっかりメモしようと気合いを入れている。

だが、一夏は先ほどから教壇よりも隣の無人の席が気になって仕方ない。

「（アイツ……結局戻ってこなかったな）」

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな」

ふと、思い出したように千冬が言う。

クラス代表とは生徒会の開く会議や委員会への出席………いわばクラス長のようなものであり、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものである。と山田先生が教師らしい表情で説明してくれたのを聞いた一夏は、とりあえずそのクラス代表には自分では選ばれることはないから安心だ、と暢気に構えていた。

「（ISの知識無いし、男の俺が代表ってことは………）」

「はい！織斑君を推薦します！」

「（そうかそうか、俺以外にもこのクラスに織村がいるのか……）」

「私もそれがいいと思います！」

暢気にうんうんとうなづく一夏………だったが、ふとあることに気がつく。自分以外に織村っていたっけ？

「では候補者は織斑一夏と………他にはいないのか？自薦他薦は問わんぞ」

「俺！？」

興奮のあまり席から立ち上がる一夏。千冬はそんな一夏を冷たい視線で射抜く。

「織斑、邪魔だ。座れ。さて、他にいないようなら無投票当選だぞ？」

「ちょ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな・」

「自薦他薦は問わんと言った。そして他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上覚悟をしろ」

「い、いやでも………」

まだ反論を続けようとした一夏を、突然甲高い声が遮った。

「待ってください！納得ができませんわ！！」

救う神が現れた。と感動した一夏が振り返る。

パンツと机をたたいて立ち上がったセシリアは、感情のまま言葉を続ける。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！」

前言撤回。どうやら彼女は自分を救うつもりはアリの頭ほどもないようだ。一夏は心の中で呟く。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

追加。どうやら自分は人間から猿に格下げされたようである。と心の中で呟く一夏。

「いいですか！？クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

興奮冷めやらぬ———というか、ますますエンジンが暖まってきたセシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒げようとするが、その時、それを聞き流していた千冬がボソリと呟いた。

「実力だけが基準なら、ここにいない小僧が代表なのだろうが……あいつはする気はないだろうな」

「そう、実力だけなら小僧であるわたくしが……って、はい？」
「………気にするな」

セシリアは突然話の腰を折られて、茫然となる。だから一夏は代わりに聞いてみた。

「千冬姉、あの………」

「『織斑先生』だ」

「はい………織村斑先生」

「なんだ織村？」

自分の姉に名字で呼ばれるというのはなんだか妙な違和感があるな
と思いながら、一夏は言葉が続ける。

「火鳥って、そんなに強いんですか？」

「………強いな」

「どれくらい？」

一夏以上に情報がない男子。前情報もなく千冬に連れてこられた少年ということで、女子生徒も興味深深と言った表情で千冬を見つめる。

そして千冬が重い口を開いた。

「………現役時代の私に匹敵するくらい………」

「………!?!?!」

「という冗談は置いといてだ………」

教室にすぐさま戦慄が走り、緩和される。

織斑 千冬——元日本の代表を務めていた、第1回IS世界大会
モンド・グロッシン
総合優勝および格闘部門優勝者。公式試合で負けたことがなく、誰もが認める世界最強のIS操縦者だった彼女に匹敵すること
がどれほどのことなのか。

もしそれが本当なら、それは現時点で世界に並ぶものがない最強の実力者ということになる。なぜなら千冬は第一線を退いており、自分のISを保有していないからだ。

だが、さすがにそんな現実感のない話は皆はすぐには信じられなかった。それに千冬がすぐさま冗談だと言ったことをすぐに鵜呑みにするのであった。

「とりあえず織斑、オルコット。お前達は試合をしろ」

「試合？」

「一週間後の月曜の放課後。場所は第三アリーナで行う。両名はそれぞれ準備をしておくように。いいな？」

勝手に決定してしまった……と嘆く一夏であったが、そこは持ち前のポジティブ精神で乗り切ってみせる。

「（一週間あれば基礎ぐらいはマスターできるだろうし、そんなに難しいものでもないだろう。入試の時は一発で動いたし、まあなんとかなるか）」

「逃げたいのであれば構いませんわよ？」

「誰が逃げるか、下手な挑発してくれるんじゃないかねえー！下手なのは自分の国の料理だけにしてる！」

とりあえず挑発には挑発でかえしてみる一夏。だが、その一言がい

けなかったのかもしれない。

本日最高点の沸点にまで達したセシリアが、鬼の形相で一夏を睨みつける。

「言いましたわね！わたくしの祖国を侮辱しましたわね！？いいですわ！！きつちりかつちりみつちりと叩き潰してあげますわよ！」

「話は決まったな……………では授業を始める」

両者の話が一応の決着がついたところで、千冬が改めて授業開始の合図をするのであった。

放課後。すっかり昼間のそんなやり取りなど覚えてもいられないぐらいに疲弊しきった一夏が机にうなだれていた。

本日で得た一夏の重要事項。

1・IS関係のお話は自分には辞書がないと理解できない。だがISの辞書などない。よって本日はほとんど授業の内容などわからなかった。

2・日本に初めて来たレッサーパンダよろしく、何をやるのも女子の視線が気になって仕方ない。昼間に学食で何を食べたのかすら覚えていないくらいである。

「しんど・・・」

完全に精神力と体力を使い果たして動けなくなる一夏……………だがその時、教室のドアを開く音が聞こえて思わずその方向に振り替える。

「……………」
「……………よう」

ばつの悪そうな顔で入ってきたのは、もう今日は帰ったかと思っていた陽太であった。

ドアを開いた状態で一夏から僅かに視線をずらし、立ちすくむ陽太。そしてその態度に戸惑いを覚える一夏。

「（朝とはエライ違いだな）」
「……………まだ居残ってたのか？」

陽太の方から話しかけてくれたのが、よほど嬉しかったのか、一夏は今まで感じていた疲労を忘れて飛び起き、返事をする。

「ああ！それにしても大変だったんだぜ？お前がいけないせいで、イギリス代表候補生にいきなり喧嘩売られるわ、そんでもってクラス代表戦に出馬されかけるわ、授業の内容がさっぱりわかんねえーわでよ」

「どれもこれも俺が関係してると思えんが、確実に最後のは俺は何一つ関与しとらんだろ？」

「あ！そついやそつだな……………」

ハハハッとおどける一夏を尻目に、陽太は自分の席に行くと言ってあつた鞆を取り出し帰る準備を始める。

「そついやお前、今までどこに行ってたんだ？」
「……………屋上で寝てた」
「……………よく千冬姉に見つからなかったな……」
「……………情けかけられたんだ」

「はい？」

どういう意味かと問いかけようとするが、さっさと身支度を済ませた陽太が鞆を持って教室を出て行くとうとしていたので、続けて自分も鞆を持って教室から一緒に出て行く。

夕暮れ時の廊下を歩く陽太の後ろをついていく一夏。夕日は西の空で赤々としており、そこらかしらから女子の声が聞こえてきた。恐らく部活をしている生徒たちであろう。

だが、玄関とは違う方向に歩いていく陽太に、一夏は問いかける。

「どこ行くんだ。玄関はこっちだろ？」

「帰る前に千冬さんかメガネ掛けた先生に声かけるように言われているんだ」

「ああ、それで……………」

と、その時ちょうど職員室の前に来た時、出てきた山田先生が二人を見つけて声をかけてくれる。

「ちょうど良かったです、二人とも。寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

一応、この学園は全寮制であり、その理由は国家や企業から国防を担うであろうＩＳ操縦者を保護するという目的なのだそうだ。

「でも俺の部屋って決まっていなかったんですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅からの通学だって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理やり変更させてもらいました」

やはり男ということでかなり気を使われているらしいと解釈した一

夏は、とりあえず紙とキーを受け取り、その足で部屋に向かおうとするが、ふと、あること疑念が浮かぶ。

「俺の荷物とかどうな・」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

職員室のほうから声がした。間違いなく千冬だと確信する二人。とりあえず気兼ねする理由が何一つなくなったということで、一夏は自宅より学園内の寮のほうに登校に便利だし、なにより水道光熱費全部ただじゃないか！と勝手に納得して、寮に向かおうとする。陽太も今日の寢床を確保したことだしと、一夏の後にくる形で歩き出す。

「あの………お二人とも、少しよろしいですか？」

が、背後から山田先生が声を掛けてきた。振り返る二人。

「？」

「どうかしたんですか、山田先生？」

だが、声をかけた山田先生はなぜか頬を赤らめながら、胸の前で指をモジモジとしだす。

「お、お二人が女生徒の住んでいる寮に行くにつれて、いくつか確認しておきたいことがあります………そ、その……や、やっぱり男の子ですから、そういうものがあるのも仕方のないものだといふのは、私もきつちりと理解していますんで、その辺りは誤解しないください。ですから………そ、その……、お、お、お、お二人が、その………せ、生理的な欲求をか、感じてしまう女性のた、タイプとはどのようなタイプなのかな………ということをお聞きして

おきたくて……あ！こ、これは決してやましいことがあって聞いているわけではなく、これはあくまでも女生徒と貴方がた男子生徒とが円滑かつトラブルが起らないようにするために、聞いているのであって、決して私がそのタイプだったら嬉しいなあ〜とかいうことを考えながら聞いているわけではなく、そうこれはe t c e t c」

エンドレスな展開になりそうだと判断した陽太がとっと歩きだし、それを一夏が走って追いかけて行ったことに、山田先生が気がついたのは完全に日が沈んで辺りがすっかり暗くなったところだったらしい……。

「えーっと、ここか。1025号だな」

「…………隣か」

すっかり自分の世界に入り込んだ山田先生を放置してきた一夏と陽太が、寮内にある自分の部屋にようやくたどり着く。

ここにくるまでも、道すがら女生徒達からの質問だったり、熱烈な視線だったり、果ては二人が並んで歩いているだけで飛び交う「腐女子的関係」に発展して…………流石にこれには陽太も呆れたが、ともかくそうついた歓迎を受けた一夏がすっかり精神的にやつれ果て、

夜も早くとつと眠りたくなってきていた。

「同部屋じゃないのか？」

「お前も急みたいだったけど、俺はそれに輪をかけて急だったからな。準備ができなかったんだろ？」

「そうか……………まあ、お隣同士、これからも仲良くしようぜ！」
「……………」

一夏のその言葉には何も答えず、鍵を開けてそのまま部屋に入っていく陽太。

『無愛想なのかな、だけど拒絶されてるみたいじゃないし、まあ、いいか！』と希望的な解釈をした一夏が部屋に入ろうと鍵を差し込む。だが、

「あれ？……………カギ空いてる？」

「俺の部屋よりもずっといいじゃねえーか」

急に用意してくれた部屋とは思えないぐらいに、中の調度品も、ベッドの感じも清潔感があり、そこいらのビジネスホテルよりもずつと高級感がある。

部屋の明かりもつけず、二つあるベッドの窓側の方に腰を下ろした

陽太は、とりあえずズボンのポケットから数少ない私物の一つである携帯電話を取り出し、短縮ダイヤルを押す。

数度の電子音の後、電話が繋がると、いきなりハイテンションな声が受話器を通して聞こえてきた。

『ヤッホー！ー！ようちゅあんに愛されて三十年の束ちゃんだよー！！』

「……………」

『あり？リアクションがない……………ひょっとして寝落ち？』

「もうツツコミをいれる気力も残ってないだけだ」

『起きてた、起きてた！もう……………電話しておきながら寝るなんてようちゃん実は器用な子？』

「本題に入ろう」

会話のキャッチボールをするのもしんどいので、とりあえず彼女に向ってストレートをブン投げる陽太

「何を考えて俺をIS学園に入れたんだ？」

『ああ、そのことか……………！』

「お前は人格が歪んだサディストなのは先刻承知だから、やっぱり、俺に対しての嫌がらせか何かか？」

『んんん？どういふことかなそれは？』

「とぼけるな」

陽太の声の温度が下がる。

だが受話器の向こうの相手は、おそらく一ミリたりとも、その笑顔を崩してはいないだろう。そのことが余計に陽太には腹立たしかった。

「今さら俺が普通に学生？お前のもとで戦争ばかりしていた俺が

？戦う以外のことができない俺が普通の奴らと一緒に仲良くお勉強
「？」

『……………』

「ふざけるのも大概にしろ！俺がそういうのが大嫌いなのは知って
んだろ！」

腹立たしかった。むかついた。イライラする。

自分が普通じゃないことを思い知らされているような気がして。

お前は普通に生きられないんだ、そうこの女に言われている気がして。

『あの少女』との約束もどこか遠い思い出にして、戦うためだけに
空を飛び交う生活をしていることを思い知らされる気がして。

まるで、自分が空を飛ぶ前、あの少女に出会う前、地上で一方的に
踏みにじられていた頃に戻ったようなひどい劣等感が心の中を満た
してきて、頭が沸騰していた。

『うゝん……………私、ようちゃんがなんでそんなに怒ってるのか、わ
かんないや！』

「！！！！」

『だけどね……………』

思わず携帯を壁に叩きつけようとした陽太であったが、その束の声
を聞いた時、動きを止めてしまう。

『ようちゃんは優しくて暖かだよ。うん、それは間違いなく！』

「ふざけん。」

『ふざけてなんかないよ。ようちゃんは優しくて暖かだよ』

これだから、この女は苦手だ。と陽太は内心毒づく。

人を平然と傷つけるような言動をしたと思ったら、次には善意の行動も起こす。

善い事と悪い事を交互にするから、その一面だけの判断がしづらくてたまらない。

『んふふふ……』

「……………なんだ、気持ち悪い」

『ほ・れ・た！でしょ？』

「切るぞ」

『あ、ちよつと』

会話を無理やり終了させる。

これ以上束のペースに巻き込まれるのはごめんだと、呟きながら携帯からわざわざ電池を抜き取り、隣のベッド枕の下に本体を入れた。会話が終了したのち、陽太はごろんとベッドの上に寝転がり、しばらくまどろんでみる。

今日一日で色々なことが起こりすぎて、正直疲労もたまっている。

「女は……………これだから……………きらい……………」

そのまま制服も脱がずに寝てしまおうとしていた陽太であったが、突如隣の部屋から何やら男の叫び声が上がったかと思えば、何かを破壊する音が聞こえてきた。

「……………素直に寝かせろよ」

もう、これ以上の面倒は御免だと思いながらも、隣の部屋にいる少年のことが一瞬頭をよぎり、しゃあないと呟きながら起き上る陽太。部屋のドアを開けた時、すでに人だかりが結構出来ていて、なにや

ら穴だらけになったドアの前で土下座しながら頭の上で合掌する一夏の姿があつた。

「……………あ、陽太！頼む、助けてくれ！」

「……………なぜ、すでに呼び捨てになつてんだ？」

「え？……………俺達、友達だろ？」

「勝手に決めるなボケ」

何やら勝手なことを言う一夏を見た陽太は『俺の周りには自分勝手な人間しかいないんだな』と内心で嘆いた。

その時、ボロボロになったドアが開き、中から道着を着たポニーテールの少女——篠ノ之箒が出てくる。

強気な目と、白いリボン、年代では平均的な身長ながらスタイルもよく、出る場所が出て引つ込むところが引つ込んでいる美少女であつたが、今、彼女が発しているのは紛れもない殺気である。どこの決戦場に向かうのか？と、思わず口から出そうになった陽太であつたが、それはとりあえず心の中にしまうことにした。

「とりあえず何したんだ、お前？」

「なにもしてねえーよ！部屋に入ったらコイツが風呂から出てきて・

」

「……………」

顔を真っ赤にして木刀を構えなおす箒を見て、再び慌てる一夏。そんな様子を見ていた陽太は『アホらし過ぎる』と毒づいて部屋に戻ろうとする。その時、それを見ていた他のギャラリーのある言葉を聴いて、思わず足を止めるのであつた。

「抜け駆けしちゃ駄目だよー！」

「織斑君総受け言つのも良いわね……………」

「篠ノ之さん大たん！」

「……………篠ノ之？」

篝の苗字を聞いた瞬間、思わず振り返る陽太。
それを見た一夏は、のんきに紹介をするのであった。

「あ、コイツ、篠ノ之篝……………俺の幼馴染なんだ」

「私はお前みたいな変質者を幼馴染に持った覚えはない」

「え！変質者って……………」

そんな幼馴染二人のやり取りも聞かず、陽太はポツリとある人物の名を無意識に発してしまう。

「篠ノ之……………まさか束の……………」

「オイ陽太……………お前、束さん知ってんのか？」

「……！」

自分の失態を自覚して、思わず二人に背を向けて早足にその場を立ち去ろうとする陽太。だが、彼を呼び止める人物がいた。

「待て！お前、今の口ぶり……………姉さんのことを知ってるのか！」

束を姉と呼ぶ篝である。

そして陽太は今のやり取りで、二人の関係が何なのかを悟る。悟ったがゆえにこれ以上は話すべきではないと判断し、ぶっきらぼうに言い放つ。

「知ってたとして、何で俺がイチイチ話す必要がある、『貴・方・様』？」

「……！」

あえて皮肉っぽく笑いながらそう言われ、箒の頭に一気に血が上る。よく知りもしない人間同士であるためか、はたまたお互いに割りと攻撃的な気質であるためか、一気に二人の間の温度が低下し、周囲が緊張感に包まれる…………。

木刀を構え直す箒と、右手の指をポキポキと鳴らす陽太。

このままいきなり殴り合いの喧嘩が始まるのかとギャラリィが唾を飲み込み、一夏が止めるために割って入ろうとしたときであった。

「何をしている、馬鹿者どもっっ！！！！」

そこにタイミングよく、白いジャージに着替えた千冬が人だかりを割って、現場に来てくれる。その怒号に箒は我に返り、木刀を背中に慌てて隠し、陽太は一度だけ深い溜め氣にをつき、部屋に戻ろうとする。

「何をしている？そしてどこに行く気だ、小僧？」

「部屋に戻るだけだ」

「説明しろ、何がどうなってこうなった？」

「そこに転がってる奴にでも聞け。そして安心しろ、まだ何も起こしてないさ」

「そうなのか？」

「ああ？……………ああ…」

中腰の状態で固まっていた一夏に真相を問いただした千冬は、手をヒラヒラとして部屋に入っていく陽太に、背後から一声かける。

「一年の寮の寮長は私だ。今後、如何なる理由があろうとも揉め事を起こせば……………また飛ぶことになるぞ？」

「そいつはゾツとするな……………気を付けますよ、織斑先生」

あんまり気にしてない様子であるが、一応返事をしたということ。陽太のことは一旦置き、目の前で未だに固まっている弟とその幼馴染と、ボロボロの穴だらけの扉を見て、千冬はそれはとてもとても残忍な笑みを浮かべながら、指をポキポキと鳴らし始める。

「さて……………入寮そうそう、なぜかボロボロの扉が現れた理由を二人にしっかりと話してもらおうとするか……………」

その笑みを見た瞬間、血の気が引いて青ざめる二人。みればさつきまでの人だかりもすでになく、周囲は静寂に包まれていた。

上手い言い訳探す一夏であったが、だんだんとオーラとプレッシャーを強める千冬相手に、彼はこう答えるしかなかったという。

「ごめん……………なさい、先生」

出会い・一つゝ後編ゝ（後書き）

さて、醍醐味と言える戦闘シーンにいつになったらたどりつけるのか………

小競り合い（前書き）

今回は若干短めです。

小競り合い

――結論、なんともなりません。

机の上でグロッキーになって、突っ伏せる一夏。

あの、嵐のような初日から開けた、次の日。

二時間目が終わった時点で一夏は自分が置かれた状況が、限りなくまずいんじゃないだろうかという結論に行き当たる。

まず、昨日同じく授業の内容が分からない。はっきり言えば公式ないと絶対に解けない数学の問題と同じである。

次に、自分にはそのための予備知識がない。昨日も結局あの後、千冬からありがたいことこの上ない説教を食らった上に、同室の箒からも色々聞かれた上に喧嘩という名のリンチを食らって殴られた。なんで殴られる必要があったのだろうか？自分はただ、喧嘩の途中で偶然手に取ってしまった箒のブラジャーを見て、箒もブラジャーをつけるようになったんだなと感心しただけなのに。

正直に言えばかなり絶望である。来週にはセシリア・オルコットとの試合が控えているというのに、この調子では、公衆の面前でボッコボコにされることは目に見えている。

「どうすりゃいいんだよ……………」

頭を抱えて、しまいには髪をぐしゃぐしゃと掻き毟ってしまう一夏……と、ふと、彼の隣で購買部で買った焼きそばパンを一人食している陽太が目に入る。

「なあ」

「食事中だ……後にしろ」

「いや、今すぐに答えてもらいたいんだ！ってか、もう一分一秒も惜しいぐらいにやばいんだ！！？」

「便所か？それなら突当たりを・」

「トイレじゃねえーよ！」

ぐあつと目が血走って、陽太に近づく一夏。

陽太はかなりうつとしそうにしながら、食べ終わった焼きそばパンのビニールをくしゃくしゃにまとめて、ごみ箱に投げ捨てる。

きれいな放物線を描いてごみ箱の中に入ったのを確認すると、机に置いてあったコーヒー牛乳の紙パックを取り、ストローを吸うのであった。

「とりあえず言ってみろ」

「ああ、実はな・・・」

赫々云々

「つまりはこういうことか。イギリスくんだりの代表候補生と試合を来週することになった」

「そうだ！」

「だがお前には専用のISもなければそもそもISの操縦をする知識すらない。もちろんIS着て、実戦をしたこともない」

「そついうことだ！」

「結論。大人しく死になさい」

「はやっ！」

あっさり結論を出した陽太の回答に、一夏は愕然となる。

「当たり前だ。そもそも一週間かそこらでどうにかしようというのがすでに無謀に等しい……………あきらめて土下座したら？」

「嫌だ！」

そこはきっぱりと否定する一夏。彼にも譲れないものがある。そして、その譲れないものにかけて、土下座して負けを認めるなどするわけにもいかない。

だが、その時、ちょうど話題になったのを聞きつけたのか、二人のそばにセシリアが近寄ってくる。

「その殿方の言うとおりですわ。負けを認めて今すぐ土下座するというのであれば、わたくしとしてもこれ以上の追及は致しません」

「……………だ、そうだけど？」

すでに勝ち誇っているセシリアと、やる気のかけらも見せない陽太の態度に、なんだかますます怒りが募ってくる一夏。

だが、それを知ってか知らずか、セシリアはますますヒートアップする。どうやら自分の言動に自分に酔うのがここ最近の彼女の特徴といえるのかもしれない。

「あら、あなたはご自分のご身分をよくご存じな御様子ですわね？」

「ソウツスネ……………」

単に構うのもしんどいといった感じなのだが、いまいち彼女に伝わりがたかったようだ。

「ちょっと待てよ！」

陽太よりも一夏の我慢が先に限界に達する。机をバンツ！と叩いて立ち上がると、キツと睨みながらセシリアを見る。

そのあまりの剣幕に後ずさりするセシリア、そして周囲のギャラリィ。

だが、次のセリフを聞いた瞬間、今度はそれがどつと爆笑の渦に変わるであつた。

「そこまで言われちゃ男が廃る！ハンデはどのくらいがいい？」

「はい？」

「俺がどのくらいのハンデつけたらいいのかつて、聞いてんだ！」

一拍置いて、爆笑が巻き起こつた。

何が起こつたのか、何で笑われているのかわからない一夏と、周囲を冷めた視線で見る陽太。

本気で笑う周囲を見回した一夏は、思わずしまったと思つた。

今の世界では男は圧倒的に弱い。腕力なんか全く通用しないし、いかにISを扱えるのが一部の人間だけだとしても、女子は潜在的に全員使える。

もし戦争にでもなろうものなら、三日天下どころか三時間天下も維持することはできまい。

「お、織斑くん。それ本気で言ってるの！？」

「男が女よりも強かつたのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それはISを使えるかもしれないけど、ちょっと云い過ぎだよ」

次々と周囲からおこる嘲笑に、人知れず拳をギュッと握り締める一夏に気がついたのは、隣の陽太と、窓側の席からじっと見つめていた箒だけだっただろう。

「…………じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのかと迷うぐらいですね。ふふ、男が女よりも強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

さっきまでの激高もたじろぎもどこへやら、セシリアは明らかな嘲笑をその顔に浮かべていた。

歯軋りする一夏を尻目に、ちょうど休み時間のチャイムが鳴り、人だかりはまばらに散り、セシリアも自分の席に戻っていく。

一夏も自分の席に着くが、腹の虫は収まらない。来週の決闘ではなんとしても勝利しなくては……………そのためには。

この瞬間、彼のやるべきことは決まったのである。

「そついやさ……………」

「…………なんだ？」

昼食時、有無も言わず学食に箒を捕まえて一緒に来た一夏は、手に持った日替わり定食をテーブルに置き、箒が着席したのを確認した後、突然、頭を下げた。

「ISのこと教えてくれないか？これじゃあ来週の決闘で何もできずにまけそうなんだ」

「下らない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

それを言っちゃあ、おしまいよ。というより、決闘を決めたのは千冬姉なんだけど。と反論しようとしたが、とりあえず一夏は黙ってみた。言い訳すると『男らしくない！』とか『女々しいぞ！一夏！』とか言つて殴られそうだからである。

「それをなんとか、頼むっ！」

箸を持ったまま、手を合わせて箸を拝む一夏。
男が一度やると言つた以上後には引けないし、やるからには勝たねば男が廃るというものだ。

「……………」

「（ヘンジガナイ。タダノシカバネノヨウダ）」

「殴るぞ？」

思考を読まれたことにビビッて腰が引ける一夏であったが、突如、彼に声をかけてくる者がいた。

「何をしている馬鹿者。食事中に無闇に席を立つな」

「あっ！」

一夏と同じ日替わり定食を持った千冬と、なぜか嫌な顔を隠そうともせずにカレーライスを持っている陽太である。

「どうして……………」

「ここは教職員も兼ねての食堂だからな」

「いや……………」

「んっ？こいつか？」

隣の席に座る二人に、軽い会釈をする筈。おもに千冬に対してだが。

「私の授業中に早弁しようとしたバカに、説教のひとつでもしよう
と思ってな」

「だっってお腹が……………」

「黙れ。食事が終わったら、次の授業が終わるまでグランド10週
だ」

「ムリだから！物理的にムリだから！！」

ちなみにグランドの一周は大体10kmと言われている。

そんないじめの現場を目の辺りした一夏であったが、あることを思
い出し、千冬に頼み込む。

「千冬ね・」

「織斑先生だ」

「お、織斑先生……………てか、なんか先生って言うのに違和感が」

「今すぐに慣れる。私はお前を身内だからといって特別扱いしない」

二人のやり取りを横目に、カレーを食べようとしていた陽太であっ
たが、ふと筈がこちらを睨みつけていることに気がつく。大体、何
が聞きたいのかわかつてはいるが、あまり答えたくはない。

まさか、お前の姉ちゃんに勝手気ままにテロ活動してます。証拠は
今のところ残ってません。なんて誰がいえようか？
どうしたものかな、と溜息をつく陽太。

「篠ノ之？お前、束から聞いていないのか？」

「……………なにをでしょう？」

千冬がそんな二人のやり取りに助け舟を出してくる。

「火鳥はついこの間まで、束の助手をしていたんだ」

「……!?」

「助手!？」

「束さんの!？」

驚く三人。だが、千冬はシレっとした顔で鯖の骨をばらしながら話を続ける。

「IS関連の助手をしていてな……一夏のデータをフィードバックして、すぐにIS適正を見いだされ、データ収集を兼ねてこの学園に転入してきたんだ」

「ああ、それで、俺以外にも男がISを操縦できるのか……」

「そういうことだろ、小僧？」

「……………」

ようは、一夏のデータがあつて自分はISを操縦できてます。どうしてそんなすぐにできたのかと言えば束の所にいたからです。

千冬がいったこの話、かなりの捏造が含まれていることを知っているのは、当の陽太と話をしている千冬だけである。

「(……………また、そんな口からでまかせを)」

「(対外的にはこれでいく。文句は言うな)」

眼だけで一瞬に会話を成立させる二人。

確かにそこそこ怪しい話であるが、そもそもIS開発者である篠ノ之束が世界最高の天才であり、公の場には一切姿を現さないことで有名である以上、おそらくばれよることもない。

そして何よりも、千冬の話に今の所自分に生じるデメリットはない以上、わざわざ真実を話すことないか、と判断した陽太は、この話

に乗ることにした。

「へい。まったくもってその通りです」

「ということだ。理解できたか篠ノ之？」

「は、はい……………」

今一つ納得できてなそうであるが、これ以上は追求しても仕方ない
と思った筈は、とりあえず警戒心のレベルを一つ下げる。あくまで
下げたのは一つだけであるが…。

「ところで、織斑。お前さっき私に何を話そうとしていたんだ？」

「あ！そうだそうだ！！」

本題を思い出し、再び千冬のほうに向き直ると、一夏は頭を下げ、
千冬に頼み込む。その後ろで、筈がギョツとなるのも理解せずに。

「織斑先生、お願いします！俺にISのことを教えてください」

「授業で教えているだろう。それとも補習が望みか？」

更にワナワナとなる筈。自分の役目のはずが……………と、呟いた声は
誰にも聞こえていないはずだった。陽太と千冬を除いては。

「そういうのじゃなくて……………もっと、こう……………本格的な」

「甘ったれるな。基本を疎かにして、何をほざくつもりだ？それに、
お前はただでさえ基礎知識で周りよりも格別に遅れている」

「ぐっ！」

「己の無能を棚に上げて、我々の教導にケチでもつけるつもりか？
1000年早いぞ」

あっさりと正論でぶった切られて、凹む一夏。

だが、千冬もまったく事情が飲み込めないほど空気が読めないわけではない。というか、何が言いたいかはすでに心得ている。彼女は視線を陽太にむけ、悪巧みを考えた悪役のような表情で話を続ける。

「だが、私以外の人間が何を貴様に教えるのかまでは関与できない。そうだよな、小僧？」

「なんだよ、突然……？」

「ここに、ISに関してそれなりに詳しい人間もいるしな」
「！！」

急に明るくなる一夏。ものすごく嫌な予感がする陽太。そしてなぜ私ではないと怒る箒。という三者三様のリアクションをとる三名を面白そうに見つめる千冬。

「なあ！やっぱり頼む！！」

「不可能だ」

「そこをなんとか！」

「専用機もないお前には万に一つも勝ち目無し、やるだけ無駄だ」

「一夏、こんな奴に頼むぐらいなら、私が教えてやる！」

「箒……」

「こんな奴？」

いきなりこんな奴呼ばわりされ、陽太は座りなおしながら、はき捨てるように箒を見て、

「そうだな、教えてもらえ。無様な負けっぷりを。もしくは負けたときの言い訳の仕方か？」

「キサマツ！……それはどういう意味だ？」

「まんまの意味だ。木刀ブンブン振り回すような脳筋女が、ISの

操縦方法なんて知ってるわけないだろうが？」
「！！！！！」

オロオロする一夏を挟んで両者が激しい視線をぶつけて睨み合う。
そんな中でもまったく動じずに食事を続ける千冬は、あることを思い出し、一夏についてだと伝えるのであった。

「織斑…………お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へっ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

「??????」

ちんぷんかんぷんな一夏を見て、溜息をつく千冬。とりあえず掻い
摘んで説明を始める。

「IS操縦者は基本、必ずどこかの国、企業、組織、機関に所属し
ているものだ。理由はISコアの数が467と限定されているからだ」

「へ？なんでそれだけ？」

「理由は何だ、火鳥？」

「どっかのウサミミが新規のコアを作ってない。そしてこれからも
作る気がない。さらにコアの製作技術はウサミミしか持ってない」

「…………というわけだ」

陽太が箸と睨み合いながらも説明したことで、一夏も納得する。

「つまり、どの国、企業、組織、機関も割り振られたコアで研究と
開発と訓練が行っている。ちなみにコアの取引は国際条約で禁止さ
れている。詳しくは教科書を穴が開くほど読み直せ、馬鹿者」

「へ、へい」

「更に専用機は本来、国家あるいは企業に属する人間にしか渡されないものだが、お前と火鳥はレアケースだ。なんせ今までいなかった『男』のIS操縦者だ。貴重なデータ収集を行わねばならない。そういうわけで特別待遇としてISの専用機が支給されることになったというわけだ。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

実験体扱いですか！とツツコミをいれようとしたが、微妙に千冬の手が拳がっていることに気がつき止めた一夏。言葉の途中で鉄拳で静止される気がしたからだ。

「あ、でも……」

「ん？なんだ？」

「じゃあ、陽太はすでに支給されているんですか」

「ああ……」

その話を聴いた瞬間、眼を輝かせる一夏に、陽太はまた嫌な予感を覚える。

「なんだ、その眼は？」

「お前ってホントはすげえー奴なんだな……」

「いや……」

「だから頼む！お前しか頼れないんだ！！」

「それはどういう意味だ、一夏！！」

お前しか！という言葉に激しい反応を示す筈と、もうやってらんねー、と席を立とうとする陽太。そしてそれを阻止しようと必死に陽太にしがみつく一夏。

彼らのこんなやりとを最初は微笑ましく見ていた千冬であったが、

段々と煩さがヒートアップするにつれてイライラしだし、しまいには三人の頭部に拳骨をかまして、結局この場での騒動は終了することとなるのであった。

放課後。

未だにしつこく教えを迫ってくる一夏から逃げるように教室を後にしたよう陽太は、ブラブラと校内を彷徨っていた。

特別やることもないし、寮に帰っても隣は一夏である。

しつこく迫ってこられても厄介なこと極まりないので、彼としてもすぐに部屋に戻ることもできず、結局時間を潰すことしかできずにいたのだ。

「まったく……教えろ、教えろと……お前の姉ちゃんは地上最強の悪魔超人だろうが…そっちに聞けよ」

千冬がこの場にいれば、再び宙を舞いかなない台詞であるが、いい人間に怯えるほど、彼の根性は小さくはない。

だが、退屈は退屈である。どこかの部活に所属しているわけでもなく、また、そんな気は毛頭ない。

結局、どこかで昼寝でもするか、といい寢床を探すうちに、彼はある場所に眼がいく。

「……第三アリーナ」

案内用の看板が目に入る。

一夏とセシリアが決闘する場所であるが、それは今日ではないし、そもそも彼はどこで二人がバトルをするかとかは聞いていない。

「ちょうどいい……ベンチがあるだろう」

アリーナなら座席もあるし、日当たりもよさそうだと、思い意気揚々と入り口をくぐり、観覧席に出る陽太。

だが、そこでは、蒼色の装甲をしたISが空中から射撃訓練用のスフィアを撃ち抜くという訓練の真っ最中であつた。

「ゲッ……………訓練中かよ」

いらぬ騒音がすると、気分がなえる陽太であつたが、フト、そのISを注意深く見る……………というか、あの顔どこかで……と、思い出そうとしていた陽太に、声をかけるものがいた。

「あゝら……………どこの誰かと思えば、身分をわきまえた殿方ではありませんか？」

そう、イギリス代表候補生、セシリア・オルコットである。

特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、王国騎士のような気高さと、全長2mを超えるライフルを手に持ったIS―<ブルーティアーズ>纏う、この戦乙女を前にして、陽太はあることを思い出すのに必死でいた。

「あ、ごめん……………もうちょっとで思い出せそうなんだ」

「はっ？」

「いや、こういうのは自分で思い出したほうがいい……………ええと、

シベリア・マスコットだよな？」

「わたくしは北極圏の出身ではありません！適当な名前をつけないでください！！」

「じゃあクララ・」

「スイス代表でもありません！」

「ハイ・」

「いい加減アル〇スから、お離れなさい！！」

違うのか……じゃあ！といった感じで次々と名前を挙げていくが、そのどれもが一向にセシリアに辿り着けないでいた。

「わたくしの名前はセシリア・オルコットです！」

「！！！」

あ、それだ！と手でジェスチャーする陽太の姿に、どうやら彼女は自分が抱いていたイメージとは全くかけ離れたものを感じる。

目の前のこの男は、自分を恐れるわけでもなく、単に馬鹿にしているだけではないのかと。

「貴方はわたくしを馬鹿にしていますの？」

「相手にする気もないだけだ」

「なお悪いですわ！なんですの、その態度！！？」

憤慨するセシリアを尻目に、陽太は彼女の武装を注意深く観察し始める。

「『BT兵器』の運用を前提にした、レーザーオンリーの遠距離戦用機……」

「あら？名前を覚えることもできない貧弱な頭脳かと思っていましたが、わたくしの名前は貴方にも届いておりますの？」

「ビットによる遠・中距離の全方位攻撃と、高出力レーザーライフルによる狙撃……」

「ええ！！その通り！！！！わたくしの奏でるワルツは見る者全てを虜にしていますのよ！！！！」

「……………」というのがイギリスの公式発表だ。ちなみにこれはデータバンクをネットで覗けばすぐにわかる情報ね」

陽太の最後の言葉にがつくしときたセシリアは、ついにブチキレて、ライフルの銃口を陽太に向ける。

「貴方！！そこに直りなさい！！！」

「……………」理由がさっぱりわからん」

「貴族であり、代表候補生であるわたくしを辱めるその言葉の数々……………」もはや我慢なりませんわ！！」

「そうかそうか……………」ゴメンナサイ、ワー、マイリマシター」

見事な演技である。まるで心が籠っていない謝罪は、頭を下げられた者の気持ちを逆撫でし、怒髪天を衝かせること間違いない。

案の定、陽太のその謝罪という名の小馬鹿にした態度に、額に幾重もの筋を作って激怒したセシリアが、すぐさま陽太をリングの中に入るように指をさす。

「今すぐここにきて、わたくしに成敗されなさい！！！」

「ヤダよ」

「貴方に拒否権などありません！！！」

「やってもいいけど……………」凹ませたくないんだが……………」

陽太の眼が一瞬だけ鋭くなる。

だが怒りに燃えたセシリアにはそのことは届いてはいない。

しばらくにらみ合う両者……そして陽太は、決断を下す。

「わかった。着替えてくるからちよつと待て」

「わかればよろしい！では訓練用の手は・」

「専用機がある」

「！！」

その台詞を聞いた瞬間、セシリアが凍りつく。どこの国・企業・組織・機関に所属しているわけでもないこの男がなぜ専用機を？

だが、陽太は不敵な笑みを浮かべたまま、制服の中から首からかけられた金のチェーンを見せる……みればそのチェーンに『不死鳥』を象った彫刻の彫られた指輪がかけられていた。セシリアのブルーティアーズのハイパーセンサーが、それに即座に反応する。

センサーが表示した情報は次のものであった……

——通常待機状態のISを感知。操縦者、火鳥 陽太。IS名『ファイバード』。戦闘タイプ、高機動汎用型。特殊装備あり——

小競り合い（後書き）

次回こそいよいよバトルです。

更新は来週にできたら……いいな、もし

小競り合い〜深刻化〜（前書き）

というわけで、えらく更新が遅れてしまった作者による初ISSバトル編です。

亀更新になりやすい作者をどうかお許しくださいw

ではどうぞ。

小競り合い〜深刻化〜

時間は放課後、場所は剣道場。
今もまたギャラリーは満載で……………。

「どういうことだ？」

「いや、どういうことって言われても……………」

一夏は箒に叱られていた。

ISの操縦の前に、どれだけ腕が鈍ったのか見てやる！と箒に無理やり拉致されて、手合わせを開始して十分。
結果は一夏の一本負け。

この予想の斜め上……………悪いほうにあるが、とにかく、一夏のこの鈍り具合に、面具をはずした箒の目尻はつり上がっていた。

「どうしてここまで弱くなっている！？」

「受験勉強してたから、かな？」

「……………中学は何部に所属していた？」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ！」

ゲシッ！としないで軽くどつかれる一夏。
六年前ならば立場がまったく逆だったものを……………それにこれは単なる実力差の逆転ではない。

明らかに実践から遠のいていたための負けだというのに、肝心の一

夏はヘラヘラしてやる気に欠けるように見える。
それがなお、箒の苛立ちを募らせているというのに……。

「明日からは毎日私がみっちり稽古をつけてやる！今の一夏はIS
以前の問題だ！」

「なっ！」

「情けない。本当に情けない！！ISを使うならまだしも、剣道で
男が女に負けるなど……悔しくはなにのか、一夏！」

「そりゃ、まあ……格好は悪いとは思うけど」

「格好？格好を気にすることができる立場か！それとも、なんだ？
やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいのか！？」

カッチーン。

さすがの一夏も頭にきて、猛然と反論に出る。

「楽しいわけあるか！珍動物扱い食らって、その上女子と同居まで
させられたんだぞ！何が悲しくて――」

「わ、私とクラスのそんなに不服なのか！？」

だが、怒りにガソリンをぶち込むような物言いに、竹刀を振り上げ
殺気を込める箒。
殺る気だ。

防具もなしに受けるには、あまりの威力が予想されるその一撃を前
に、一夏は必死に逃げ惑う。

「逃げるな！成敗してくれる……！！」

「バ！俺は今防具してないんだぞ……！！」

その光景を見ていたギャラリーからは、ヒソヒソと落胆の声が聞こ
えてくる。

「織斑くんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかな？」

その声は一課にも聞こえていた。

箒が情けないと言っていたが、それは一夏も感じていた。情けない。確かにこれは本当に情けない。

やっぱり男が女に負けることは惨めこの上ない。それに何よりも自分を許せない。

「（こんな有様じゃあ、何かに勝つなんて……それどころか、誰かを守るなんてできるはずもない）」

一夏が意を決して、振り返って箒を真剣な目で見つめる。

その決意に満ちた目を見た箒が、竹刀を振り上げた状態で動きを止めてしまう……ほのかに頬を赤く染めながら。

「なあ、箒……おれから。」

トレーニングに付き合ってくれ……と、頼もうとしたときであった。ギャラリー全員が振り返る大声で、一人の女生徒が道場に走りこんでくる。

「大変よー!!」

全員がその方を振り向く。一夏も箒も……女生徒は、ハアハアと息を切らしながら、だが興奮した表情で叫ぶ。

「今、第三アリーナで、イギリスの代表候補生のオルコットさんと、

男子の火鳥くんがISの模擬戦してるんだって!!」
「なっ!陽太がつ!」

その言葉を聴いた瞬間、一夏は誰よりも早く走り出した。筈も一拍置いて後を追う。

それは純粋な心配であつた。陽太が怪我をしないかどうか。

それは純粋な好奇心であつた。あの思わせぶりの千冬の言葉の意味が知りたいから。

走る走る走る……抑えきれない衝動が体を襲う。

息を切らしながら第三アリーナの入り口を潜り、観客席にまで出る。

そして……一夏は目にする。

―黒い機械の腕―

―青い鋼鉄のスラスターがついた双翼―

―胸に黄金の不死鳥のマーク―

茜色に染まりかけた夕空の中でも、それは一層冴えて見える……鮮烈なる……太陽の……

彼はその時無意識に確信したのかもしれない。自分が目指したいと思える、その場所を……。

イギリスで開発された第三世代IS『ブルーティアーズ』

BT兵器と呼ばれる自立稼働兵器を稼働させるために開発され、そのためか試験運用的なポジションに位置するが、実戦レベルでも十分に通用する性能を有している。

その最大の特徴であるIS名にもなった『ブルーティアーズ』を用いた全方位攻撃と、大出力レーザーライフルによる遠距離狙撃を武器にするISなのだが……。

射撃。射撃射撃射撃射撃。

ブルーティアーズを纏ったセシリアは、そのコンセプトに従い、相手の間合いの外から……遠距離からの長距離狙撃で、『敵機』の撃墜を図っていた。

だが試合を開始してすでに十分以上……六十七口径特殊レーザーライフル>>スターライトmk?<<の銃口から放たれるレーザーは相手にかすることすらしない。

歯軋りしながらも更に追撃で二発。だが横滑りするような動きでそれを回避していく敵機に、セシリアは徐々に言い知れぬ絶望感を感じていた。

ただの一撃も反撃を受けてはいないのに……。

否、ただの一撃も反撃してきていないからだ。

射撃の精度も敵機からわずか数センチのところをちゃんと狙えているのに……。

否、さつきからまるで吸いついたかのように敵機の傍をレーザーが避ける様に飛んでいく。あれはこちらの精度の問題ではない。敵がセシリアの弾道を完璧に見切っている上での神技染みた回避行動で同じ距離を保っているのだ。

更に二撃。敵が動きを止めたところを狙ってみるが、今度はその場でバレルロールするというアクロバティックな機動でこれを回避される。しかも、避け終わった後、唇の動きが『次はもうちょっとひきつけてから』と動いていたのを見て、更に怒りと焦りが心に積もっていく。

だが最初の数分間は偶然で片付けられていたかもしれないが、こうなっては認めるしかない。
目の前のこの男……強い！

篠ノ之束が制作したIS、『ファイバード』

機動力を重視した設計ながら、柔軟性と剛性を失わないフレームと装甲、汎用性の高い武装。そして一撃必殺の『特殊兵装』を装備した、ISと呼ばれる兵器を最も如実に再現したISであり、すでに

『五年』近く稼動し続ける、陽太の信頼する相棒でもある。

特殊兵装のためか、そのことから束曰く『第三世代以上だけど、第四世代でもない、中途半端な第三・五世代!』と称されるこのISを、陽太はその性能を最大限引き出していた。

先ほどから続いている戦闘で陽太が反撃しないのは、そのことで彼女が怒り、本気で自分に向かってくることを知っているからだ。一週間後、一夏が彼女と対戦するに当たって、今のうちに彼女の手の内をすべて曝け出してもらう。武器だけでなく、IS操縦の技量、戦術、戦略、彼女の能力のそのすべてを……。陽太が対戦を受けたのは、なんてことはない。一夏の手助けをするためなのだ。

そして戦闘が続いていく中、陽太は言い知れぬ怒りを胸に覚えていた。

それは彼女にではない。

彼女のISにではない。

イギリス本国のIS開発部にある。

まず、武器のチョイスがまずい。

いくら試験運用でも、実戦で考えれば取り回し重視の射撃兵器ぐらい持たせてやるべきだ。しかもブルーティアーズを放った際、彼女自身攻撃することが不可能になる。

「（ほら、またきた）」

焦れて背部からそのIS名がつけられたビットを4つ飛ばしてくるセシリア。

だが、それはすでに陽太は開始数分でされたことであり、その手が通用しないのも彼女は知っているはずである。

束に以前聞いた話が本当ならば、最大稼動したB.Tはそのレーザーすら湾曲させて相手を攻撃することも可能であると聞いてはいたが、今のところそのレベルの使い手は存在していないらしい。

現にセシリアのビットから出るレーザーは直線のみである。しかも、その起動は一見複雑なように見えるが、その実は単純なパターン化されたものである。

先ほどから見ているとパターンは三つ。全方位から一辺だけを狙った集中砲火。右回りで相手を囲んで上下に機動しながらの波状攻撃。一度に二つ限定の個別攻撃、後二つは手前で浮遊。

どれも候補生クラスならそこそこ通用するかもしれないが、候補生の上位、ましてや代表選手クラスには太刀打ちできないであろう。しかも彼女自身、ビットを操作しているときは動きが鈍り、攻撃してこない。

これではテレフォンパンチである。『今からビット飛ばしますわよ♪』と彼女が言っているのが陽太には聞こえてきそうだった。

「（ビット操作と遠距離狙撃が両立できない。ましてや……）」

陽太が動く。

ビットの間を一瞬ですり抜け、彼女に肉薄する。

「……！」

「……………」

人差し指が、彼女の鼻先に優しく触れた。

本来ならここで武装で攻撃するなり、殴る蹴るでも十分にダメージを与えられたが、陽太はそれをせず、再び間合いを開き、ある程度

の距離まで離れる。

「（接近戦が御座なりにも程があるな……不意打ち食らったら何もできんだろ？）」

陽太はどちらかといえば近接が得意なIS操縦者だ。余裕を持って五回は撃墜できたと心の中でぼつりとつぶやいた。

今のタイミングなら並みのIS操縦者でも致命傷を叩き込める。接近戦用の武装を積んでいるのかはわからないが、あるとしてもあの程度で虚を衝かれるのなら恐らく接近戦は不得意なのだろう。

だが、欠点だらけではない。

セシリアの能力は陽太も認める部分がたくさんあった。

まず狙撃精度が高い。これは毎日の訓練を欠かさず行っている証拠だ。現に初撃を外した瞬間からがりと精度が上がった。最初は挨拶代わりに適当に外したのかもしれないが二撃目以降は真剣に当てにきている証拠である。

「（俺じゃなかったら、とつくの昔に半分ぐらいは当たっていたかもしれないな）」

さらっと自慢しながらも、その狙撃の能力を褒める陽太。

しかもブルーティアーズを手足のように自在に操る適正の高さもある。起動は単純だが速度があり、反応もまずまずだ。

戦術、戦略が未熟だが、これは経験をこれから積みめば大きく伸びる予感をさせてくれる……つまり陽太の結論は、

「（自分に合ったISのセッティングが出来てない。いや、こいつの意見を無視したセッティングさせてるんだろっ、これだからアホ開発部は……）」

そういや束はなんだかんだ言っで、ISの事に関してはこちらの要望に全て答えてくれてたな、と思い出してム力つく陽太。

まあ、だがここでいない人物に愚痴ることも出来ない。

大方の手の内は曝け出した。後は腰についている残りのビットが気になるところだが、それは後で一夏が痛い目見るためのお楽しみとして取っておこう。

サラッと酷いことを考えた陽太が、腰にある武装に手をかける。

「！！？」

それを見たセシリアの表情が強張る。

ようやく陽太が攻勢に回ってくるのだ。受けて立つ！という気合いと、今まで余裕でこちらの攻撃をいなしていた敵が攻撃をしてくる！という恐怖が同時に沸き立ち、ライフルを握る手が嫌に汗ばむのを感じる。

腰に装備されていたレーザーアサルトライフル……収束型荷電粒子砲『Jバスター』が火を噴き、一瞬でセシリアの左手前に浮遊していたビットを射抜いてみせた。

ギョツとなるセシリアであったが、続けざまに今度はセシリアの右膝付近をギリギリ火線が通過する。

まじかで攻撃が通過したということに驚愕するセシリアであったが、動揺して動きを止めるのは危険だと判断し、スラスターを一気に吹かして、高速移動を開始しながらライフルを撃ちまくる。

陽太はその様子を満足げに見ながら、あえてセシリアに付き合うようにJバスターを撃ちながら、ドッグファイトを開始した。

「！――」

「……………」

互いのレーザーが頬を掠めていく。

だが、陽太の表情には余裕の笑みが、セシリアの表情には必死さが如実に浮かんでおり、どちらに分があるかは、素人目に見ても明らかだった。

だからこそ。それが理解出来てしまっているからこそ、セシリアは叫ばずにはおれなかった。

「どういとおつもりですの!!」

「何がだ？」

「とばけないでください!!」

動きを止め、銃口だけを陽太に向けるセシリア。彼女のすぐそばを陽太の放ったレーザーが通り抜けていく。

それが彼女に確信を与えた。

間違いなく、目の前のこの男は、このセシリア・オルコット相手に手を抜いているのだと。

「わたくし相手に手を抜くとは、どういとおつもりなんですか!？」

「どうもこうも……」

うんざりとした表情になる陽太。彼女が言わんとしていることが何なのかわかるだけに、それが却ってわずらわしかった。

誇りとか、勝負の礼儀とか、強者の不文律とか……何を熱く語ってくれるのかと、陽太は溜息をついたのだ。

「本気で戦うなんて一言も言っていないぞ？」

「!!……あなたという人は!!」

「熱くなるなよ……それに……!!?」

だが、陽太はその言葉を続けるよりも先に、動いた。

ISに内蔵されているハイパーセンサーがアラームを鳴らすよりも速い。その動きは今まで見せていたどの動きよりも鋭く速く……セシリアが全く反応ができないほどである。

まさに神速と例えられるほどの動きでセシリアに突進した陽太は……そのまま彼女を突き飛ばした。

「！！？」

直後……ちょうどセシリアと入れ替わる形で陽太がいる場所に、上空から全く違う何かが超高速で陽太に激突し、共に地面に激突したのだ。

「な！」

上空を眺めていた一夏はあまりの事態にわけがわからずに呆然となる。

二人が激しく上空で飛び回りながら撃ち合っていたかと思えば、セシリアが突然動きを止めて陽太を怒鳴り、かと思ったら陽太がセシリアを突き飛ばして、いきなり地面に激突したのだ。

もうもうと立ち込める煙の向こうを見ようと、観覧席の手すりの上にも降り出す一夏。そんな一夏を筈が後ろからしがみついて、引き下ろそうとする。

「馬鹿者！あぶないぞ、一夏！」

「離せ、箒！陽太のヤツが……！？」

煙が段々晴れていく。

アリーナのフィールドの中心、見れば直径数mのクレーターが出来上がっており、そこにいたのは……

「黒い……IS？」

「……………」

ギリイッ

悔しさで齒軋りする音が響く。

アリーナのセキュリティールームに設けられたモニターを厳しい表情で千冬は見つめていた。隣では山田が必死になってセキュリティをチェックしている。

今現在、二人以外の教員はおらず、二人だけでこの異常な事態に対処せざるえなかったのだ。

二人の戦いが始まった当初からモニターで見つめていたところにこの騒ぎである。

しかも、セキュリティがなぜか『作動』しないにもかかわらず、外部への連絡が取れず、部屋のドアも開かないときたのだ。

これはもはや意図的な『計画』であることは明白である。学園でもっとも恐ろしい千冬をこの場に留めておくための……

「（生徒たちがこの異常事態に気づいてから他の教師達に報告して、

警備の奴等が来るまで最速で見積もっても後10分は掛かる………
悪いが今回は、お前を頼らせてもらうぞ、小僧！」

一夏の目前に降り立っていたのは、高さが2mを超える異形の『巨人』であつた。

まず目を引くのが、漆黒の装甲が全身を覆う『フルスキン全身装甲』である。
通常のISはシールドエネルギーというIS独自のエネルギーフィールドで防御するのが一般的であり、実体盾で攻撃を防ぐISもないことはないが、装甲だけで防御するというのは凡そ設計思想の段階から存在しておらず、一片の素肌も見られないというのはさすがに聞いたことがない。

頭部は剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には大口径のビーム砲の砲口が計4ツ設けられていた。

だが、今の一夏はそのことには気がついていない。

アリーナに突然乱入してきたISにも、それを見てパニックになっているギャラリーにも、呆然となつて空中に浮遊し続けるセシリアにも、そして自分の腕を引っ張つてこの場から逃げようと必死に言っている筈にも気が向いていない。

黒いISの足元で、頭部から血を流してピクリとも動かなくなっている陽太の姿を凝視し続け、一夏の時間は止まっているのだ。

そして、一夏の時間は動き出す。

腹の底からこみ上げて来る怒りと共に、怒声となつて活動再開を周囲に訴えるのであつた。

「てめえええっ！！俺が相手だあっ！！！」

自分でもなぜそれほど怒りを感じたのか一夏にもわからなかった。陽太とは出会ってまだ数日、しかも関係は決して良好ではなく、むしろ陽太のほうはうつとしがっている印象すらある。自分もそんな陽太の印象を見て、決して深い友情を感じてはいないだろう。

だが、これは正当な怒りだ……。そう。自分の周りの人間を守りたい。守れる力を持ちたい。力を持って、守っていける人間になりたい。それこそが織斑一夏の望んでいることだというのであれば、それが例え出会って僅か数日の間柄でも関係ない。

だからこそ、彼は全身で怒りを表現して、目の前にいる『自分の知り合いを傷つけた』ISを睨みながら怒鳴ったのだ。

その言葉にギョツとなったのは、上空から見下ろしていたセシリアであり、モニター越しに呆氣にとられた千冬であり、そして脇にいた箒であった。

ISも持たずに、ISを纏った相手にケンカを吹っかけるなど自殺行為以外の何者でもない。

だが、一夏は鼻息を荒くして、一步も引く気はなさそうだ……。

そんな一夏に興味を示したのか、もっと違う理由があったのか、ISが一夏の方にゆっくりと振り返る。

その動きを見たセシリアが、千冬が、箒が、一斉に動き出した。まずモニター越しで見ていた千冬がマイクをひったくる様にと、スピーカー越しに怒鳴りつける。

『その馬鹿者！！今すぐその場から離れる！！！！』

「千冬さんの言う通りだ！一夏！」

箒もその意見に従い、一夏の手を掴んでこの場から連れ出そうとするが、そんな箒の腕すらも無理やり振り払い、一夏はひたすら前だけを見続けた。その間も黒いISはゆっくりと近づいてくる……巨腕を一夏に向けて。

だが、あと5mという所まで来たとき、突如上空から蒼い閃光が連続して黒いISに降り注ぐ。セシリアのブルーティアーズである。上空から螺旋を描きながら降下したブルーティアーズは、高速で一夏と箒を守るように彼らの前に降り立ったセシリアにドッキングし、セシリアは手に持ったライフルを構え、銃口を前方に合わせながら振り返らずに、一夏達に話しかける。

「何をなさっているのですか貴方は……早くお逃げなさい！」

「できるかつ！」

「素手で戦うつもりですか！？そんなものは無謀ですらありません！現実をもつと見なさい！！」

一夏に厳しい言葉をかけながらも、ISのハイパーセンサーが的確に敵ISの存在を伝えてくる。

「（全弾命中したはずなのに、シールドエネルギーにほとんど変化なし！……一体、何者だというのですか！？）」

あまりの事態に我を忘れかけたセシリアであったが、現状を分析する限り、限りなくマズイということを確信する。

敵の能力が未知数、こっちの攻撃はほとんど通らない。背後にはお荷物が二人、増援が来るまで凌げるか？様々な考えが浮かんでは消えていく。

だが敵はそんなセシリアを待つてはくれない。煙の中からその砲口が備えられた巨大な腕を突き出し、エネルギーのチャージを始める。見た目だけでスターライトmk？以上の破壊力があるのは確かだ。ISがない一般人が受けようものなら死体も残るまい。それがわかっていいるからこそ、セシリアはその場を一步も動かずに、声を張り上げる。

「もう一度言います！早くこの場から下がりなさい！！」
「俺は・」

「力の無い者ができることなど、戦場にはございません！！だから早く・」

その言葉が一夏の胸に突き刺さると同時に、黒いISから巨大な光が放たれた。

二人だけでも守られねば！と、大破覚悟で立ち塞がるセシリア。凄まじい光量に目がくらむ筈。そして何もできずに棒立ちになる一夏。

そんな彼らは光の放流に飲み込まれ、この世から消え去ってしまう。
………
ことはなかった。

光が三人のはるか上空を飛んでいき、アリーナの外壁を一部破壊して、夕空に消えていく。

光の残滓が消え去りかけた時、三人はなぜビームが外れたかを理解した。

それは、巨腕を下から無理矢理持ち上げる手があったから……………
……そう、いつの間にか復活した陽太が、超速で敵機に回り込んで軌道をずらしたのだ。

黒いISは、そんな陽太を冷たいセンサー越しに見下すと、残った腕を振り上げ、叩き潰そうと降り下ろした。

陽太はその場で横に反転しながら、降り下ろされた腕を回避しつつ、黒いISの腹を思いつきり蹴り飛ばす。

加速のついた蹴りが、重量差をもつともしない勢いで敵機を吹き飛ばすと、陽太はその場から飛び退き、三人の間近に降り立った。

「おい、その馬鹿」

「!？」

振り返っていなかったが、口を開いた陽太が、明らかに自分に対して怒っているのが、一夏には肌で感じ取れた。

前方だけを睨みみつけながら、陽太は言葉を続ける。

「お前ごときが、俺を守るつもりでいたのか？」

「ああ」

一夏が迷うことなく返答すると、陽太は今まで見たこともないような『怒り』の眼になり、一言、吐き捨てる。

「てめえ……………うぜえよ！」

陽太の頭部が赤い光に包まれ、真紅の装甲をしたヘルメットが現れる。

金色の双角と、太陽のような飾りをつけたそれを被る陽太は叫んだ。

「フォーム・アップっ!!」

すると、更に白いマスクが陽太の顔を全て覆い隠し、完全に頭部を装甲で武装化してしまった。

「なっ!!」

フルスキン

「全身装甲!?……でもこれは……」

セシリアはほかの二人よりも敏感に感じ取る。陽太のIS『も』明らかに異様な設計だと。

そもそも武装を呼び出すことはしても、装甲を追加するなどという発想のISなどは聞いたことがない……。

普通のISとは明らかに規格の違いを感じさせる二機が、静かに対峙する。

先に陽太が動いた。手をかざし、量子化された武装を呼び出す。

「フレイム・ソード!」

量子化していた物が、物質として再構成される時に発する光とともに、オレンジ色の刀身をした両刃の西洋剣が陽太の手に握られる。それを見た敵ISが、続けざまに攻撃してきた。先ほどと同じ高出力のビームだ。

だが、その攻撃は、陽太が握ったフレイム・ソードの斬撃によって四散していく。あれだけ高出力のビームをものともしないのかと、セシリアが内心驚く。

黒いISは通用せずとも、それを弾幕にして陽太を近づかせないように連射するが、陽太は一瞬の隙をついて、スラスターを爆発的に噴射し、一気に間合いを詰めた。

「!？」

一夏の目に、一陣の閃光が奔る。

彼が気がついたとき、敵を通り過ぎながら空中を一回転する陽太と、反応しきれず後退する黒いISと、そして宙を舞う黒いISの腕であつた。

剣道を得意とし、全国でもトップクラスの技量を持つ筈も驚く。

……今の動きは、明らかに古流剣術の動き……いや、自分が習っていた篠ノ之の家の流派の動きそのものではないかと。

「（姉さんが……いや、ひょっとして千冬さんが!？）」

動きを注意深く探る筈の前で陽太の戦いが更にヒートアップしていく。

残った一本の腕で、拡散ビームのように荷電粒子砲を乱射する黒いISであるが、陽太はその攻撃をことごとく回避していく。その動きは先ほどのセシリアの時よりも、桁違いに速く、ISを持つていない一夏と筈にはすでに陽太の動きは視認できないほどである。

唯一、戦っている二人以外でISを纏っているセシリアのハイパーセンサーだけがその動きを追っていく。

「これがこの方の本気……私の時など本当にお遊び程度に流されていたのですね」

怒りすらも沸いてこない程の陽太の動きに驚嘆するセシリア。

そして当の陽太はと言えば、目の前の敵の異常性をすでに9割9分

理解していた。

「（間違いない……このISは無人機だ）」

まずそれを半ば確信させたのが、敵の腕を斬り飛ばした時。どんなIS操縦者だろうが、腕を斬り飛ばされて平然とできるはずはない。これはISにはパイロット保護のための『絶対防御』なる機能が全てのISに備わっており、パイロットに致命的なダメージを与えるのを防ぐものである。それが発動しなかったのは、なぜか？

答えは簡単だ。その機能が備わっていないのだ。その証拠に、傷口からは火花が飛ぶが、血が一滴も流れていない。

それに、先ほどからビームの攻撃を繰り返しているが、精度が正確に一定過ぎる。まるで機械で測って一定のタイミングで発射しているかのように。

ISの火器統制システムでこちらの動きをロックするのは当たり前だが、発射のタイミングまで同じなのは明らかに、敵が全自動で発射している証拠だ。

で、なければ、一発もあたらない現状に何かしらのリアクションを起こすのが人間というものはずだから。

本来、ISは有人機というのが大前提中の大前提であり、世界中どこを探しても無人機などは存在していない。だが、ひょっとして……。

その考えを陽太は振り払う。

「（今はそんなことはどうでもいい！）」

詮索しても今はしかない。

それに敵が無人機だというのは都合がいい……なまじ生身の人間だと、気遣いが必要になるからだ。

「こいつを使うにはな！」

叫びながら陽太は再び間合いを詰め、残った一本の腕も斬り落とし、地面を滑りながら剣を天に掲げる。

そして、

「フレイム・ソード！！チャージ・アップッ！！！」

額が金色の光を放つとともに、唾の飾りが展開した。まるで鳥が羽ばたくように……そして頭上に掲げた刀身から真紅の火炎が噴出す。

「……なっ！！」「」

驚く三人を尻目に、剣を肩口から水平に構え、スラスターを全開にして疾走する！

「おおおおおお！！てえやあああっ！！！！」

シールドエネルギーを蓄積、圧縮して特殊な熱攻撃エネルギーに変換された炎を纏った剣撃が振り下ろされ……

一閃！

この言葉で表すしかないというほどの、見事な肩から一刀両断する

袈裟斬りで黒いISを斬ってみせる。

その破壊力によってか、または役目を終えてのことなのか……黒いISが爆発を起こし、三人を爆風が襲う。とっさに後ろの二人を庇うように立ちふさがるセシリア。

「くっ！大丈夫か、箒！？」

「あ！……ああ……」

一夏に呼ばれ、箒は現状に気がつく。自分が一夏に抱きしめられていることに。気恥ずかしくなって慌てて、離れる箒。

「お二人とも、お怪我は？」

「いや、大丈夫だ。サンキュな、セシリア？」

「下々を守るのは貴族の務めですわ……それよりも……」

セシリアが目下気になるのは、後ろの二人よりも、目の前で二度ほど剣を振るい、量子化させて手元から消し、炎を背景に残心する陽太の姿であった。

「………とんでもねえ……」

一夏は素直にそう思った。

今まで千冬以外にこんな感想を抱いたことはない。厳密には箒の姉の束にもそんなことを言った時期もあったが、それとこれとは違う。

それは憧憬……強さへの憧れである。

自分を守るために、いつも戦ってくれた姉。誰かを守るために強くあり続けた姉。

自分が憧れたあの強さをもう一度見ることができたと、なおのこと、アイツにISのことを習おうと、心に決めたのであった……。

敵の沈黙を完全に確認した陽太は、白いマスクと赤いヘルメットを解除し、素肌を空気に触れさせる。まだ炎は治まってはいないが、肌に触れる空気は若干涼しくて気持ちよかった。

このままいい気分で浸りたい気でいっぱいになりそうだが、だがそうもいかない。

一発言つてやらないといけないことがあるのだから。

踵を返した陽太が、まっすぐ一夏達の方に向かって歩き出す。その姿を見た一夏達も、手を振りながら駆け寄ってくる。

ISを解除し、黒いインナースーツ姿になった陽太は、歩くスピードを緩めず、まっすぐ一夏の方歩いていき、

「おおーい！お前、すっげえ。」

思いつきり、一夏の頬をぶん殴るのであった。

小競り合い〜深刻化〜（後書き）

というわけで、更に事態がもつれ込んでしまいました。

さてさて、次回は早期に更新できるのだろうか？

自信の程はまったくございませんw

焦りの中の白の目覚め（前書き）

今回は大きく本編が改変されています。

どんな風にかと言えば……一夏とセシリアの立ち位置が大きく逆転しているということです。

では、お楽しみください。

焦りの中の白の目覚め

「……………」

正直に話せば、もうむかつ腹全開である。

と一夏は、広い教室の中で誰に言うでもなく、心の中で呟く。

すでにあの謎のIS襲撃事件から四日が過ぎた。

色々、あの後事情聴取を受けたが、結局はそれだけ。外部への口外厳禁と言われた以外、別段変わったこともない。

だが、今の彼は怒りで頭の中がいつぱいなのだ。

理由はわかる。わかり過ぎるぐらいにわかる。もう痛みも跡も引いたが、その日の晩はシヨックと痛みで中々寝付けないほどだった。

そう。それはあの日、陽太に初めて殴られた時だった。

殴られた衝撃で尻もちをつく一夏。

一瞬、その場の全員が何が起こったのか理解できないでいたが、いち早く思考が復帰した篤が急いで一夏に駆け寄ってくる。

「大丈夫か、一夏!？」

「あ、ああ……」

「キサマツ!？」

もはや隠すこともせず、怒気を孕んだ視線を陽太にぶつける篤。そんな視線も気にも留めず、陽太は静かに怒りを込めた声で一夏に問いかけた。

「お前……なんで早く逃げなかった？」

「そ、そりゃ……」

「てめえみたいなザコがチヨロチヨロしても、邪魔なだけだ」

「ザコオツ!？」

陽太のその言葉に、我慢できずに、飛び上るように起きると、すぐさま陽太の襟首を掴もうと手を伸ばす……

だが、陽太はその手を逆に攫むと、引っ張りながら背中に戻して、関節技を掛けてしまう。その痛み表情を歪ませる一夏。

「グッ!？」

「ほんとにどうしようもないドシロートだな。千冬さんがお前に何も教えなかったのも、わかるぜ」

「ど、どういふ……」

「クソ弱え、お前にISのことを教えても無駄だって言ってるんだよ。ザコはザコらしく、千冬さんに守られてろ」

「なんだと!？」

「力のないザコは皆口を揃えて言うんだ。『力は強さではない』」
「そんなものは偽りだ」ってな……」

ギリギリと締め上げながら言葉を続ける。

「そういうのは力が持つてる人間が……そして極めた人間が言うから説得力があるんだ！クソ弱いお前なんぞが言っても、ただの言い訳にしかないんだよ！！」

言いながら突き放すように手を離すと、踵を返して入り口に向かって歩き出す陽太。そんな陽太の背中を見ながら、一夏が叫ぶ。

「俺はいつまでも弱いままじゃない！強くなって……そうさ、千冬姉よりも強くなって、今度は俺が守ってみせる！！」

「……………精々粹がつてろ……」

一瞬だけ睨み合う両者の気迫に、セシリアも筭も黙り込んでしまう。

出口に向かって歩いていく陽太と、ようやくアリーナに降りてきた千冬に対して、一瞬すれ違いざまに何かを言っていると、振り返ることもなく出て行ってしまふのであった。

思い出しただけでまた腹が立ち、視線を思わず隣の席に向けてしまう。

そこには同じように不機嫌な表情をした陽太がちょうど一夏の方を振り向いていて、視線が絡み合う。

「……………」
「……………」

しばし、見詰め合う両者は同時に、

「ケツ！」

はき捨てると反対の方向にプイッと向き直るのであった。だが、

「貴様ら……………」

そんな二人の間に仁王立ちする千冬、ちなみに今は授業中である。
二人が同時に千冬に気がついたとき、容赦なく二人の顔を両手で掴み上げ、ベア・クロウを掛けながら静かに問いかける。

「イダダダダッ！！」

「……………○ンダムファイト国際条約第一条」

「と、頭部を破壊された者は失格となる！」

「お前ら……………人生をこのまま失格になりたいのか？」

ギリギリと手に力を込めながら、ついでに額に青筋を出しながら、
授業をまったく聞いていなかった二人にお仕置きをする千冬。ちな
みにそれを見ていた真耶はすでに涙目である。

必死になって『いえ！決してそんなことは考えておりません！』と
言い訳する二人を見て、ようやく手を離す千冬。

「何があつたのかは聞かんが、授業は真面目に受ける。それと小僧
？」

「お前宛てに荷物が届いている」

「あ！もう来たのか…」

陽太がポンと手を叩いた時、ちょうど本日最後の授業終了のチャイムが鳴り、千冬たち教師が出て行くと、生徒達が放課後をどう過ごすかで、話を始める。

そんな中で、一夏はさっさと荷物をまとめると、窓側の席にいる篤のところに向かい、彼女と一緒に教室を出て行く。

出て行く間際、陽太の方をチラッと見る一夏。彼の視線を気づいていたが、陽太はあえて知らん振りをする。

ここ数日、そんな微妙な空気をした二人の間を他の生徒達も気にしていたが、どれもこれも憶測の息を出していない。

陽太もやることがないので、教室を出て行こうと荷物をまとめていたが、そんな彼に声を掛ける者がいた。

「ちょっとよろしくて？」

セシリアである。

ここ数日、陽太を観察するようにじっと視線を追いかけていたセシリアであったが、今日は思い切つて、声を掛けてみた。

自分の中にある決意が固まったからである。

「……俺もちようどお前に用事があるんだけど……」

「それはちようど良かったですわ」

それだけ言うと、陽太は鞆を持ってセシリアと一緒に教室を出て行く。

陽太はセシリアがやろうとしていることが何となくわかっていて。そして今の彼女はこの間までの欺瞞と低俗なプライドに塗れていた眼でもない。

ならば、彼女のやりたいことに乗ってやるのもいいかもしれない。そんな考えが僅かに出たのか、陽太の不機嫌だった表情が若干和ら

いだものになっていたことに、本人も気がつかずにいたのであった。

それから数十分後……

第三アリーナの上空で浮遊する両者――陽太のファイバードとセシリアのブルーティアーズは、互いの獲物……フレイムソードとスターライトmr?を構えながら対峙していた。

「……レディーファーストだ」

「お言葉に甘えさせていただきますわ……」

ここまで示し合わせていたかのように無言を貫いていた両者であったが、陽太が構えながらも、セシリアに先に用事が何なのかを告げるようにほどこすと、セシリアは迷うことなく真っ直ぐな目で陽太を見る。

「今更かもしれませんが改めて……この間の決着……今日こそ着けたいと思いますの!」

「……一応、理由を聞こうか?」

「理由も何も、有耶無耶に・」

だが、今度は陽太は鋭い目でセシリアを見つめ返す。半端な気迫ではそれこそ有無も言わず黙り込まされるほどの鋭さで、セシリアを射抜いた。

「実力差は理解しただろ?今のままやっても永遠に勝機はない」

「……………」

「そしてお前はそれが解らないほど馬鹿じゃない。無謀を通して、待ってるのは赤っ恥だけだぞ」

「……………関係ありませんわ」

セシリアは心に決めていた。

たとえ勝てなくても、一矢報いることができなくても、最後まで戦うことを辞めない。

他者に媚ことなく、自身を貫く強い瞳と信念。

それはセシリアが心から尊敬する亡き母の姿そのものであったから。

セシリアが男性に対して威圧的な態度に出るのは、彼女の記憶にある最も身近にいた男性……つまり父親が嫌いだったからだ。

いつも母親の顔色ばかり疑い、自分から何かすることもなく、いつもオドオドとしていた。幼少のころから将来は絶対こういう男とは結婚しないというも思っていた。

対して母親は強い人だった。

女尊男卑以前から会社をいくつも経営し成功させていて、厳しくもあった。だが憧れだった。

そんな両親であったが最後はあつけないものだった。越境鉄道の横転事故。死傷者は百人を超え、一時陰謀説も囁かれたが、そんな可能性はとも考えられないぐらいの大惨事であった。

それから瞬く間に時が過ぎる。両親から莫大な遺産を受け継いだセシリアは、それを守るために必死に勉強し、その過程で自分にはISの適正があることが判明したのだ。

彼女は即断する。両親が……………憧れの人が残してくれたものを守るために、第三世代装備ブルーティアーズの第一次運用試験者となり、

稼動データと戦闘経験値を得るために日本に来て……そして……。

「自分よりも強い相手に出会ったからといってオメオメと逃げ出せと？逃げ出しておきながら『誇り』を謳えと？」

「……………」

「私はセシリア・オルコット！たとえ敗北して『誇り』を傷つけても、逃げ出して『誇り』を捨て去るような振る舞い、死んでもいたしませんわ！！」

これだけは譲れない。

それだけは死んでも譲れない。

憧れた人の背中にまだ追いつかないけれど、影すら見えないけれど、彼女は貫いていこうと心に決めていた。

「……………正直、貴族の誇りとかなんとかはピンツとこん……………育ちが悪くもんでな……………」

「……………」

「だけど……………そういつの、好きだぜ、俺は」

目の前で、自分よりも強く、自分よりも憧れの人に近い姿……………自信と信念に溢れ、己を貫く気概を持ったこの男に……………

「フォーム・アップッ！！」

陽太が赤いヘルメットと白いマスクを装着し、そして一言静かに告げる。

「……………来い」

その言葉だけで十分だった。

オレンジの剣閃と蒼い閃光が交差する

実力是对等ではなかったかもしれないが、自分と同じ土俵で闘ってくれる。一対一の意志と意志の激突……これぞ決闘なのだ。

地面に落ち行く中、セシリアの気持ちは不思議と充実していたのだった。

一方、その頃、剣道場では……

「ハッ！ハッ！どううりやつー！！！」

怒涛の攻めで竹刀を打ち付ける一夏。それを必死な形相で裁く箒。ここ最近の一夏の気迫は見違えるようで、箒としてはまずまずといったところだった。

だがまあ、彼女としてはこれで自分のために頑張ってくれていたのなら申し分がないのだが、残念ながら一夏はそんなつもりがないことも箒は知っていた。

「（そんなにあの男を見返したいのか？）」

火鳥 陽太……正直、箒は好きになれそうもなかった。

それは一夏を殴ったことを根に持ったことではない………ほんの少しぐらいはあるかもしれないが。

箒が陽太を好きになれないのはもつと別の理由……そう、一瞬だけ本能的に感じ取ってしまったからだ。

「（あの男から……姉さんと同じ匂いがした……）」

自分の姉である束と同じ人種……自分のような凡人の理解を超えた『天才』と呼ばれる者特有の感覚。

そんな独特さを箒は総じて『匂い』と呼んでいるが、とにかくあの、陽太という少年からはそれが感じ取れた。

一夏の姉である千冬から同じような匂いがしているが、彼女のことを苦手だと感じたことはない。少々怖くはあるが……

もし、彼が姉と同じ天才であるとしたら、自分はこれからどうやって彼と向き合っていけばいいのか？

姉の助手をしていたというが、それも正直怪しい……あのひつちやかめつちやかな人物の助手なんて出きる人物が本当にこの世にいるのだろうか？

「（千冬さん以外に、そんなことができるものがいるのだろうか？）」

疑問符が止まることはない。だが、今はそれよりも一夏だ。

箒は次の瞬間、手元のスナップを効かせて竹刀を上へ弾き上げる……

…俗に言う巻き技で竹刀を弾くと、一瞬で一夏の胴を打ち付ける。

「単調に攻め過ぎだ一夏！だからこうやって思わない反撃を受ける！」

「はあー、はあー………な、なるほど……」

無呼吸で攻めすぎたのか、さすがに息を切らせている一夏を見かねて休憩を取ろうと言う箒であったが、それを一夏自身がきっぱりと

断ってしまう。

「頼む……もう少しで感覚が取り戻せそうなんだ」

「……では、後一本だけだぞ？」

「よしきた!!」

再び構え直す一夏と箒。そして、一夏はまたしても怒涛の連続打ちを箒に仕掛けるのであった。

「一夏……無事か？」

「あ、ああ………」

体力の底まで使い果たしたのか……完全にグロッキー状態になっている一夏はフラフラになりながら、箒と並んで夕暮れ時の帰り道を歩いていた。

「だから調子に乗って打ち過ぎると言っているのだ！」

「わかつてる………わかつてるけどさ………」

ここ数日、体力の続く限り攻める事をやめようとしないうちに一夏に箒は不安が募って仕方なかった。

へっぴり腰で逃げ惑えばいいと言うわけでは断じてない。そんなことをすれば自分が竹刀で尻をシバキ上げている所だ。

だがあまりに攻撃一辺倒になる一夏の心境を理解しているからこそ、箒は心配しているのだ。

「（強くなろうと足掻いているのか……だけど……）」

無用な焦りが剣に出ている……それがもしISバトルの間に出て、何か取り返しのつかないことになったりでもしたら……そう考えると不安で仕方なくなる筈。

いつその事、今思っていることを一夏に伝えてみようか？ だけど、それは返って一夏を混乱させるだけではないのだろうか？

筈が迷いながら一夏の方を見る。

彼は不安そうな筈を笑顔で見返し、笑いながら大丈夫と言う。

「大丈夫だ！ これぐらい何ともねえーよ！」

「一夏………」

隠し切れずに思わず眼を逸らした時、向こうの方から歩いていく人影があった。

「あら、織斑さん、篠ノ之さん……こんばんわっ」

やけに上機嫌なセシリアである。

よく見れば頬に絆創膏を張っている……身だしなみを気にする彼女には珍しい。そして、そんなセシリアは、上機嫌のまま、二人に話しかけてきた。

「そのご様子だと遅くまで訓練をなされていたのですね。お疲れ様です」

「あ、ああ………」

「………そういつお前はどんなんだ？」

急に割って入られて、ついトゲトゲしい返答をしてしまう筈。

隣の一夏は心の中で『バカ！やめろ！！』と言つが、彼の考えていたセシリアでは考えられない返答が返ってくる。

「この間の決闘の決着と……その後、新しい装備のテストを……」

「この間のつて……火鳥とか！？」

「はい………負けてしまいました」

平然と、自分の負けを告げるセシリアに、信じられないといった表情になる二人。

この間までなら、絶対に、何があろうとも自分の敗北を口にするような真似はしなかっただろう。

しかも、それが男相手になんて………驚愕の現実に固まる二人を置いて、セシリアは更に二人を驚かせることを言い放つ。

「わたくし………少々肩肘を張りすぎていたのかもしれませんがね」

「「なっ！」」

「織斑さん………この間は失礼な事を言つてしまいました……セシリア・オルコット一生の不覚ですわ……」

そうして頭まで下げるセシリアに、後ずさる二人。おかしい………こんなセシリア・オルコットじゃない。

「男女の違いがあれど、それが本質的な違いにはならない、ということに気がつかず、大変失礼な事を言つて申し訳わりませんでした………本当に大切なことはそこではなかったというのに……」

「い、いや………別にそんな気にすることでも……」

一夏が引きつりながら、気にすると言おうとした時、セシリアが何気なく言う。

「それを教えてくださった火鳥さん………大変、すばらしい方ですわ」

「……！」

「わたくし、あの方に教えを乞おうと思っていますの」

「教え？、ISのか！？」

「はい！」

上機嫌で話すセシリアに、まだ驚きを隠せない箒。だからかもしれない………一夏の変化に気がつかなかったのは。

「………認めない………」

「はい？」

「一夏？」

力いっぱい握り拳を作って、一夏が胸の内に秘めていた想いをこの場でぶちまける。

「俺は、陽太を認めない！」

「い、一夏！？何を言って………」

「ISが来れば、俺がアイツを倒してみせる！」

違う。

自分の知っている一夏ならこんなこと絶対に言わない………こんな、こんな………」

箒が一夏の変化についていけず、セシリアが表情を強張らせる。

「それは………どういことですか？」

「セ、セシリア！？………違う、一夏は………」

「篠ノ之さんは黙っていてください！」

ピシヤリとセシリアが言い放つと、一夏の目の前まで来て問いかけ始める。

「あなたは火鳥さんを倒せると本気で御思いなので？」

「ああ！アイツの強さは偽りだ！」

「それは本気で思っているの？私にはただの言い訳にしか聞こえませんか？」

「言い訳？」

「……………弱さを誤魔化す為の言い訳です」

「ふざけるな！！」

一夏がついに怒鳴って後ろを向いてしまう。

セシリアはそんな一夏を冷静な眼で見ながら、静かに…それでいて諭すように話す。

「貴方の信じるものが何かは存じ上げませんが、これだけは言えます」

「……………」

「相手を認めれる度量なくして強さは語れませんわ……………」と、言っても、今の貴方に言っても何の意味もございませんが……………」

ヤレヤレといった表情になりながら歩き出すセシリア……………そして彼女は去り際にこういい残していく。

「それがどういう意味か、週明けの決闘で貴方にお教えして差し上げますわ……………このセシリア・オルコットと、新しく生まれ変わったブルーティアーズが！」

それだけ言い残すと、一夏よりも先に寮に戻っていくセシリア。

その場に取り残された一夏と箒の胸中には…………不安と焦りが募るばかりであった。

そして翌週。セシリアとの対決の日。

「…………一夏…」

「大丈夫…大丈夫だよ…………」

第三アリーナのAピットに箒と一夏は並んでたっていた。

不安そうに自分を見てくる箒に、一夏は心配するなと言う。

一瞬、元の落ち着いた一夏に戻ってくれたのかと、思った箒であったが、すぐさま厳しい目になった一夏を見て、すぐさま落胆してしまふ。

明らかに気負い過ぎだと、箒はため息とともに心の声が漏れそうになった。

と、その時、真耶が手を振りながら二人に近づいてくる。

「織斑くん！織斑くん！！織斑くん！！！」

なぜ三度も呼んだのかは謎であるが、とにかく急いでこっちに駆け寄ってくる……途中で何度もこけかけながら、見ている方を心配させながら…

「貴方のISが・」

『たった今到着したぞ馬鹿者』

そう言つてスピーカー越しに声を掛けてきたのが千冬であつた。見ればピットの上の方……ガラス越しのモニタールームに仁王立ちしながら、一夏を見下ろしている。

『織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番で物にしてみせろ』

ゴゴンツ、と鈍い音がしてピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防護壁は、重い駆動音を響かせながら、ゆっくりとその向こう側をさらしていく。

—そこに、『白』が、いた—

白。真っ白な白。飾り気の無い、無な色。

眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を開放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「はい！織斑くん専用のIS、『白式』です！」

真っ白なそれはずっと一夏を待っていた。

無機質だけでも、ずっと自分を待っていてくれたように感じた。『そう、こうなることをずっと前から待っていた。この時を、ただこの時を』

「体を動かせ、すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフイティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな？」

せかされながら一夏が白いISに触れる。だがその時違和感を覚えた。

初めてISに触った時の電撃がこない？

ただ馴染む。理解できる。これが何なのかを……そんな感覚だけが一夏を襲う。

「背中を預けるように、ああそくだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化してくれる」

一夏が言われた通り、ISに全てを委ねる。

装甲が順番に自分に装着されていく……そして空気が抜けた瞬間、全てが繋がる。

それは一夏が白式と一体化した証でもあった。

センサーが順次、自分にデータを送ってくるが、それすらも驚くに値しない。どれもこれも普段から知っているかのような感覚がしたからだ。

「あ！」

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルーティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊

装備あり――

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じ態度に見えるが、千冬の声は微妙に震えていた。

「大丈夫、千冬姉、いける！」
「そうか」

ほっとしたような表情になる千冬を白式のハイパーセンサーが捉える。

「ならばもう一つ……見誤るな」
「？」

「お前が本当に望んだことがどういったものなのか……どういった場所なのかだ」

「千冬姉、意味が……」
「小僧は理解しづらいが、お前に間違ったことは言っていなかったはずだ」

その一言が引き金になり、一夏は先ほどの興奮から一気に冷める。

「出るからハッチ開けてくれ……」
「一夏……」
「早くしてくれ!!」

千冬までもが陽太を庇うのか……自分が信じていた者に裏切られたかのような気分になり、一夏の心に暗い影がよぎる。

「一夏……」

そんな一夏を心配して、箒が寄ろうとするが、それを真耶が静止する。

「危ないですよ!」

「でも……」

その時、ゆつくりとゲートが開いていき、光が差し込んでくる。

ゲートが完全に開ききった時、箒の心配して自分の名を呼ぶ声すら振り切って、一夏は発進する。

「織斑一夏! 白式!! 行くぜっ!!」

全てを振り切るように発進する一夏……視界は、鋼鉄の檻から一瞬で青い空に変わる。

目の前に、セシリアが空中で待機していた。手にはスターライトmr?を携えて。だが、その姿はこの間見た時よりもずいぶん変わっているように思えた。

まずは、装甲……両膝、両肩、両肘、おそらく背面にも、装甲が増設しているように見える。

そしてもう一つが、背部に装備された二挺のハンドガン……白い装甲に覆われており、普通の拳銃よりも若干大型に見える。

これがセシリアの言っていた新しいブルーティアーズなのか……一夏が緊張した面持ちになっていると、ハイパーセンサーの視界が彼を捉える。

「……………陽太……」

「あの方にはわたくしが来ていただきました」

セシリアが未だ銃を構えず、落ち着いた雰囲気で一夏に話しかける。

「この勝負……もし貴方が私に一撃でも加えられれば貴方の勝ち。それができないのであれば……」

狙撃銃を構え、銃口を一夏に向ける。

「火鳥さんに謝ってください……………」

「どうのことだ!？」

「あの方は別にいいと仰っていましたが、わたくしが我慢なりません」

「お前には関係ないだろう!」

「大有りです! 貴方は自分の友人が……尊敬する人間が侮辱されて黙ってみていられるんですの!？」

その言葉が一夏の心臓を……心を抉る。

ここになって、冷静さを段々と取り戻した一夏は、困惑する眼でセシリアを見た……だが、そこにいたのは……。

「では始めましょう! このセシリア・オルコットと、新生、『ブルーティアーズ・ケルデーム』との決闘を!」

真っ直ぐな澄んだ瞳がそこにいた

焦りの中の白の目覚め（後書き）

ということで、セシリアといっちゃんが原作とはまるで別人のよう
になってしまっただんな！というお話です。

ようやく、第がヒロインになってきたぞ〜

……。

……。

……。

……。

……。

あれ？シャルがないw

White twin drive (前書き)

やっと投稿でけた戦闘シーン。

今回は、ついに一夏が覚醒します！

ではぶっぞー！！

White twin drive

そもそも、一夏には専門的な知識がまるで不足している。そんな一夏にISを使つた高度な戦闘ができるはずも無い。

そう考え付いた千冬は、ばつさりと方向を転換する。

一夏にISのことを教えるよりも、その時間を少しでも剣術の時間へと向けようと。

さりげなくそのことを箒に伝えたと、彼女もそれに了承した。そもそも箒にはISの専門知識を教えることができない。ならば自分ができる範囲で……結果、一夏本人の与り知れない所で、彼の訓練メニューが決定していた。

だがそのおかげで、一つだけ得たものがある。

それは、反射神経……そして、先ほどから放たれているブルーテイアーズのレーザーを回避できている、攻撃を察知するための勘であつた。

際どい所をレーザーが掠めていく。

開始から三分……すでに一夏は劣勢に立たされていた。

被弾した数は3発。その全てが直撃と言う有様である。シールドエ

ネルギーの残量は380……すでに半分近くまで減少していた。

「これでお分かりですか、現時点での貴方の実力が？」

「（ちきしょー！！）」

セシリアの皮肉にも返す言葉が見つからない。

これが一週間前のセシリア相手ならもう少し戦えたかもしれない……なぜならあの時の彼女は慢心し、舐めてかかっていただろう。――夏が圧倒するということはないだろうが、慢心から来る隙に乗じて、一矢報いることもできたかもしれない。

だが、今の彼女には油断は無い。焦りもない。そして目の前の相手を侮ることもしない。

冷静に敵の動きを見つめ、ブルーティアーズで動きを牽制しながら、苦し紛れになって突っ込んできた一夏相手に、スターライトmk？を撃ち込む。

シンプルながら信頼性のある戦い方を選んでいるのもそのためである。

確かに未だ全力の攻めは見せてはいない………彼女の新装備を使用すれば、おそらく開始10秒で今の一夏は蜂の巣にできたはずだ。

それは一夏に気がついてほしいから………意固地になっても何も始まらないということに。

確かに敗北は苦く辛い………だが、大切なのはその先なのだ。

「くそおおおおっ！！！！」

一夏が再び、片手に近接用のブレードを持って突進してくる。先ほどまでなら、ここで狙撃銃で撃ち込んでいたところだが、今回

はそれをせず、スターライトを背中にマウントする。ブルーティアイズも出さず、回避行動もしない。

侮れた。そう感じた一夏が怒りに燃えながら、正面に飛び込み、そして一気に剣を振り下ろしす。

直撃だ！、一夏は確信していた。

それを見ていた篤も真耶も、ギャラリーもそう思っていたが………少なくとも陽太と千冬、そしてセシリアだけは攻撃が通らないと確信していたのだった。

そして鳴り響く、甲高い金属音。

振り下ろされた斬撃がセシリアに当たる………こともなく、空中で静止する。

「なっ！」

驚いた一夏が目にしたのは、セシリアの両手に握られた白銀の二挺拳銃………先端が鋭く尖っていたが、それは紛れもなくハンドガンである。

近接戦闘のために銃身の下部に対エネルギー処理が施されている『スターダスト』を両手に持って、頭上で交差する形で、一夏の刃を防いだのだ。更にここからセシリアの反撃は続く。

一夏の腹部に右手に持ったスターダストの銃口を押し付けると、トリガーを引き、ゼロ距離でフルバーストしたのだ。一撃ではスターライトに比べるべくもないが、複数を至近距離に受ければたまったものではない。たまらず仰け反り、吹っ飛ぶ一夏。

そこに手に持ったハンドガンを連続でレーザーを放ちながら、追撃を仕掛けるセシリア。

一夏にすれば、接近戦こそが唯一の活路だと思っていたのに、それすらも防がれ、いよいよ状況は絶望的である。

セシリアの放つ攻撃に成す術なく逃げ惑う一夏を見ながら、陽太は人知れずため息を付いていた。

「……………無様だな」

当たり前といえば当たり前の光景である。国家代表候補生対、今日届いたばかりのISを装着したド素人。誰が考えても勝負になるはずもないのだ。

『一夏の唯一の勝機を潰しておいて、その言葉もあるまい？』

どこからともなく陽太に声が聞こえてきた。

「何なら今からでも返せって言いましょうか？」

『別に構わん。むしろオルコットに関してはお前に感謝したいくらいだ。壁を越えただけでなく、あんな新装備まで……………あれだけ出来れば代表候補生の中でもトップクラスの实力者と言えるな』

別段驚かずに普通に通信相手の千冬と話す陽太。

これはISに備わっている専用の通信回線である『プライベートチャンネル』を応用した一種の裏技である。

本来は待機状態では使えない通信を、陽太も千冬もある方法を使えば使えることを、開発者の束から教えられていたからだ。

「だけど、そのおかげで貴方の弟は間違いなくボコボコですよ」

『それもあいつには良い薬だ……良薬は苦いものだとは相場は決まっているからな』

今、セシリアが使っているハンドガンも、増設された装甲も、陽太が束の元から取り寄せたパーツである。

元々、彼女の趣味というか、困ったところに『作るだけ作るとすぐに飽きる』というものがあり、セシリアが使っているISの武装もその一つなのだ。しかも廃棄もせずに勝手に放置しているから始末に悪く、陽太が偶にそれを見つけては注意していたのだが、束は一向にやめる気配を見せないでいた。

その中であつた武装の一つを数日前に束から寄こすように連絡をし、それが昨日届いたというわけなのだ。
ちなみにその時、束は陽太に対して、

「ようちゃんの肉奴隷の束ちゃんにお願いなんてしないで、どうかご命令してください、ご、しゅ、じ、ん、さ、ま!？」

「キモい」

こんな会話がなされていたことは内緒であるが……

『オルコットの近接の弱点を解消しつつ、戦術の拡大か……褒めてやるぞ』

「元々アイツ……セシリア・オルコットは接近戦が嫌いってわけじゃない。単に獲物の扱いに慣れていないから、必然的に距離を空けるクセが付いてただけだ」

『展開スピードにはイメージが重要だしな。ならばオルコットが好きそうな物。つまり、刃物よりも銃というわけか』

「インターセプト……ナイフ戦術は意外に高度だしな……だったら、ばつさりと切り捨てて、取り回しのいいハンドガンの方がアイツの性分にも合ってるだろ。それにあの銃は特殊なコーティングがされてて、余程の高出力粒子兵器でもない限り、盾代わりに受け止めるのにも適してる」

使えない武装を大事に抱えるよりも、使える武装をチョイスさせていた方が実戦的であると陽太も千冬も大よその見解は一致していた。

『そして……もう一つの方は補強と言うよりも、増強というわけか？』

「OSの設定変更とサポートOSのインストールするのに、結局徹夜になったがな」

『意外に人付き合いが良いじゃないか。嫌いじゃなかったのか、そういうの？』

からかう様な千冬の口調に、陽太は不機嫌そうな表情をしながら講義する。

「馬鹿抜かせ……俺は束の出した廃品のリサイクルをしたただけだ」

それだけならば徹夜をしてまで間に合わせる必要もないだろうに……相変わらず、態度と口が不一致する奴だと、ひそかにほくそ微笑む千冬。

一方、上空では、いよいよ勝負がつきそうな展開になってきていた。両手から放たれるハンドガンの弾幕と、高速機動で追い詰めてくる

ブルーティアーズという二種類の攻撃を捌く技術など、今の一夏には到底できず、すでに白式の装甲が半壊状態である。
解っていたこととはいえ、実際にここまで手も足も出せずにいる自分自身に怒りを感じて思わず齒軋りする一夏。

その様子を心配そうに見つめる箒は、やはり止めておくべきだったと後悔していた。

これではまるでいつかの自分だと。強さの在り方を勘違いして、ただ誰かを一方的に打ちのめすだけだった愚かな自分だと。
箒の目には、今の一夏の姿が、かつての自分と重なり、二重の意味で見えていられなくなってきた。

だが、そんな箒の願いを無視するように、一夏が動く。ただガムシヤラなだけの、何の工夫もしない、単調な突撃。
それを見ていたセシリアも陽太も千冬も、僅かな落胆を覚えた。『
今はこれが限界』かと…………。
セシリアが止めの一撃を放とうと、背中のライフルを再び手に取り、構える。

後一撃、引き金を引けば、その瞬間に勝負が決するという場面において…………それは再び現れた。

巨大な質量を伴った何かが地面に複数激突する轟音！！

「な、何が……」

「これって……」

『その二人！、今すぐピットに戻れ！！、試合は中止だ！！』

呆然となる空中の一夏とセシリアであったが、通信で千冬が二人に怒鳴り声に近い感じの大声を聞いてわれを取り戻す。

「この反応は！？」

ブルーティアーズのハイパーセンサーが捉えた情報に見覚えがあった。この反応のパターンは……セシリアが煙の向こう側にいる存在に意識を集中させる。

直後、二人に向かって、極太のビームが続け様に放たれる。

「……！！？」

その攻撃を高機動で回避する一夏とセシリア。だが、一夏の方のISはダメージが大きく、僅かに機動が鈍り、そこに容赦なく迫るビーム。

捉えられた！一夏が一瞬死を覚悟する。

迫る熱量に目が眩みそうになったとき……突如、真横から痛烈な衝撃が襲い掛かり、吹き飛ばす一夏。

「ぐがつ！」

「ボサツとするな……」

声を聴いた瞬間、カッとなって目を見開く一夏。

そこにいたのは自分を助けるように、ビームの射線から一夏を蹴り出し、代わりにフレイムソードでビームを受け止めるファイバードを纏った陽太の姿であった。

観覧席にいた陽太は、事態の異変に誰よりも早く気がつき、緊急避難用の強化型遮断シールドを展開するよりも早く、ISを展開して、遮断シールドを突き破り、内部に侵入していたのだ。

普通のISでは突破不可能なシールドを突き破ってくる辺り、陽太とファイバードが如何に突出した存在かは、冷静に考えれば恐るべきものである。

フレイムソードを横薙ぎに振るい、ビームを全て弾き返した陽太が、煙の向こう側を睨みつける。

「また性懲りもなく出てきやがったか……モドキ共……」

煙の向こうから現れたのは、昨日、アリーナを強襲した黒いISであった。

しかも今度は同タイプが三機、武装はこの間と一緒にであるが、その様子は以前よりも不気味さを増しているように見える。

「雪辱戦のつもりか？ 前回の教訓を生かして数でご登場とは、フットワークがずいぶんお早いことで………」

「火鳥さん!!」

軽口を叩く陽太にセシリアが近寄ってくる。振り返りもせずに陽太は敵を見ながら彼女に指示を出す。

「お前は一夏（あそこの馬鹿）を守ってやれ。幸い俺がブチ破ったシールドの代わりに、もう一枚強化型のアリーナを囲ってる。周

困のことを気にする必要もなさそうだ」

「お一人で三機を相手になさるおつもりですか？」

「俺のファイバードは守勢に向かねーんだ。それにお前に渡した例の『ソレ』は、こういった時、役立つだろ？」

「ですけど……………」

「今回はこれが最善だ…………じゃあ、いくぜ！」

話を打ち切ると、フレイムソードを掲げて敵に向かって突撃する陽太。

イグニッションブースト
瞬間加速を自在に操りながら、超速で間合いを詰め寄って、まずは一機斬りおとす。

だが、陽太の目論見は一瞬で瓦解する。

敵を侮っていたわけではない。外見上の違いが全く見受けられないために、この間と同型だと陽太もセシリアも、千冬すらも思い込んでいたのだが、今回はそれが裏目に出たのだ。

…………敵は同型なのではなく、強化型だったのだ。

「！？」

イグニッションブースト
陽太の瞬間加速に反応し、三機とも即座に飛び上り…………『陽太を通り過ぎる』

「しまったっ！？」

瞬時に、腰のJバスターを抜き、振り返りざまに三機に向かって撃ちながら、反転して、三機を追いかける。

Jバスターが全弾命中するが、それを黒いISは腕の装甲で全て弾

き返してしまっていた。防御性能が上がっている？陽太が無人ISの能力向上に動揺しつつも、目の前の黒いIS達の狙いを即座に見抜いていた。

「その馬鹿！？、今すぐ逃げろ！！」

陽太の声に一夏は驚愕し、そして理解する。やはり狙いは自分だったのだ……。この間もそのような気がしていたのだ。あの黒いISが近寄ってきた時に感じた違和感……。かつて会ったことのある感覚。

誘拐される自分……。何もできないでいる自分……。そんな自分を助けてくれた姉

一夏の意識が爆発しかけた時、彼の前にセシリアが立ちはだかった。まるで一夏を護るように……。そんな彼女に向って、三機が両手を一斉にかざす。

「避けるセシリア！！」

「御心配には及びませんわ……。ハ口っ！」

『セシリア、セシリア』

独特の間延びした電子音声が届いてきたのを確認したセシリアは、陽太に託されたもう一つの新しい力を使用することを決断する。

「シールドビット展開！」

『リョウカイ。シールドビットテンカイ、シールドビットテンカイ！』

ISにインストールされたサポートOSが、セシリアの全身に追加された装甲を排除した。排除された装甲であったが、落下することなく、彼女と一夏の周囲を守るように浮遊し、敵の攻撃に備える。そこに、黒いISから強烈なビームが放たれ、二人に向かってくるが、その攻撃は総て浮遊された装甲によって受け止められたのだ。

『シールドビット』、それは、強化ビームコーティング処理を施された、防御用ビットを合計9基射出、組み合わせることによって変幻自在のシールドを形成・展開し全方位防御を可能にするという、ビット使いであるセシリアに最も適した新兵器なのだ――

しかも、それを制御するのはセシリアではない。いかに彼女が優秀であろうとも、すでに6機のブルーティーズで手一杯なのに、そこへ更に9機のビットを制御しつつ、高機動や射撃など出来るはずはない。

陽太は、かつて束がシールドビットと共に開発していたサポートOS『ハロ』を、セシリアのISにインストールすることで、彼女の負担を減らす方策をとった。

国家のISを好き放題弄りまわすなど、本来なら即国際問題にされて言語道断の所業であるが、ISの開発者であり、凡人たちの涙ぐましい努力を、瞬時にコナゴナにすることの達人である束の名前を出せば、向こうもさほど問題にしまい。

現に、セシリアに黙って束の名前と武装のスペックを同封したメールを送ったところ、帰ってきた返答が『よろしく願います』だったのを見たとき、陽太は密かに失笑していた。

だが、そんな陽太の軽い失望も、今のセシリアのこの見事な戦いぶりに比べれば、取るに足らない杞憂であったと言えるよう。

一夏を庇うように前に出ながら、スターライトを撃ち、距離を取るセシリア。

ハ口のおかげで、多数処理の負荷から解放されたセシリアは、見違えるような高機動で一夏を引っ張りながら、敵から彼を守る。

一番変化したところとは、武装の強化などではなく、真の意味で貴族としての誇りを持って誰かを守る、その信念であるのかもしれない……。

そんな彼女に負けじと、陽太も奮戦する。

三機に詰め寄ると、まずは真ん中のISを勢いを全く殺さず突進しながら蹴り飛ばし、続けて右のISに向かってJバスターを撃ち続け、残った最後の一機が両手にビームサーベルを展開して斬り込んできると、それをフレイムソードで受け止め、腹部に内蔵されている速射砲の「マイティバルカン」を発射し、至近距離から黒いISの装甲をへこませていく。

たまらず距離を取る黒いISに追撃を仕掛けようとするが、それを阻むように蹴り飛ばされたISがビームを連射して再び接近してきた。

ビームを回避しつつ、三機を手玉に取る陽太であったが、戸惑いもあった。

「（不用意な接近戦をしてこない？こっちの単一仕様能力のこと理解してやがるのか！？）」
ワンオフスキル

敵の動きが妙に陽太の戦い方を知っているような動きをしてくるため、今一步というところで止めに移行できず、結果的に攻めあぐねることになっている。

速攻でチャージ・アップを使って各個撃破に持っていきたいところ

なのだが、それができずもどかしい感覚に襲われる陽太。

だが陽太は失念してしまっていた……陽太以上にもどかしい感情に捉われている男がすぐ近くににいることに。

「（クソッ！……俺は何やってんだ！？）」

三機と陽太の戦いを見ながら、胸中で複雑かつどうしようもない無力感に襲われる一夏。

陽太に守られ、セシリアに守られ……それ以前から千冬に守られてきた。偉そうに言ったところで結局それは変わらない。ISを手に入れても、ろくに操ることもできず、完全にお荷物にされてしまっている。

「（こんな……こんな……）」

『小僧！織斑！オルコット！』

そこに千冬から通信が入る。

『増援の教師陣と上級生のIS部隊が到着した！今から突入させる！』

念願の増援の報告に、陽太とセシリアの表情が若干和らぐ。だがまだ油断はできない。

「気をつける！火力が半端ない上に、このあいだとは操縦者のレベルも違うぞ……！」

『了解した。今からシールドを一部・』

シールドを一部解除して鎮圧部隊を突入させようと千冬が指示を出そうとしたとき、それは突然起こった。

今までとはケタ違いの出力のビームを三機が同時に放ったのだ……
…アリーナのシールドのある一点に向かって。

「!？」

「キャアッ！」

「なんだっ!？」

ビームの衝突によって起こった爆発に、三人の目が一瞬くらんでしまふ。その隙について、二機が陽太に迫る。両手をクロスさせて、急所だけを護るように。

「チッ！」

とつさのこと過ぎてチャージ・アップを使う暇がない。その為陽太は通常の斬撃をありったけの力で振り下ろした。

激突する二機……

だが、迫ってきた黒いISが一刀両断にされることなく、フレイルムソードが腕の半ばに食い込んで止まってしまふ。

「マズイっ！」

敵の狙いにすぐに気づいた陽太が剣を引こうとしたが一步遅く、突っ込んできたもう一機が陽太に組みつき、二機掛かりで地面に叩きつけられてしまふ。

「火鳥さん!!」

セシリアが陽太のほうに注意を逸らした隙に、残った最後の一機がアリーナの碎けたシールドの内側に向かって逃げ出そうとしていた。

「しまった!」

「!!………逃がすかあ!」

それを見た一夏はすぐさま黒いISの後を追う……これぐらいは役に立たないと……最初はそれだけの考えであったが、目の前のある人物が見えた瞬間、脳内が一瞬で沸騰してしまう。

そこにいたのは、爆発の衝撃で尻もちをついてた筈だった……彼女が避難命令を無視して、一夏たちの戦いをずっと見守っていたのだ。

「一夏………一夏……」

衝撃をくらって軽く脳震盪を起こしてしまったのか……朦朧とした意識の中で一課の名前を繰り返し呼び続ける筈。だが、そんな彼女に向って、無人ISがなぜか突然止まって、黒いその両腕を上げ、その砲口を彼女に向けたのだ。

「筈いいっつ！……！！」

もう、それ以外一夏の視界には入っていない……大切な幼馴染が危険にさらされている。

それだけが頭の中で幾度もリフレインされ、彼を無人ISの目の間に立たせてしまう。

「織斑さん！」

『一夏！』

セシリアと千冬が悲鳴に似た声を張り上げる。

「……！！？」

地面に叩きつけられた陽太もその光景に食い入ってしまう。

この距離ではセシリア、増援部隊の誰もが間に合わない。陽太もこの態勢では助けにいけない。しかも今の一夏のISはシールドエネルギーが尽きる寸前なのだ。

あれだけの高出力の攻撃に耐えられるだけの余力はない……そう思った時、陽太は思わず声を張り上げる。

「逃げろ、一夏あつ……！！」

逃げる？…………駄目だ。

今逃げたら、篤が死んでしまう。

そうだ…………俺は誓ったんだ。

強くなつて、大切な誰かを守りたいと。

大切な誰かを守る強さがほしいと。

力がなきゃ誰も守れない…………それは知ってる。

だからこそ、今こそ俺は欲しいんだ。

後じゃない。先でもない。

そんな未来の話じゃない。今この場で。

俺の目の前で、守らなきゃいけない人が危ないんだ。

…………だから、

「俺に力を貸してくれ！白式いいっ！……！」

その瞬間、白い光が世界に弾け飛び、ビームを？き消してしまった。

「これ……は……」

モニターを見つめていた真耶が呆然となっていたのも無理はない。
隣にいる千冬さえ呆然となっているのだ。

圧倒的な……天まで伸びるほどの光の粒子を放ちながら、白く
輝く『百式』が映し出されているのだ。

その時、胸のポケットに入れられていた携帯が鳴っていることに気が付き、取り出す千冬。このタイミングで掛けてくる相手といえば一人しかいない。

モニターを見つめながら通話ボタンを押したとき、今、一番話を聞きたい人物の声が聞こえてきた。

『にやはははははっあー、よし、正常に動いているのだー！、束ちやん、大天才！』

「…………『アレ』はどういうことだ？」

相手とはもちろん、ISの開発者であり、千冬の親友であり、そして白式の制作者である『篠ノ之束』その人である。

『ちーちゃんは今日もクールだね♪東ちゃんはそんなちーちゃんに
ソッコンなのだ♪』

「……………」

『そ、その無言が一番堪える〜!』

「なら早く説明しろ」

『イエス、マム!』

軍隊式の敬礼をしていることが目に浮かぶが、今はそんなことを言
っている場合ではない。

『二乗化のタイムラグのせいで、ちょおおっとヒヤヒヤしたけど、
うん。正常に今は起動してるね』

「勝手に完結するな……………まで、二乗化……………だと?」

『うん、そうだよ♪』

そして束が何をしたのかを千冬は悟ったのだ。

『白式はね、ちーちゃんの「白騎士」と「暮桜」の両方のコアを
使用して……………言わば「ツインドライブ」を搭載した、既存のあ
らゆるISを凌駕したISなんだよ♪』

圧倒的な光の奔流の中で、一夏は自身に起こった変化に気がついた。

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタ

ンを押してください——

意識に直接データが送り込まれてきたとき、目の前に現れるウィンドウ。訳もわからずにその確認のボタンを押すと、更なる量のデータが流れ込んでくる。

「（いや、正確には整理されてるんだ）」

感覚的にそれがわかった一夏。そして『フォーマット初期化と『フィッティング最適化』が終了したと同時に光の奔流が収まっていく。

「まさか……織斑さんは、今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの？」

光の奔流に目を奪われていたセシリアが驚きの声を上げる。

そして白式の全身の装甲にも変化が起こっていた。

今まではどこか工業的な凹凸が見受けられていたのに、今はそれが消え去り、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な中世の鎧を思わせるデザインに変化している。

そして一番変わったのは武装だ……そう、その手に握られているのは……

「近接特化ブレード。『雪片式型』」

日本刀から生まれたようなその刀身は、刀よりも太刀に近く、鎧にわずかな溝があり、そこから呼応するように光が漏れ出している。
一夏はこの武装が何なのかを知っていた。

「これは……………姉さんの刀だ…」

現役時代に使ってISの武装……………それと同型の武器が今、自分の手に握られている。

「いつだって最初は姉さんが導いてくれるんだな……………」

育て、見守り、そして今尚自分に力をくれた。

今更ながら思う……………自分はこんなにも誰かに支えられているのだと。

だからこそ、今度こそ、その名に恥じない自分になりたい……………何者でもない。

「……………夏……………?」

気がついた筈が一夏の方に声をかけた。

そんな筈に一夏は、何時もの優しい瞳で笑いかけていた。

「行ってくる筈……………今度こそ、俺は、俺の目指した俺になりたいから!」

筈にそれだけ告げると、一夏は誰に告げるといっわけでもなく、もう一度叫ぶ。

「白式!織斑一夏!…!出る!…!」

背中のスラスタから光が溢れ出た。今までとはケタ違いの加速で、黒いISに迫る一夏。

いける。今度はいける。その確信が今の一夏にはある。

黒いISがビームをたて続けに放とうとした。一夏はとりあえず篋から離れると、こんどは右に左にジグザグに動きながらビームの攻撃を回避し、敵に迫る。

だが、黒いISも負けていない……その場に止まるようなことをせず、一夏が接近してきたタイミングを見計らって上を飛び、真上からビームを叩きつけてきた。

回避は不可能……そう判断した一夏が雪片で受け止めようと刀身を掲げる。その時……突如、雪片の刀身が光を帯びて、ビームを完全に打ち消してしまう。

「あれは！」

「千冬さんの……零落^{れいらくびやく}白夜！？」

セシリアは驚き、陽太はその光景に見覚えがあるのを思い出す……
それは世界最強のIS使いが最強足りえた反則^{チート}能力とっていたワンオフ^{ワンオフ}アビリティ単一仕様能力。

「いくら姉弟だからって……まさか束か！」

地面に叩きつけられている状態から、黒いISを蹴り飛ばし起き上った陽太。

彼の目の前で、一夏が黒いISに迫る……その手の光を強めながら。

黒いISも手からビームサーベルを出し、接近戦で一夏を叩こうと突進してきた。

迫る両者。

そして一夏が叫んだ。

「これが！俺の……俺達の……！」

自分だけじゃない。千冬が、箒が、そして……反目しながらも守ってくれた陽太の、

「ISだっ……！！！」

一閃！！

見事に、横薙ぎの斬撃が、敵の『ビーム』ごと、黒いISを真つ二つにした。

一瞬のタイムラグの後、爆発する黒いIS……そして残りの二機は背を向けて、アリーナから逃げ出そうとするが、それをフォームアップして炎を纏った陽太が阻む。

「逃がすかよ！」

チャージ・アップした紅蓮の斬撃が、白い光に続いてアリーナを駆け巡り、二機を瞬く間に斬り捨てる。

まるで申し合わせたように爆発する黒いIS達……立ち上る炎の中、フレイムソードを量子化させた陽太が、新しい姿の一夏を静かに見つめていた。

その後は、色々大変であったのは言うまでもない。

増援に来たまでとはいいが、結局役に立てなかった教師陣や上級生たちに、千冬が理不尽な叱責の視線を与えたり、何も爆破する必要はなかっただろという学園側の言い分に、勝手に爆発したんだからしやあないだろ、ボケっ！と失礼なことを言って危うく停学になりかける陽太や、それを必死に止めようとして陽太に殴られる一夏とか、その光景をみてプチギレた篤がいたとか、結局最後は陽太と一夏と篤を殴って千冬が場を収めたとか、セシリアが結局この勝負の行方はどうなってしまったのか！？もう一度再勝負ですわ！！とか言つて皆をげんりさせたのは言うまでもない。

ゴタゴタから解放されたのは午前中……誰もいない深夜の道を四人は歩いていった。

無言の陽太と、無言の一夏と、何かを言うべきかと考えあぐねる篤とセシリア……そんな奇妙な取り合わせの四人の中で、一番最初に口を開いたのは、驚くべきか陽太であった。

「お前………なんで強くなりたいんだ？」

「？……俺？」

話を振られたのは自分かと、篤とセシリアのほうを見る一夏。彼女たちは『そつだ』と無言で頷く。

「俺はさ……………今までずっと千冬姉に守られてばかりで……………いい加減、守られてるだけの関係を変えたくてさ……………」

「だから強くなりたい……………のか？」

「ああ。それっていけないことか？」

今度は逆に一夏が問いかける……………一瞬だけ、陽太は考え、そして静かに答えた。

「言いも悪いもない……………第一、俺はそんな偉そうなこと言える立場でもない」

「そっか……………」

立場でもない……………一瞬だけ、その言葉に寂しさを覚える一夏。

「立場とかそんなんじゃない……………なんていうかな……………俺は、さっきまでお前のことが嫌いだった」

あっさりそんなことを暴露する一夏に、顔が蒼くなる箒とセシリア。だが陽太は特に気に留めることもなく、あっさりと返答する。

「そうか……………俺は今でもお前が嫌いだけだな」

「ひでえな。傷ついたぞ？」

「知るか……………」

「だけどさ、嫌いだからって、相手のこと知らないで嫌いになってちや勿体ないだろ？」

「……………」

「だから……………」

一夏が立ち止まり、三人も足を止める。

そして一夏は陽太のほうを向き、手を差し出すのであった。

「こっから始めようぜ……………俺は織斑一夏……………お前の名前は、なんていうんだ？」

「……………」

その手を無言で見詰める陽太。

差し出されたこの手には……………見覚えがあった。

幼い日に出会ったあの金髪の少女。

自分を差別も卑下もしなかったあの少女。

今でも覚えている、あの暖かな優しい少女に……………。

胸の奥に小さな痛みが走る……………もう、あれから、自分はどれほどの距離を飛んできてしまったのだろうか？

彼女を思い出すたびに走るこの痛みであったが、陽太はそれが嫌いではなかった。

この痛みは……………自分が彼女のことを忘れていないという何よりの証になっているはずだからだ。

しばし、見つめていた手から視線を放すと、陽太は再び歩き出す。
一夏は、やはり駄目だったかと、溜息をもらし、簾とセシリアも落ち込んだ表情になるが、ふと、陽太は足を止めて、特に大きくはないが、澄んだ声で三人に言うのだった。

「火鳥 陽太だ……呼び名は好きに呼べ」
「「「！……」」」

三人の表情が一気に明るくなる。一夏は嬉しさにあまりにとりあえず名前を呼んでみた。

「陽太！」

「……なんだ？」

釣られて箒も呼んでみる。

「陽………太？」

「なぜ疑問形だ？」

そして、セシリアが一番うれしそうな笑顔で彼の名を呼ぶ。

「陽太さん♪」

「ああ………」

特に嫌味も何もせずに返してくれたことに嬉しくなったため、三人は嬉しさのあまりに連呼してしまう。

「陽太！」

「陽太」

「陽太さん……！」

「陽太……！」

「陽太……」

「陽太さん……！」

「陽太……！」

「陽太……」

「陽太さんっ！……！」

「陽太あっ！……！」

「陽太……」

「陽太さんっ！……！」

「やかましいiiiiiiii！……！」

ブチギレて勇み足で寮に帰っていく陽太に苦笑しながら後に続く三人。

この日、陽太は何を言われても無言だったのは言っまでもなかったであろう。

願っていても、望んでいなかった再会（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。げに恐るべきはGW！WW

願っていても、望んでいなかった再会

お母さんが生きていた頃……大好きなあの声と笑顔で、私に『シヤルロット』と呼んでいてくれた頃……

夏の日差しが強まり、畑に一面のヒマワリが咲き誇っていた時。

私がその子を見かけたのは、お母さんにお使いを頼まれた時でした。

いつも行っている商店で夕ご飯のおかずを買ってきた帰り道、お母さんとよく食べに行った顔なじみのおじさんが経営するレストランの路地裏に置いてあったゴミ箱を、あの子はゴソゴソと漁っていました。

最初、私はあの子が何をしているのかわからずに、ボケツと見ていたのですが、どうやらそんな私の様子に気がついた店のおじさんが、大声を出しながら怒って店から出てきました。

おじさんはその子を見るなり、顔を真っ赤にして激怒し、殴り蹴り、怒鳴りながら酷い罵声を浴びせていました。

警察に突き出そうと、店の中にいる従業員の人に声をかけたのですが、一瞬の隙について、その子はおじさんの手からスルリと抜け出

し、そのまま私の横を通り過ぎて逃げ出していきました。

私が、おじさんにあの子が何をしていたのかと聞くと、おじさんは、

『あのドブネズミはゴミを漁りに来たんだ。金がないからって店のゴミを食べて生きてる蛆虫さ。シャルちゃんは、ああいう奴を見かけたら関わっちゃいけないぜ』

いつもは優しいおじさんが、私には少しだけ怖く感じて、返事だけしたら、その場から逃げるように家に帰り、お母さんにその子のことを話していました。

お母さんは、私の話を聞くと、少しだけ悲しそうな顔をして、

『あの人は悪い人じゃないけど、時々、頭に血が上るのが悪い癖ね』

と、ため息をつき、しゃがんで私と同じ目線になって、話をしてくれました。

『シャルロット……その子はね、とても悲しい子なのよ』

『どうして、かなしいの？』

『その子は、お母さんもお父さんもいなくて、自分を守ってくれる人が誰もいないの……だから、一人ぼっちで生きているの』

『お母さんもいないの？』

『そうね……きっとそばにはいないわね』

『……お母さんがいないのは……いや』

私の記憶のすべてに、お母さんの笑顔がいつぱいあります。

お母さんが世界の中心……だから、お母さんがいない世界なんて、考えるだけでも怖くて悲しい。

そう告げると、笑顔になって、お母さんは私に言ってくれました。

『今度、もしその子に会ったら、シャルはどうするの?』

「うゝゝゝん…………友達になる!」

『友達になるの?』

「うん」

私が元気いっぱいでそのことを告げると、お母さんは、いつもよりも嬉しそうな顔で私を抱きしめながらこう告げてくれたんです。

『シャル…………貴方は私の自慢の娘よ』

『シャルル・デュノア』が、飛行機の着陸を告げる声で目を覚ましたとき、自分が泣いていたのをその時初めて気がついた。

「お母さんの夢……………もう、何年も見てなかったのに」

そして、あの少年の事も。

自分が『シャルロット』であることを捨て去った時から、過去の暖かい思い出なんて全部捨て去っていたと思っていただけに、意外にこのことがシャルには堪えた。

「いくら、これから3年間、見ず知らずの土地で暮らすからって……………いきなりホームシックかな？」

誰に言って聞かせるわけでもなく、自嘲気味にそう言って笑うシャル。

故郷では、もう自分を案じてくれる人間なんて一人もいない。あるのはただ結果だけを求めている人間だけ。

今なら、お母さんが言っていた『誰も守ってくれない、一人ぼっちで生きていく』ことの辛さと、あの時の、あの子の境遇がどれだけ過酷だったのがよく理解できる。

だからこそ……………気になって仕方がなかった。

「……………ねえ、君は今、どこで、どんな風に生きてるのかな？」

「それで？」

五月の昼過ぎ……

もうすぐ春も後半となり、徐々に初夏の香りがし初めたある午後の穏やかな時間なのに、なぜか千冬の前で土下座をしている男子が二名。ちなみに今は授業中である。

「お前たちが午後一番の授業に遅刻してきた理由が、私の理解力を

以ってしても、正直解りかねる。頼むからもう一度説明してくれないか？」

こめかみをひくつかせながら、説明を要求する千冬のことを置き去りにして、目の前の二人は、言い争いを始めてしまう。

「だから、止せって言っただろうが！」

「なんでてめえーは、そうやって、すぐに自分だけはいいい子ですよって、アピールしたがんだよ！」

「そもそも陽太が『カレーの早食い』なら誰にも負けん！なんて言い出すのがおかしいんだよ！」

「お前だって、そういうのは得意だぜ！って言ってただろうが一夏！」

「だからって、サドンデスバトルで一日にカレーを7杯も食べることないだろうが！」

「テメエーもそれだけ食ってんだろうが！だけど、最終的には俺のほうがかかったから、お前、来月まで昼飯奢りな」

「ちよつとまで！……誰がお前に負けてるだって？」

「お前が。具体的に言えば、身長以外の全てにおいて負けている」

どこまでも果てしなく、どうでもいい内容であった。

一瞬でも聞き耳を立てた少女たちは、その内容のあまりの下らなさに我を取り戻し、黒板に必死になってテキストを写す真耶の授業に戻る。

「俺の勝ち！お前の負け！！以上！！！！」

「負けてないっつてんだろうが！」

「勝った！」

「いいや、まだだ！！」

「俺の勝ち！！」

「まだ終わってない!!」

「俺の!!」

「まだ!!」

「黙れっ!!!!」

拳が視覚に認識されるよりも早く飛んできた。

顎を砕くようなガゼルパンチが炸裂し、放物線を描きながら窓を突き破って外に殴り飛ばされる陽太と、教室の床を粉々にするような踏み込みの震脚で繰り出されたりバーブローが、一夏の腸をぶち抜く勢いで突き刺さり、彼を無様に地面に這わせた。

「…………馬鹿ども、グランド100週だ」

「グッ…………ガッ…………」

ピクピクと痙攣している一夏を尻目に、授業に戻ろうとする千冬。ちなみに教室の女子生徒及び副担任は恐怖のあまり半泣きになっている。

力いっぱいぶん殴ったおかげか、だいぶ溜飲が下がり、落ち着きを取り戻した千冬は、一つ咳払いをすると、ようやく痛みが引き、お腹をさすりながら起き上がった一夏に対して、教室のドアのほうに指差す。

「…………窓から出て行ったバカを連れて、早く走って来い」

「ゲホッ!ゲホッ!…………窓から出て行ったっていうよりも、千冬姉が殴り飛ばし。」

「あんっ?」

「走らせていただきます!!!」

千冬の目が再び鋭くなった瞬間、一夏は全速力で教室から離脱し、

一目散に陽太の元へ向かうのであった。

「（仲良くなっているのは別にかまわんが……正直、バカなノリは必要ないな）」

授業の進行を真耶に任せたまま、いつもの腕組みをしつつ、それを眺めながら思考を張り巡らせる千冬。

「（あれから束とは連絡が取れていない。そこに、白式のツインドライブも片方が停止してしまった）」

更に現在、千冬を困らせている重要案件。それは一夏のIS『白式』最大の特徴である、白騎士と暮桜の二つのコアを使用したシステム『ツインドライブ』が使用できないということである。

あの乱闘騒ぎの後、白式のシステムのメンテナンスをしたところ、なぜか暮桜のコアが稼動しておらず、休眠状態から一切の操作を受け付けられないのだ。

一応、白騎士のコアは正常稼動しており、単一使用能力も使用できる。普通に戦う分には支障はないのだが、あくまでも、現時点での白式の評価は『第一世代最強機と同じ能力』を有した、ただのISでしかない。

世間の評価ではそれでも十分なのかもしれないが、本来は白式とはツインドライブによって、既存のISとは一線をしいた出力を持つ、ISを越えたISのはずなのだ。

「（つまり、一夏がツインドライブを目覚めさせた以上、白式が本来の性能を発揮できるかは、やはり一夏頼みということか……）」

世界に二人しかいない男子の、自分の弟に与えられた最強の力。色々と苦勞の絶えない弟のことを思い、そして、そんな弟と友達に

なる道を選ぼうとしている少年のことを思い、千冬は人知れずため息を漏らすのであった。

その日の夕方。

すっかり日も落ちきり、夕食を食べるために食堂に集まる生徒達の中に、疲労のためにすっかり動けなくなっている陽太と一夏。律儀というべきか、嘘をつく度胸がなかったというべきなのか、昼間から休みなしに走り通し、きつちりと100周走って、すっかりグロッキーになっているのだ。

「二人とも……夕ご飯は食べれそうか？」

動けなくなっている二人に優しい声をかける筈。テーブルの上に顔を伏せる二人であったが、辛うじて一夏は顔を上げ、弱弱しい笑顔を見せながらも応える。

「ああ……なんか消化にいい物を食うよ」

「うどんなんかはどうだ？私が取ってくるぞ」

そう言っただけで自分の分の焼き魚定食をテーブルに置くと、食券を買いに席を立つ。お金を出すと言いかけた一夏であったが、その動作すら億劫であり、とりあえず食事を持ってきてくれてからでいいかと考え直し、再びテーブルに顔を伏せる。その時、二人に声をかけてくる人物がいた。

「よーよー！おりむー！！」

思いつきりな間の抜けた声で。

「……………何度も言っただろうが馬鹿女……………俺を昭和の玩具と同じ名前で呼ぶな！」

「え？どうして？、よーよーは、よーよーだよ？」

陽太が動けない体を無理やり動かして、少女に叫ぶ。

布^{のほとけ}仏^{ほんね} 本音。いつもなぜか袖丈が異常に長い制服や私服、着ぐるみを着ている不思議な不思議なセンスをした天然少女である。

間延びした話し方と、妙なセンスのあだ名で二人のことを呼ぶ、このクラスメイトのことが、陽太はどうも苦手であった。

「（こいつの話し方……………なんとなく、あのアホ（束）を思い出させやがる）」

『さあ、私をつかまえにいらっしやい♪』というセリフと共に、ピンの花びらに囲まれているウサミミ美女を思い出し、余計に機嫌が悪くなる陽太。だが、そんなこと知ったこっちゃない、と言うように、本音は陽太に抱きついて頭の上に乗っかってくる。

小柄なはずなのに、背中に当たる意外なほど大きなボリウムを感じながらも、陽太は振り払うように起き上がるのであった。

「離れろ！そしてそのアダ名は今すぐやめろ！」

「ええ〜！？、よーよーは、意外に細かい所に拘るタイプなんだね」

「細かくない！」

「何をなさっておいでなんですか！ー！」

そこへ、箒と一緒に陽太達の食事を持ってきたセシリアが怒りの表情で怒鳴り込んでくる。何で怒ってるか理解できない陽太が、呆けた表情で本音と視線を合わせて考えあう。

「お前が悪いから怒られたらどうが」

「違うよ。よーよーが、いけないんだよ」

「なぜに？」

「乙女の心は、フェルマーの最終定理よりも複雑なのだ」

「根本的に答えになってない！ちなみにあれは解答が複雑なんじゃない、途中の式の証明が難解なだけだ！」

「そういう言い方が、何もわかってないって言うんだよ？」

ヤレヤレ、ちよつと残念だ。といった表情になる本音に対して微妙に腹が立つ陽太。だがそんな二人のやり取りが尚更セシリアには気に入らなかった。

「まあ！疲労で動けないといえますから食事を運んできましたのに……女性を相手にする体力はおりなんですね？」

「……あの……その……ごめんなさい？」

「どうして疑問系で終わるんですか！」

とりあえず謝り方がなっていないな、と人ごとのように心でつぶやく一夏は、箒からうどんを受け取って、先に食事を始めようとする。だが、その時、自分に対して視線を感じる。

「？」

目の前の箒が、顔を赤らめながら、妙にモジモジとだしているのだ。

「なんかあったのか、箒？」

「いや……その……」

「早く食べないと冷めちゃうぜ」

「ち、違うのだ！」

箒が意を決したように、テーブルに乗り出す。その勢いに思わず気圧される一夏。

「い、一夏！」

「お、おう……どうか……したのか？」

「……き、今日は……その、う、運動をして疲れただろ」

「あ、ああ……まあ、今日はちょっとホントに疲れたかな？」

「だ……だ、だったら！……わ、わわわ私が！た、たたたた食べさせてやる……！」

「へ？」

思わず間抜けな返事をしてしまった一夏に、すっかり頭に血が上った箒が、キツと睨みながらまくし立てた。

「疲れたお前を気遣って、食事を食べさせてやるって言っているのだ……嫌なのか！、いいのか！？、はつきり応えろ！」

「あ、そういうことか………だったらさ……」

『おねがいします』という答えが返ってくると思って、花が咲いたような嬉しそうな表情をする箒であったが……

「そこまで気を使わなくてもいいぜ。飯食うぐらいの体力残ってるし、それにうどんって意外に誰かに食べさせにくいと思うしさ！」

「……………」

「お前も自分の分食べるのに集中したほうがいいぜ。ただでさえ、

運動した後は腹がすいて、いつも以上に食べちまうし・」

「誰が人並み以上に食べているだ！！！！無礼者！！！！」

突然怒り出して、立ち上がる筈。……………この場合、突然怒ったというよりも、一夏が怒らせたというのが適切なのかもしれないが……。なぜ怒り出したのか理解できない一夏は、必死に平謝りをするが………そんな一夏を見ながら、陽太が自分のことを棚にあげてポツリと言う。

「とりあえず謝り方がなっていないな、一夏。そこは『カロリー消費をしたための栄養補給だから、寧ろ体には有益なんだぞ』ぐらいのフォローをしないと」

「……………わたくしは、どっちもどっちだと付け加えさせていただきますわ」

「うん。そだね」

セシリアと本音が、やっぱり解ってない二人に対して、しみじみと感想を述べるのであった。

騒がしい夕食が終わった後、部屋に戻った陽太は、すでに外出時間の門限が過ぎていることを知っていながらも、窓から一人飛び出し、夜の敷地内を一人歩いていた。

目的地は、第二アリーナ。そこは最近ではすでに日課になっている、

あることをするための場所でもある。

到着するなり、ピットに向かい、アリーナ内のセキュリティをちよこつと不正に操作し、ISの展開をする。行った操作とは、ISの反応が外部に漏れないようにするためのものだ。

彼のファイバードにはステレス機能など備わっていない。そういった機能をオミットした上で、攻撃力や機動力に機能を割いているため、どうしてもこういった手間がかかってしまうのが、ちよつとめんどくさいと陽太は思っていた。

外に飛び出すなり、陽太は空中に飛び出し、フレイムソードを構え、静かに……前方だけを見据える。

集中、集中、集中……

周囲のすべてを消し去り、自身の集中力を究極にまで高める。そして、作り上げるのだ……自分の知りうる上で、『最強』のISを……

陽太の目がわずかに動いた。

そこにいたのは、陽太にしか見えない、展開済みのIS。長い黒髪を後ろで束ね、一本の刀を持つ、白き最強……

目の前のISが動く……光速と揶揄されてしかりと言える、圧倒的な速度で間合いを詰めると、横一閃で陽太を斬り裂こうと刀を振るった。

その攻撃を、目の前のISと、ほぼ同速度で上に跳躍して回避した陽太は斬りかかる。

敵の反撃も速い。陽太が剣を振り下ろすのとほぼ同時に突きを放っており、陽太の頭部を串刺しにする勢いで放たれた突きを回避したこと、斬撃のバランスが崩れ、相手に回避の隙を与えてしまう。

紙一重で互いの攻撃を避けてみせる両者。

仕切り直すために、空中でバク転しながら距離を開けた陽太は、態勢を整えると同時に、敵に向かって突進する。

光速と超速。刀と剣。そして白と赤。

物理法則から解き放たれた流星のように、夜空を自在に飛び交う星と星が幾度も激突し、離れ、一進一退の戦いを繰り返す。

どれほどの時を斬りあっていたのだろうか。

滝のような汗を流しながら、イメージで作り上げた敵を睨んでいた陽太が、アリーナの客席にいる千冬に気がつき、体から一気に力が抜けてしまう。

そのまま、ゆつくりと千冬の元にまで降り立つ陽太………かなりバツの悪そうな表情であるが。

「精が出るな？」

「……………」

「無断で外出、アリーナの無断使用、後は肖像権の侵害か？」

「最後のは、訳解らん」

滝のような汗をかいている陽太に向かって、スポーツドリンクが入ったペットボトルを投げ渡す千冬。

それを受け取った陽太は、ISを量子化し、インナー姿のまま、ド

リンクを一気飲みする。

「で？現役時代の私になら勝てそうなのか？」

陽太の手が止まる。振り返り『なぜわかった！？』と表情だけで訴えてきているのを見た千冬は、いつもの全てを見抜いているという笑みで陽太に向かって言い放つ。

「当たり前だ。私はお前の担任教師だぞ？」

「……………ソイツハ、ドウモ」

「ついでに一つ聞いておきたい」

そして、不意に真剣な表情になり、陽太の眼を見ながら彼女は話をしてきた。陽太も何となく聞かれる内容を理解しており、自然と表情が強張ってしまう。

「束からは、その後、何か連絡は？」

「……………こつちから何度も連絡してんだが一向に繋がりがられねえ。てか、そつちが取れないなら、こつちは尚更ムリだぞ」

「篠ノ之にさり気無く話を聞いてみたが、最近音信不通になりがちだそうだな」

「糸の切れた凧じゃあるまいし……………どこで何やってんだか……………」

「……………心配か？」

「心配だ。自分の見ていないところでやらかしたことを、尻拭いさせられないかって考えると、寝不足で授業中に居眠りしそうなくらいに……………」

なんだかんだと言って束のこと忘れていない陽太の様子が微笑ましく思える千冬であったが……………。

「好きに居眠りしろ。ただし私は手加減を知らんから、起こす時に間違つて永眠させてしまつかもしれんがな……」

「絶対に、寝たりしません！教官！！！」

「なんでもつと早く起きなかつたんだ！」

翌日の朝……いつもの通学路を爆走する篤は、後方にいる一夏と、彼に襟首を持たれながら引つ張られている陽太を怒鳴りつけていた。時間的に急がないと遅刻しそうなのだが、なぜだか余裕をもって朝の準備を済ませていたはずなのに、この時間になってしまっている。だが、その原因を作った人間は、ギリギリまで寝ていたにも関わらず、いたって平然と、朝の食事を進めていた。

「陽太がいつまでも寝てるからだぞ！」

「俺の起床時間は俺が決める……もぎゅもぎゅ……」

「『もぎゅもぎゅ』って、可愛く言ってる場合か！！、一夏に頼ってないで少しは自分で走れ！」

コロッケパンを口で咥えながら、コーヒー牛乳のストローを刺している姿を見て、篤じゃなくても流石に怒りたくなるぞ、と心の中でツツコミを入れる一夏。

「だが、確かにこのままじゃ、遅刻してしまう………ならば取るべき手段は一つ」

急に手に掴んでいた感覚が軽くなったことに疑問を覚える一夏が、陽太を見たとき啞然となる。コロッケパンとコーヒー牛乳の紙パックを両手に持った状態で、ISを展開していたのだ。それを見た瞬間、陽太の野郎としていることが何なのかが一夏には手に取るように解り、叫んでいた。

「てめえ！一人だけ卑怯だぞ！！」

「真に賢い兎は前半に体力を温存しておいて、後方からぶっこ抜くもんなんだよ、鈍亀君」

ふわりと上昇し、いきなり高速飛行を開始する陽太。

地上で走っている二人が、自分に向って何か言っているようだが、彼はそんな二人に一言残して、さっさと自分一人飛び去ってしまう。

「あでゅ」

「「卑怯者！！！」」

心地よいBGMだ、と勝ち誇って空を飛ぶ陽太。

地上を走っては間に合いそうもないが、ISを使って飛んで行けば30秒ほど空中散歩もできそうなぐらいに余裕がある。

『ぶっちゃけ、眠いから、もうサボっちゃおうかな』と、後のことを考えない選択をしようとした時、彼の眼に、フト、登校中の生徒の群れの中の、ある生徒の後ろ姿が目に入る。

「……金髪……」

この学園では特別金髪は珍しくない。
世界中の国家が優秀なIS操縦者を毎年送ってくるこのIS学園において、ナチュラルな金髪を持つ外人がいるのは至極当然だ。セシ

リアなど、まさにそうなのだから。

「あれは……男子服？」

だがこれは疑問に思ふべきことだ。

現状、一夏と自分以外に男子はこのIS学園には存在していない。
ましてや、そのもう一方は髪染めなんぞしていなかったし、今も遙か後方の地上をひたすら走っているはずなのだから。

じゃあ、あれは誰だ？

純粹な疑問が心の中によぎり、彼は急いでその男子生徒に話してみようと、地上に向かう。

男子生徒の後方20mぐらいの所に降り立つとISを仕舞い、駆け足で向い、声をかけようと……

「おい！」

「ぐわっ！」

したところを、千冬の手で顔面を鷲掴みされてしまった。後方から真耶も大急ぎで追いかけてくる……途中でコケたが。

「ISの無断使用は厳禁だ……非常時なら許してやれるが……まさかタクシー代わりに使う阿呆がいようとはな」

「グッ！ギッ！」

〇。〇。〇。〇フィンガー再び……顔面を掴み上げられ、苦しむ陽太であったが、千冬は一切の情けをかけるつもりもなかった。
手を放したと思えば、目にも止まらぬ速さで陽太の首に腕をかける
と……

ゲギッ！

一瞬で鈍い音が響いて、辺りの女生徒から悲鳴が上がりかける。だが、それすら黙らせるように、白目をむいて意識を失った陽太を、用の済んだゴミを捨てるかのような手つきで投げ捨てることで、悲鳴を黙らせる千冬。

IS学園の魔王（千冬）は、二度ほど手を叩くと、周囲の人間と真耶にもよく聞こえる声で、こう云ったそうだ。

「規則破りには罰が必要だ……皆も、そうは、お・も・わ・ん・か？」

はい……としか、言う術を持ってない真耶と女生徒たちであった。

SHR前……なんとか間に合った一夏と箒であったが、途中で、屍寸前になりかけていた陽太を発見した時は、何があったのか!?まさか先日から続く新たな敵の出現か!と驚いていたのだが、それも話を聞くとバカバカしくなってしまう。

「く……首が…固まって動かん…」

机の上で呻いている陽太を見かねてか、一夏が陽太の頭を持つ。

「回すぞ。覚悟はいいか？」

「……よし、こい」

再び鈍い音が鳴り、一瞬だけ陽太が息をのむが、それを何とか飲み込んで、首筋をさすりながら千冬についてばやき始めた。

「あの悪魔將軍め……もう少しで首がねじ切れてるところだぞ」

「しつつかし、千冬姉も、お前相手だとホント手加減無しだな」

「手加減しろよ！常識的に考えて、お前相手だけで充分だろ、加減なしは！」

「いや！俺も勘弁してほしい！！あの人の本気なんぞ、怖くてくらいたくない！」

「だよな。絶対、人間辞めてるし」

「ああ………実は宇宙から来た戦闘民族の末裔だとか言われても、かえって説得力がでて・」

「だれが宇宙人だ？」

教室の扉が開いた瞬間、陽太と一夏は一瞬で土下座をしてしまう……

……そのあまりの潔さに言葉を失う千冬。

あきれながら、真耶と一緒に教室に入ってくると、二人に向って手をブラブラとしながら、早く席に着けと促す。

「……………早々貴様らだけに構ってられん。早く席に座れ」

『えっ、マジ？』という表情に一瞬なると、心底ホッとして席に座る二人を見た千冬は、『やっぱり二、三発殴っておくべきか？』と見逃しを撤回しかけたとき、真耶が空気を読んだのか、生徒達に向かって、あることを話し出す。

『ええええええ〜！！？』と教室から驚きの声上がり、陽太が、フト、あることを思い出しかける。

ついさっきのことなのだが、どうにも喉から上にながってこない。
うーん、なんだっけか？……と、一人唸っている陽太に不審な目を
向ける一夏。

「失礼します……」

穏やかそうな声で、教室のドアが開かれ、転入生が入って来た瞬間、教室の喧騒がピタリと止まる。

だが、一人唸っている陽太だけが、蚊帳の外というか、空気を読めずに腕を組んで『うんうん』唸っていたのだが、そんな陽太を転入生が見た瞬間、足を止めて、驚愕の表情で動きを止めてしまった。

真耶がそんな転入生を心配して声をかける。その声で我を取り戻し、陽太は目の前で固まっている転入生を見た。

人懐っこそうな顔、礼儀の正しい立ち振る舞いと中世的な顔立ち。髪は濃い金髪で、黄金色のそれを首の後ろで丁寧にまとめている。体つきはともすれば華奢に思えるぐらいスマートで、しゅっと伸び

た脚がカッコいいかもしれない。

印象は誇張なく『貴公子』といった感じだが、その表情は大きく眼が見開いて、陽太を見つめ続けていた。

一瞬だけ、誰かわからずに、呆然となる陽太であったが、次の瞬間、机から思わず立ち上がるぐらいに驚愕し、周囲を驚かせてしまう。

「よ、陽太？」

一夏がその様子を心配して声をかけるが、それが引き金になり、転入生の表情が更に強張った。二人が、同時に……驚愕と疑問と……遠き日の香る懐かしさを込めた声で名を呼ぶあう。

「……よ、陽太……なの？」

「……シャル……」

視界いっぱい広がる向日葵畑で、日差しが反射してキラキラと光る金髪と純白のワンピースを着た彼女は俺の手を取ってこう言うてくれた。

——もう泣かないって約束してね？

——寂しいから悲しいからって、自分から死んじやおつとじちや駄目だよ？

どうして、どうして、どうして、どうして……

「（君が……ここにいるの、陽太？）」「

「（なんで……君がここにいるんだ、シャル）」「

シャルル・デュノア（前書き）

今回は、戦闘無しの日常編。
だから短いですw

シャルル・デュノア

さつそく次の日、私はその男の子を探すために、街のあちこちを歩き回りました。お母さんから手渡されたのは、麦藁帽子と水筒。夏の日差しが厳しいから熱中症にならないようにと、心配してくれていることです。

幸い、私の住んでいた街はそれほど大きくない街だったおかげで、その子を見つけることは、そんなに難しくはありませんでした。

その子は寂れて修繕されぬまま放置された教会の中、ボロボロになった十字架の前で膝を抱えてうずくまっていました。

昨日よりも増えている傷。泥だらけで所々破れてほつれている服。足の先が破れて親指が見えてしまっている靴。

見れば見るほど、私は不思議で仕方がありません……なぜ誰もこの子のことを助けてあげようと思わないのだろうか？

純粹な疑問とともに、私は気がついた時、彼に声をかけていました。

「こんにちは！」

「！！！！？」

飛び上がるという表現がぴったりなぐらいに、びっくりした彼はそ

の場から飛び退くと、急いで柱の陰に隠れてしまふ。

「……………あの〜」

「……………」

柱の陰に隠れたまま、ずっとこちらを見てくるその子……………しばらくお互いが見つめあう。だが、このままでは埒があかないので、思い切って私がもう一度声をかけて一歩踏み出してみた。

「あの〜!」

「!?!?!?」

出していた僅かな顔を引つ込めて完全に隠れてしまふ。

私は急いで柱の陰にいる彼の元に駆け寄ると、その場に蹲りながら、耳を手で覆い目をきつく閉じていた。

「（私に話しかけられるのが、そんなに嫌なのかな？）」

僅かに肩が震えているのを見た私は、なんだか胸の内に罪悪感が湧いてきて、このまま帰ったほうがいいのかな、という考えが一瞬よぎった。

「（……………でも…）」

だが簡単には引き下がれない。なんせお母さんと私は約束したのだ。友達になつてみせる……………そのことをもう一度固く胸に誓うと、大きく息を吸って、耳を塞いでいる彼にもよく聞こえるぐらいの大声で呼びかけてみた。

「あのー!?!?!?!」

「！！！！？」

その声にまたしてもびっくりしたのか、彼はその場から走り出すと……動揺の余り、一蹴して私の後ろに戻ってきてしまう。

「！！！！？」

そのことにまたびっくりしたのか、今度は反対方向に走り出し、柱を一周して、私の前に戻ってくる。

「……………フフツ」

その光景が、なんだかおかしくて……………気がついたら、私は彼の後ろを追いかけていた。

「まってよー♪」

「！！！！！！？」

二人で柱の周りをぐるぐる、ぐるぐると回る時間無制限追いかけてこ……………そして二人は同時に体力が尽きてしまう。

「はっ、はっ、はっ……………」

「……………」

二人は柱にもたれて、汗だくになりながら一緒に座り込む。どれぐらい息を整えていたのだろうか……………汗びっしょりになりながら、私は彼に笑いながら声をかけた。

「楽しかったね、鬼ごっこ♪」

「……………」

「足、すつごく早いね！走るの得意なの？」

「……………」

「私もね、走るの得意なんだよ！クラスで一番早いんだ！！男の子にだって負けないぐらいに！」

「……………」

「あ、そうだ！」

母親から貰った水筒の蓋を開けて、コップに注いでいく。中身はどうやらオレンジジュースのようだ。

「はい、どうぞ」

「……………」

私はそれを彼に差し出す。だけど、目の前に差し出されたそのコップを、驚いた表情で受け取ると、彼は興味深げに見つめ続けて、一向に飲もうとしない。

「どうしたの？」

「……………どうして…」

彼が初めて自分に口をきいてくれた！そのことがうれしくて、私は思わず身を乗り出す。

「どうして……………くれたの？」

「え？……………だって、当たり前でしょ？」

「????？」

何が当たり前なのか解らない彼は、首をかしげてこちらを見てきた。私は、そんな彼に笑顔で答えてみせた。

「だって、私と貴方はもう友達だもん」

「……友達……？」

まるで初めて聞いたかのように友達という言葉を口にする彼に、私は笑顔で自己紹介を始めてみた。

「私はシャルロット！、貴方のお名前は？」

「ヨ……ヨウタ……」

「……よ、陽太……なの？」

「……シャル……」

二人は呆然となる。当たり前だ。絶対に会うことはもうないと思っていたはずの人物が目の前にいるのだから……

だが、周囲はそうはいかない……事情などまるで知らない人間達からしてみれば、何をそんなに驚いているのかと、心配になって聞いてくるのが普通というものだ。

「おい、陽太……………ひょつとして、知り合いなのか？」
「！！？」」

その言葉に何よりも真っ先に反応したのがシャルのほうであった。
想定外にも程がある……………もしこの場で、昔の自分を知っている陽太が口を滑らせてしまったら、何のために自分がここに来たのかわからない。

今の自分の環境に義理立てする気はしないが、だからといって何もできないまま終わりにすることもいやだ。

気がついた時、シャルは陽太の元に駆け寄り、彼の手を引っ張って、教室を飛び出していた。

その光景を茫然と見つめる一同……………の中で、まったく動じてなかった方が一名いた。

「転校初日の挨拶もせんといきなりサボリとは……………中々やるじゃないか、シャルル・デュノア」

「え？……………え？、え？、え？」

ようやく再起動した真耶を置き去りに、いつ通りクールに事態を一人で受け流した千冬は、簡単な『説明』だけをし始めた。

「転校生の名前はシャルル・デュノア。フランスから来たそうだ。」

「へえっ？あ、あの……………織斑先生？」

「どうやら小僧の知り合いだったみたいだな……………ではHRを終了する。」

その言葉を聞いた瞬間、クラス中の女生徒達の思考回路が一斉に爆発した。

「なに！？ひょっとして知り合いつてことは……」

「火鳥クンの謎めいた過去を知っている人物？」

「だけど、さっきの様子……友達っていうよりも……」

「……突然、蒸発した恋人……」

ある女生徒のその言葉に、クラス中がぴたりと止まった。ザ・ワールド（妄想）が発動したのだ。

「謎の美形男子生徒……だけどさっきのあの様子は、まるで恋い焦がれた相手との突然の再会……」

「それってもしか……」

「二人は……」

「……」「……」「禁断の仲だったってこと！！！！？？？」

女生徒達の妄想が暴走した。冗談ではなく、どんどん膨れ上がっていく……勢いに乗って。

その喧噪を聞いていた一夏は、陽太が聞けば、IS出して暴れだすぞ。と心の中でツツコミを入れて、席を立つ。

確か次の時間はIS模擬戦闘か、早く着替えなきゃな、とのんきにしていると、教室から出て行こうとしていた千冬が去り気に、

「織斑。二人が次の授業に遅刻しないよう連れて来い。一秒でも遅刻したら連帯責任で三人ともグランド10周だぞ」

まったく関係ないのに、とばかり受けた……！！、と心の中で叫ぶ。

スタスタと歩いて行く千冬の後姿を見送りながら、一夏は廊下を早

歩きに見えなくもないスピードで疾走しながら、陽太を探し回る羽目になるのであった。

一方、その頃。

根も葉もない噂だけが校内を光の速さで駆け巡らせている二人はといえば、屋上に来ていた。

これからする話は誰にも聞かれない。一瞬だけ男子トイレに入ろうかと考えてしまったが、その考えをシャルは顔を真っ赤にしなから否定した。

「……………」

「……………」

だが、いざこうやって二人っきりになると、何から話したらいいのかわからず、二人の間に静寂だけが走る。

陽太は、シャルに手を引かれながら、彼女のこの手の暖かさに再び触れられたことが、まるで夢のようなことに思えてならなかった。

今でも思い出す、彼女との出会い、わずかな触れ合い、そして別れ
……

自分が生きてきた中で、もっとも幸福だったといえるあの黄金の時間の続きが再び来るとは思っていなかった。

そんな感傷に浸っていた陽太に、バツの悪そうな顔で話しかけるシャル。

「……あ、あの……」

「あ……悪い。……どうにも不意打ち過ぎたから、戸惑ってな……」

一夏達が聞けば、驚いて腰を抜かすぐらいに穏やかな声と表情でシャルに向かって話しかける陽太。

「フフツ……それは『僕』もだよ、陽太……」

「あれから確か8年だよな……久し振り、シャル」

「うん。久し振り、陽太」

シャルが手すりをに手をかけながら、空を見上げる……

「IS学園に入学してたってことは……陽太、ひょっとしてISに乗れるの？」

「ああ……色々あつて乗れるみたいだ」

適当にお茶を濁すように答える陽太。正直、なんで乗れるようになったかと聞かれると返答に困ってしまう。彼女に話したくないことばかりで……。

陽太は卑怯だと感じながらも、話題を変えることを選んだ。

「なあ、シャル……デュノアって……」

「うん。お父さんの名字だよ」

「……親父さん？」

「デュノア社って……知ってる？」

「……世界第三位のシェアを持つＩＳメーカーだろ？」

「うん。そう……僕のお父さんは、その社長なんだ」

「……それに話し方……」

シャルの手が一瞬だけピクリと揺れたのを見た陽太は、シャルが微妙にさつきから何か余所余所しい話し方になっている理由に触れたのだと確信する。

「陽太……いきなりで悪いんだけど……」

「……なんだ？」

「……ここじゃ、僕のことを「シャルル・デュノア」というフランスの代表候補生の男の子として扱ってほしいんだ」

「……」

背を向けたままこちらを向かないシャルの背中を見つめる陽太は、目を閉じながら静かに返事をした。

「わかった……シャルル・デュノアだな」

「……？……いいの？」

あまりにあっさり了解したことに、さすがに驚くシャル。そんなシャルの隣に立ち、陽太は空にある太陽に向かって手を伸ばしながら、話しを続けた。

「いいも何も……自分のこと誰にも聞かれたくないから、こうやって二人つきりになっただろ？」

「だけど……」

「何があったのかは聞かないし、何を求めてIS学園に来たのかも聞かない……聞かないし、何かあったら俺に言えばいい。何でもしてやる」

「陽太……どうして……」

なんで、そんな無条件に僕に全面協力してくれるの？と、聞こうとしたシャルと陽太の間に風が流れる。

「——し」

「え？」

「二度も言わない」

「ちょ、ちよつと……!?!」

いたずらっぽい笑顔でシャルに微笑むと、そのまま廊下に向かって歩き出す陽太。そこに大声で二人を探し求める一夏が階段を走って上がってくる。

「陽太ー!!あと……デユノアー!!」

大急ぎで上がってくる一夏と目が合うと、いつもの仏帳面になる陽太であったが、焦りまくる一夏の開口一番に、血の気が引いてしまっているのであった。

「まずいぞ!」

「なんがだ？」

「遅刻したらグラウンド10周!たぶん俺達はボコられるオマケつきだー!」

「!!？」

聞くや否やシャルを脇に抱え、一夏の首根っこを掴み、階段を飛び降りる陽太。

「よ、陽太っ!？」

「一夏！時間は！！？」

「残り五分だが、着替える時間を入れたら三分もないぞ!!」

「シヨートカットするぞ！しゃべんなよ！！」

「えっ！？えっ！！！？えええっ——！！！」

シャルの悲鳴を無視する形で、疾走し、窓から飛び降りる陽太達……事情を知らない者たちが見れば何事かと思うかもしれないが、陽太達にしてみれば生命の危機なのである。

結局、一応時間にはギリギリアリーナに間に合った三人は、大急ぎで着替え、肩で息をしながら直立不動の姿勢を維持しつつ、ジャージ姿で仁王立ちしている千冬の前に仲良く並んでいた。シャルにしてみれば初めてのことで、緊張感があまりに重過ぎる。冷や汗を流しながら、千冬と目を合わせようとせずに視線を外している二人の態度も気になる。

世界最強のＩＳ使い、織斑千冬。やはり、その存在は半端ではないのか……だが返ってきた言葉は、他の二人にしてみれば驚くほど優しいものであった。

「初犯ということで今回に限り不問にする。早く自己紹介を済ませるデュノア」

「は、はい！」
「「!？」」

『俺達の時とは扱いが違いますか?』と無言の抗議をする二人であつたが、視線が千冬と合うと一瞬でへし折られてしまふ。おつかな過ぎて言うに言えない。

骨の髄まで服従精神が受け付けられかけている二人を放置して、千冬はシャルに自己紹介をするよう、彼（彼女）を一步前に出させた。緊張の面持ちのまま、一步前に出て、自己紹介を始める。

「先程は申し訳ありませんでした、シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、みなさんよろしく願います」

にこやかな笑顔と真摯な態度はまさに『貴公子』というに相応しい。

「きゃ……」
「はい？」
「きゃああああー！！！」

女子による歓喜の声がソニックウェーブとなって、男子三人?の聴覚を直撃する。

「男子!三人目の男子!!」
「しかもウチのクラス!？」
「イケ面の織斑くん!クール&ドライが魅力の火鳥くん!そして今度を守ってあげたくなる系!」
「そして……」
「（二人は禁断の関係!!!）」

陽太とシャルを見比べた女子の大半が、口にこそ出さずに、同じことを同時に心の中でつぶやいた。女生徒たちの君の悪い視線に、思わず後ずさる二人。

「自己紹介も終わったな……では授業を始める」

だが、いつまでも馬鹿騒ぎをしているわけにはいかない。これ以上は授業の遅延となると判断した千冬が強制的に授業の開始を宣言する。

「本日はISによる基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、小僧、デュノア。試しに飛んでみる」

「えっ？」

一人驚きの声を上げる一夏であったが、セシリアとシャルはすぐさま意識を集中させ、一瞬の間を置いて、ISを展開させた。陽太においては振り返った瞬間、すでに展開が完了しているほどで、隣のシャルの方を見て驚きの顔になっている。慌てて意識を集中して白式を出す一夏。

シャルが展開したISを見た陽太は、一瞬、何かと思考が停止してしまう。見れば千冬も若干驚いているぐらいだ。最初、シャルがフランスの代表候補生というぐらいだから、フランスが生んだ第二世代の名機、『ラファール・リヴァイブ』を使っているのかぐらいにしか考えていなかった。

フランスはただでさえ、IS開発が最後発であり、第三世代の実用化の目処が立たずに色々窮地に立たされているのを前々から知っていたが、だがしかし……シャルが使用しているISは明らかに第二世代のものではない。そればかりか……

「……俺と同じ、『ブレイブシリーズ』だど？」

白を基調としたカラーリングながら、両肩が赤い装甲をしており、
ファイティング・スラスト
X状の加速機搭載推進翼をしており、機動性と加速性を確保している。胸には、宝石の様な輝きを放つ蒼い球体の結晶が埋め込まれており、その周りを金の角と白い装甲が覆い、腰部や脚部の装甲もすっきりしたもので、これはブレイブシリーズに共通している、スタビライザーなしでの高度な姿勢制御能力の賜物でもあった。腕部の方は、左腕のみに取り付けられているシールドが異彩を放っており、これはおそらくシャル個人が増設した装備なのだろう。

デュノア社のリヴァイブはもちろん、他のどのISとも違った形状……第四世代の白式とも違うデザインであり、唯一、陽太のファイバードに非常に近いフォルムをしている、このシャルのIS。

「このISの名前は『ダ・ガンX』。最近ロールアウトしたばかりの準第四世代ISです」

「じ、準第四世代……!?!」

クラス中が驚きの声を上げる。

世界各国が第三世代の実用化に必死八苦している中、この発言は、すでにフランスが第三世代の実用化に成功している上で、第四世代の研究をある程度完成させているというモノと同義なのだ。

「お待ちになって、デュノアさん!?!」

「えっと……セシリア・オルコットさんですね?」

そのシャルの発言に待ったをかけたのは、同じヨーロッパ出身の代表候補生のセシリアであった。

第三世代の開発で一步先をいつているイギリス出身であるセシリアにしてみれば、正に寝耳に水な発言であるのだ。

「フランスが第三世代の実用化に成功しているなんて話、聞いたことがありませんわ！」

「えっと……実は最近……ある方がデュノア社に技術協力をして下さって……」

「技術協力？」

その言葉を聴いて首を傾げるセシリア。それほどの技術力を有している人間とはいったい誰なのか。

だが、陽太と千冬は、大体の事情が飲み込めた。準第四世代の開発なんていうことを、短時間でできる人間は一人しかいない。しかも最近になって妙に音信不通になっていて、明らかに怪しい。タイミングが合いすぎている。

「（束だ……）」

「（束か……）」

「僕もこのISを渡されてまだ四日しかたってないんです……実践テストにいたってはまだ行っていなくて……できれば、オルコツトさんにも協力してほしいんですが……」

「え？えええつ？……まあ、そういうことでしたら、協力しないのもやぶさかではありませんわ」

突然の助力の要請に、拍子抜けをしまっセシリア。

元々シャルと敵対しているわけでもなく、最近ではだいたい男子に対しての偏見もなくなってきたため、特に手厳しい返答もするこ

とがなくなっていた。

「もちろん……君にも協力してほしいんだ、織斑くん!!」

「ああ、そういうことなら遠慮なく言ってくれ、俺はいつでも協力させてもらうぜ」

「ありがとう!!」

一夏の好意的な返答に、満面の笑みを浮かべて喜ぶシャル。

そんなシャルを見ていた陽太は、なんだかとてもおもしろくなく……思わず背後から一夏の背中を蹴っ飛ばしてしまう。

「グワツ!!」

「オラツ……さつさと飛ぶぞ」

「てめえ!陽太!!」

「あつ!二人とも!!」

不貞腐れて飛んでいく陽太の後を追いかける一夏と、そんな二人を追いかけるシャル。

最後に残されたセシリアはというと、場の空気についていけず、どうするべきかと迷っているところを、千冬のアゴ先で『行け』という合図を受けて、納得のいかないものを抱えながら後を追うのであった。

セシリアを除く、三人のやり取りを見ていた女生徒達は、再び妄想エンジンをフルスロットルさせる。

「（これってひょっとして……デュノア君は織斑君が好き↓織斑君は火鳥君が好き↓火鳥君はデュノア君が好き……っていう、三角関係!!?）」

美味しい。あまりに美味すぎる。BL好き女子生徒の思考と嗜好を刺激するにはあまりに美味すぎる妄想トライアングルである。

ハア、ハア、怪しい息遣いになっているクラスメイトを見つめていた篤が、一言……心底、思ったことを口にした。

「……………ここは腐女子の国か……」

シャルル・デュノア（後書き）

というわけで、ダ・ガーンが何の脈絡もなしに登場しました。

『ブレイブシリーズ』という新しい単語が陽太の口から出ていますが、これは元ネタが勇者シリーズのISのことです。

さてさて……次回はいいよ、我らがシャルちゃんがヒロインをしてくれますw

そっぴや今回、箒もセシリアも空気だな……え？中国娘？？

忘れてないよ。ただ順番が逆転しただけさ！けっしてめんどくさくなくて除け者にしたわけじゃないんだからね！w

シャルル・デュノア？（前書き）

約一月ぶりの投稿・・・

わかってんよ、誰も期待してないってことぐらい・・・（泣

だが、俺は負けない諦めない！

ということで、楽しんでいてください。

シャルル・デュノア？

「どこで生まれたのか知らないの？」

「知らない」

あれから私は色々陽太に話を聞きました。

彼のお父さんとお母さんが死んだ後、フランスにある孤児院に引き取られていたこと。だけどその生活は陽太には厳しく、同じ子供たちや、職員にまで酷いいじめを受けていたこと。そしてある日たまりかねて孤児院を飛び出してきたこと。その後、各地を転々としていたこと。だけど幼子が一人で生きていくにはあまりに世間は厳しいこと。

「気がついたらこの国にいた……だけど、父さんも母さんも日本人だから……たぶん俺は日本人だ」

膝を抱えて座る陽太のその姿が、私にはとても寂しそうに思えました。

「シャルは……お母さんと二人で寂しくないの？」

「全然！！、だってお母さんはとっても優しいもん」

私は立ち上がり、そう言って陽太に手を差し出します。

「ふえっ？」

「ついて来て！」

陽太の手を強引に引っ張って立ち上がり、私は走り出します。

「お母さんがね！、陽太に会いたいつて言ってたの！」

「！？、い、いいよ！」

「大丈夫！」

陽太の心配そうな、困惑した言葉も私は一切聞かず、笑顔で彼を家に招きいれようと思いました。

家がないのなら、私の家に住めばいい。

家族がないのなら、私とお母さんが家族になつてしまえばいい。

ただ、ただ……あのときの私はそう、無邪気に思っていたのです……。

専用機持ち4人による編隊飛行は、中々壮観な絵になる……地上

で眺めていた真耶がそう感じた瞬間、ある一人が急にバランスを失い、失速して墜落しかけた。イマイチ『飛ぶ』という感覚が沸かない一夏である。

それを見ていた地上の生徒達から悲鳴が上がりかけるが、それを両隣にいたセシリアと陽太が何とか抱えてフオローしたことでバランスを取り戻したようだ。

『大丈夫か？』

通信回線から珍しく千冬が心配そうな声を掛けてきたことで、一夏が慌てて声を上げる。

「だ、大丈夫！、今のはちよつと力み過ぎ。」

『怪我をさせると、報告書の枚数が激増するからな………今日は早く上がりたいところなだけに、無駄な仕事をせずに済んだ』

俺の心配じゃなかったのですね姉上？………涙を流しそうになる一夏に対して、更なる追い打ちを陽太がかける。

「お前つて、ほんとドン臭いな………この際、面倒だから、頭から地面に突っ込んだらどうだ？」

「なんで、面倒だからつて、一人隕石ゴッコせんといかんのだ！」

「墜落すると痛い↓痛いから墜落したくない↓だから墜落しないように体で飛び方を覚える」

「み、見事な三段論法………」

「見事なんですよ、それ？」

陽太の謎な理論に突っ込みを入れるセシリア。そんな三人のやり取りをシャルは後方から微笑ましそうに見つめていた。

「三人つて、仲がいいんだね！」

「えっ？」

「なんか、羨ましいいな……………ホラ、僕は転校したてで、まだ皆のこ
と全然わからないから……」

「デュノアさん……………」

シャルが少しだけ寂しそうな顔をしているのを見た三人は、どのよ
うな言葉を掛けたらいいのか、一瞬だけ巡考してしまう。
そんな中、真っ先に言葉を発したのは一夏であった。

「デュノア……………俺のことは一夏って呼んでくれよ！」

「えっ？」

「あ、自己紹介もしてなかったな！、俺の名は・」

「織斑一夏くん、だよな。もう、世界中で有名だよ」

「うえ！？」

「一夏さんは、ご自分の立場をご存知ありませんの？、世界で唯一
の男のIS操縦者と言われているんですのよ？、まあ、現在は三人
ですが……………」

セシリアの説明を受け、すでにそんなことになっているのかと他人
事のように聞いている一夏。そんな一夏に苦笑しながら、シャルも
改めて自己紹介をする。

「ボクの名前はシャルル・デュノア。シャルって呼んでくれていい
よ、一夏！」

「ああ！よろしくな、シャル！」

「（ムカツ！）」

「わたくしは、セシリア・オルコットですわ！、お見知りおきを、
デュノアさん」

「シャルと呼んでください。ボクもセシリアさんと呼ばせていただ

きますから」

「ええ！、こちらこそ、よろしくお願いいたしますわ、シャルさん」

三人が楽しそうに会話をしている中、一人それを見つめる陽太。その陽太の視線に気がついた一夏が振り返り、彼と視線がかち合う。

―優しさと寂しさと悲しさが同居したような眼―

「陽太？」

「……………なんだ？」

「いや……………その…あの…」

一瞬見てしまった陽太のその表情に戸惑い、何を話したらいいのかとしどろもどろになる一夏であったが、突然、彼らの背筋が凍りつく。

『……………私の授業中に暢気におしゃべりとは……………中々胆の据わった奴等だな』

通信回線越しに聞こえてきた千冬の声に凍り付く四人。怒っている……………閣下は本気でお怒りだ。とのコメントを一夏が無意識に呟いたのはご愛嬌である。

『聞こえているぞ、織斑。そこから急停止と急降下をやって見る。目標は地表から1mmだ』

「無理！絶対無理無理無理っ！！」

真剣相手にいきなり無防備で白刃取りを成功させる。リテイクはありません。なぜなら死にますから……………と言われてもできる人間はい

ないのと同様、初心者の一夏がそんな高等技術を成功させられるはずはないのは、この場にいる全員（本人含む）が理解していただけに、一夏の心のからの叫びに思わずうなずく。

『確かにな……私も少々厳しすぎた』

「わかってくれたのか！」

『目標を1・5mmに再設定する。以上だ』

「もう少し優しさがあつたっていいじゃないかー！ー！ー！」

直後、つべこべ言わずにやれっ！と言われて行った一夏が最後に見たのは、両手を広げてウエルカムと言ってくれた冷たい地面だったという……。

「まったく情けないぞ一夏。昨日私が教えてやったばかりだろうが」

軽く凹んでいるのに更なる追い討ちをかける幼馴染の篤さんを前に、一夏はもう一度地面にめり込みそうな勢いで膝まついてしまっていた。その後三人が続けて成功させたことで更にそれが追い討ちになっているのだ……流石に誰も1・5mmでは止まれなかったが。

「続けて、武装を展開させる。織斑、それぐらいは自在にできるよ
うになっただろう」

それぐらいは余計だよ！、と言い返してやりたいところだが、言うことができない自分はもうとっくに負け犬なのだろうな……今日

の自分とはことん自虐的だ、と思う一夏であつたが、いつまでも余計なことは考えられない。

「（物体を斬る、刃のイメージ。鋭く、堅固な物体。強い……武器）」

慣れない、イメージを具現化させるための精神集中を行い、右手に雪片式型を実体化させる一夏。だが、それを見ていた千冬は不満気に不合格を告げる。

「遅い。0・5秒で出せるようになれ」

褒めもしないで貶されてばかりで、無性に泣きたくなってくる一夏。

「セシリア。武装を展開しろ」

「はい」

左手を真横に突き出し、一瞬だけ爆発的な光を放ちながら、狙撃銃をその手に握るセシリア。銃にはすでにマガジンが装填されており、彼女が視線を送るだけでセフティーが外れた。その間の所要時間は僅かに一秒足らず。流石は代表候補生といったところである。

「流石は代表候補生だな」

「お褒めにいただき、恐悦至極です。織斑先生」

「ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて、誰を撃つ気だ？」

「こ、これはわたくしがイメージをまとめるため・」

「直せ。今すぐに」

「………はい」

代表候補生だろうと、おいそれと合格点を出さないのが織斑千冬の
厳しいところである。続けてシャルに武装を展開するよう指示する
千冬。

「続けて、デュノア。武装を展開しろ」
「了解しました」

返事と同時に、シャルの左手に五十五口径アサルトライフル『ヴェ
ント』、そして右手には六十一口径アサルトカノン『ガルド』が握
られていた。

この武装は、現在シャルが使っているIS『ダ・ガンX』の本来
の武装ではなく、以前使用していた『ラファール・リヴァイヴ』の
モノをそのまま流用しており、シャル自身もこの二挺のライフルは
好んで使用しているのだ。

「（展開速度が速い………代表クラスでもあそこまでのスピードは
限られている）」

「それって、リヴァイヴの武装ですよね、デュノア君？」

「はい！、まだ僕はこの新しいISに慣れていないもので………こ
のシールドと一緒に、以前使用していたISの武装をそのまま使わ
せてもらってます。それに、このIS、拡張領域バースロットがリヴァイヴの2
5倍ぐらいあって、まだ余ってるぐらいなんですよ」

「（小僧のファイバードは拡張領域がほとんどない関係上、後付武
装イサはバスター一挺に留めているが、どうやらデュノアのISは、大
容量拡張領域を持っているようだな）」

真耶とシャルの会話を聞きながら、注意深くダ・ガンXのポテン
シャルを探る陽太と千冬。製作者が東である以上、ただの高性能I
Sで終わる訳がなく、恐らく、他のISにはない特徴が秘められて
いるはずだと、二人は確信しているのだ。

「よし………武装展開の一応な実例も見せたな。では今日の授業はここまでとする。織斑、お前はグランドを整備しておけ」

「は、はい！」

「（俺（私）の出番はないのか！？）」

涙を流しながら、グランドを手直しし始める一夏を尻目に、今回、出番の与えられなかった陽太と篤は、なぜか悔しそうに拳を握り締めていたのは、誰にも気がつかれなかったという………合掌。

その後の授業も、つつがなく進行していった。

元々社交的であり、また、男子として編入するために、徹底的に紳士としての立ち振る舞いを叩き込んだきたシャルの人気は、女子の間でうなぎ登りであり、一夏達にしても、シャルの柔らかい接し方には一瞬で好印象を得ていた。

放課後を告げるチャイムがなり、シャルが一夏達と何かを話している、そんな中で、皆の輪から一歩引いた位置でその光景を見ていた陽太は、どこか遠い世界を見るように、シャルとその輪の人達のこと、無性にまぶしく見えてしまっていた。

「（相変わらず、誰とでもすぐに仲良くなれるんだな………昔と何にも変わってない）」

自分とは違って、彼女の美德は一切変わっていない。ならば、今、

自分が感じているこの疎外感と違和感は何なのだろうか？

「（シャルが変わっていないのなら……変わったのは……離れてしまったのは、俺の方か）」

「なあ、陽太！」

「……………」

微妙にアンニョイな気分をぶち壊された気がした陽太が、不機嫌そうに一夏を見つめると、なぜか圧倒されるように後ずさりしながら、一夏は陽太に放課後の練習を一緒にしようと誘ってきたのだ。

「ホオウ……、中々良いタイミングだな」

「ん？、どうかしたのか」

「俺もお前に八つ当たり……じゃなく、いじめ……じゃなく、合法的半殺し……じゃなく、鍛えてやろうと思っていたところなんだ」

「すごく良い笑顔で、お前はなんちゅう怖いこと考えてんだ!!」

今まで見た中で一番良い笑顔の陽太であったが、その理由があんなにすぎて素直に喜べない一夏。否、むしろ遠慮してほしい気はMAXである。必死になって自己の保身に走る一夏であったが、残念ながら陽太が襟首を掴んでいて逃げることにすらできないでいた。

一夏を引きずりながら、アリーナに向かう陽太の後姿を見ながら、シャルは隣にいた筈とセシリアに、二人の関係を聴いてみる。

「あの二人、仲がいいんだね」

「そうか？……私にはあまりそういう風には見えないが」

「そんなことないよ！、陽太は、ほとんどの人と一切関わり合いを持たずとはしないから、ああやって話ができるだけでも、仲がいい証拠なんだよ」

「シャルさん……、シャルさんはどちらで陽太さんとお知り合いになられたのですか？」

クラスの大半が疑問に思っていることを、セシリアが代表して聞いてみる。すると、シャルは寂しそうな表情を浮かべながら、静かに語ってくれた。

「僕らがまだ小さい時……7つか8つぐらいの時……あの時の陽太は……あんな風に中々笑えない環境だったから……」
「どういうことだ、それは？」

箒が更に突っ込んだ質問をぶつけてくると、シャルはそれを笑顔で遮断してしまう。

「ごめんね箒……あんまり陽太のこと、勝手に話すと叱られちゃうから……」

「あ、ああ……確かにそうだな。すまない」

「うっん。箒は気にしないでいいんだよ」

そして、シャルは先にアリーナに向かおうとしている陽太達の後を追いかけていく。その背中を、箒は後を引かれるような感情を抱えたまま、静かに追いかけるのであった。

「……っという訳でだ、一夏クン」

「どういう訳だよ？」

人気のない第二アリーナのグラウンドに、複数の鉄柱の柱を一直線

に立て、ISを装着した陽太は、同じようにISを装着した一夏達を連れ添い、ある訓練の実施していた。

一夏の他には、セシリア、シャル。そして、訓練機である「打鉄」を纏った箒とのほほんがその様子を注意深く見守る。

「これ使って……訓練？」

「そうだ」

一夏が、たった今自分が地面に刺した鉄柱を注意深く観察する。

「（これ使って……打ち込みか何かか？）」

「とりあえず、左右に蛇行しながら飛べ。出来うる限り全速でな」

割と普通にありそうな内容だった。陽太のことだから千冬顔負けのすごい要求をしてくるものだから構えていた一夏も、面食らった表情になる。

「なんだね？、まさか、何処かの鬼バ・」

「面白いことをしているな」

後ろから千冬の声が聞こえてきた瞬間、イグニションブースト並みのスピードで土下座する陽太。それを見ていたシャルは心のなかで「ちよっとカッコ悪い」と呟いたのは、彼女だけの秘密である。

「ビビるぐらいなら、最初から歯向かうな小童」

余裕綽々の笑みが似合う女、織斑千冬は腕を組み陽太を鼻で笑い飛ばしながら、一夏に対し言い放つ。

「何をしている織斑、早く訓練を始めろ」

「は、はい！」

返事もそこそこに、一夏は目の前の鉄棒を右に左へと左右にステップするような飛行を繰り返しながら駆け抜けていく。
最後の一本を潜り抜けた時、一夏は二人の方を振り返り、出来栄えの方を聞いてみた。

「これで……いいのか？」

「ああ。じゃあそこからもう一回、同じように戻って来い」

「私か小僧が良いというまで繰り返し返せ。解ったな」

「そ………そんだけ？」

「「そんだけだ！」」

見事にハモって返されると、文句も言い返せない。一夏は疑問を抑えるように、同じように左右にステップするように駆け抜ける。
一夏が最初のスタート地点まで戻ってくると、陽太はISを操作して、空中にディスプレイを表示する。

「これが初見のタイム。そしてこれが今のタイムだ。違いはわかるな？」

「え？、今のほうが早いんだろ」

「ああ。お前のこれからの目標は、この前のタイムよりもコンマ一秒でも早く飛べるようにすることだ」

陽太は一夏に簡単な操作だけを教えると、繰り返し飛ぶように指示を出す。解りやすい目標を教えられたからか、特に疑問に思うこともなく、一夏は再び訓練を開始するのであった。

その様子を見ていた篤は、陽太の指示に疑問を覚える。

「おい、陽太」

「ん？」

「なぜ一夏にあのような訓練をさせているのだ」

「なぜって……… 必要だからだ」

シンプルな回答に帰って困惑を覚える筈。無言で千冬のほうを見るが、彼女もその特訓には文句を挟むことはせず、ただ黙って一夏の様子を見守っている。

「一夏は、あの無人機を一撃で破壊できるほどの力があるんだぞ！」

「ISの性能に頼り切った力だな。しかもシステムは謎の停止中。フリーズ」

ならば今の一夏の実力など、ド素人そのものだろ」

その断言に筈はカツとなつて反論しようとするが、それを陽太は手を前に出して静止させ、更に言葉が続けた。

「今あいつに必要なのは思いっきり回り道することだ……… それが案外一番の近道になる」

「だが、しかし………」

「愛しの一夏クンの評価が低いのが、そんなに不満か？」

「なっ！」

顔を真っ赤にする筈を見た陽太は呆れる。冗談のつもりで言ってみたのだが、このリアクション……… 『コイツ、わかりやすい』と。

「とりあえず、今のアイツは『足りないものがある』んじゃないで、『何もかもが足りてない』んだよ。ゆえに下地を地道に作ってくしかないの。わかった？」

「う、うむ……… そうですねならば」

とりあえずは納得してくれたようなので、彼女にも指示を出すことにした。

指差す先には、打鉄を纏いながらボリボリとポテチを食らいながら一夏の姿を観戦する、のほほんの姿がある。

「10分以内に仕留めろ」

「なぜ？」

「えええっ！？……なんでいきなりそんなバイオレンスな展開に……」

いきなりの展開にのほほんは思わず振り返り詰め寄ってくるが、ここで陽太はデタラメな発言で箒の神経を逆撫でることに成功する。

「箒のこと『将来絶対垂れる』と言ってたぞ。具体的にどの部分かは言わないでおくが」

「……？」

「ウソつきっ！！」

すばやく訂正しようとするが、その台詞を聞いた箒は無言で刀を抜きジリジリとのほほんに近寄っていく……完全にヤル気だ。

「よーよーの鬼畜……！！！」

「………褒め言葉、ありがたく頂いていくよ」

そして二人は、そのまま追いかけてこをし始めるのであった。

余談だが、のほほんのIS操縦技術は、攻撃は近接も遠距離も良いとこ無しのヘッポコであるにも関わらず、なぜか回避について神懸っており、後にその動きを見たクラスメイト達からは『蝶のように舞い、ハエのように逃げ惑う』という印象を持たれるのはまた別の話である。

刀を振り回しながら鬼神の形相でコスプレ娘を追い掛け回す筈の姿を確認した陽太は、現在最も気になっている戦いに目を向ける。

両手にヴェントとガルムを携えたシャルが、後退しながら弾幕を張って距離を取る。実弾の嵐をシールドビットで防ぎながら、そこへすかさずセシリアの手に持たれているスターライトの狙撃が飛んできた。狙いはダ・ガンXのスラスター……これをシャルは体を捻るような動きで斜め下に回避し、銃を手放すと瞬時に武装を呼び出し、返す手で撃ち返した。

「……………今のは高速切替^{ラビットスイッチ}」

通常1〜2秒かかる量子構成を、ほとんど一瞬で行い、大容量拡張^{バススロ}領域^{ゾント}を使って事前に呼び出しを行わなくても戦闘状況にあわせて最適な武器を使用でき、弾薬の供給も高速で可能にする特殊技能である。

セシリアが候補生に選ばれた理由がBTの適正と射撃精度の高さならば、シャルが選ばれたのはこの器用さと高い戦闘視野であるというのであれば納得もできる……………一進一退の攻防を繰り返す、両者の戦いを観察した陽太はそう結論付ける。

セシリアのBTが高速で解き放たれ、真っ直ぐにシャルへと迫る。シャルはそれを上昇して回避しようとしたが、そこで自分のさらに上にシールドビットが飛来していたことに気がつく。

「（マズイ！、ハメられた！！）」
「ハロ！」

セシリアの叫びとともに、シールドビットからレーザーが放たれ、それをシャルが間一髪でシールドで防ぐ。だが、シャルは何とか直撃を防げたことに安堵する暇もなく、自分の周囲に浮遊するビットたちの存在に焦りを覚えていた。

「（二種類のビットを使つての全包围攻撃なんて、いつまでも避けられない！）」

セシリアがコントロールするBTは速い機動と複雑な動きをし、ハ口のコントロールするシールドビットは堅固さと数で攻め立ててくる。しかも、シールドビットはBTほどの動きのキレを持たない代わりに、それをオトリ（ブラインド）にして、BTが死角から攻撃を仕掛けてくるといふ、やっかい極まりない戦法を取ってくる。

そこへ更にセシリア本人からの高精度の狙撃である………今のシャルではとても太刀打ちできず、戦闘開始より15分後、善戦したもののセシリアの勝利という結果に終わるのであった。

勝負の後、二人は笑顔で内容の討議を始め、中々関係は良好そうである………その様子をアリーナの壁にもたれながら見ていた陽太に、千冬が声をかけてきた。

「流石、フランス候補生というだけのことはあるな………しかも起動したてのISを使つてあそこまでやれるなら十分に及第点じゃないか？」

「えらく優しいな………弟には厳しいくせに」

「正当な評価をしているだけだ。それにオルコットもビットの使い方が一段と様になってきている。アレはお前の直伝か？」

「………なにもしてねえーよ。全部自分で考えさせただけだ」

「教えずに悟らせる………もっとも優秀な教育手段だな」

何故か不機嫌そうに返す陽太に、千冬は思わず苦笑が漏れる。

「フツ……………コーチが優秀だと、生徒の伸びも早いということか…」
「つつか……………なんで俺がわざわざ他の奴等のことを面倒見んとい
かんのだ？」

「お前のためだ……………と言っても納得しないんだろうな」

「当たり前だ！！、そういうのはお前の仕事だろうが、この給料泥
ぼ。」

千冬の裏拳が陽太の鼻面を強打し、思わずその場にうずくまる陽太。

「誰が『お前』だ」

「グツ！、IS未装着のアンタなら、この場でぶっ飛ばせるんだぞ
！俺は！！」

「そうだな……………丸腰の相手をISを使って攻撃する卑怯者^{チキン}だった
な、お前は……………」

カッツツ……………チーン！！

陽太の心の琴線に触れたのは言うまでもない。勢いよく立ち上がる
と、猛然と千冬に詰め寄るその姿を、アリーナ中の人間が一斉に注
目する。

「上等だ……………上等だ、ゴルアアアッ！！、IS着けてこい
！！、光速で地獄へ送り届けたるわぁー！！」

「だがしかし、お前の相手をしている暇がなくなった……………これか
ら書類仕事があるので失礼する」

だがブチギレた陽太のことなどまったく気にする様子もなく、スタ
コラサツサとアリーナを去っていく千冬。その後を色々怒鳴りなが

ら文句を言いまくる陽太であつたが、結局最後まで相手にされず、アリーナの壁に八つ当たりして気を紛らわせるのであつた……。

アリーナの使用時間のギリギリまで訓練をしていた一行は、シャルを除いて寮への帰路についていた。

「結局最後まで、俺……………ジグザグダッシュしかしてなかったんだけど」

「クツ……………なんという逃げ足の速さなのだ」

ひたすらダッシュと追いかけてこをしていた一夏と箒の二人はげんなりとした様子になっている。そしてその前方では、頭から湯気が出そうなくらいに憤怒している陽太と、そんなことまったく気にせず、頭の上に乗っかっているのほほんと、セシリアがいた。

「あのドSが……………俺の実力に恐れを出して逃げ出しかつて……」
「ねえ、よーよー？」

「はよ降りろ、ロリ巨乳」

「よ、陽太さん！、女性に対してあまりに……………、その……………」
「よーよーは、織斑先生に勝てるの？」

何気なくのほほんがそのことを聞いてきたことに、セシリアは少しだけ戸惑う。

陽太の実力は知っているし、彼が口だけの人間ではないこともわかるが、まさか世界最強のＩＳ操縦者に勝てるほどなのは、わからない。

「勝ちます。楽勝で勝ってみせます！！、決め技は四の字固めで、タップさせちやる！」

「昭和プロレスかよ」

ウギヤーッと頭を振りながら喚く陽太にツツこむ一夏。だが、一夏も二人の戦いというものには興味がある。

「（そっぴや、クラス代表戦を決める時、千冬姉が言ってたな。自分に匹敵するって……………」

世界最強の女傑と未だ底が知れない天才操縦者……………この二人が戦えばどちらが強いのか？

いつか戦うことになる……………この時の一夏は、そんな予感を感じていたような気がした。

一方、その頃。

途中で分かれたシャルは、皆よりも先に寮に到着しており、真耶から寮の部屋へと案内を受け、すでに荷解きを半ばまで済ませ、相部屋のパートナーになる人間の到着を今か今かと待ちわびていた。

それは純粹な好奇心であり、僅かばかりの申し訳なさを秘めた感情

……なぜなら、これから彼女は三年間、相部屋の人間を騙さないといけないからである。

「……なんか、嫌だな……」

誰もいないからか、素直に胸の内が出た。本来はそんなことをせず、同姓同士仲良くしていきたいのに……

「仕方ないよね。これが僕の役目だし……」

自然と『僕』という言葉が出る。それだけ自分の役割に慣れてきている証拠なのかもしれない。それがまたシャルの気持ちを深く沈ませる。

「でも大丈夫……陽太がいてくれる」

だけど……だけど、自分は一人ではない。

自分の嘘に付き合ってくれる。無言の信頼を寄せてくれる。そんな大事な人が傍にいてくれるのだ。だったら大丈夫……自分は役割をこなしていける。

「お母さん……お母さん……僕ね……これから嘔吐きとして生きていくんだ。ハハッ……最低だ」

自分の嘘に陽太を付き合わせることに、一層の罪悪感が募ることに、彼女が押しつぶされそうになったとき、ふと自分の姿が鏡に移った。

「……ドロがついてる」

見れば頬に僅かなドロの跡があった。アリーナの練習後、呼び出し

を受けてシャワーも浴びず来てしまったためである。

流石に初日からドロだらけで対面というのも相手に失礼であろう……そう思ったシャルは、着替えを手に持ち、すぐさまシャワーを浴びるために洗面室に入るのであった。

この時、シャルは自分の不注意に気がついていなかった。

相部屋の住人が誰なのか真耶が伝えていなかったこと、自分がそのことを聞かなかったこと、そしてシャワー中は自分を隠すものなどないということに……。

陽太が部屋の前まで来た時、ドアノブに伸びた手が止まる。

「（中に誰がいる）」

鋭敏な陽太の感覚が、中の気配を注意深く押してくる。

「（一人……束の奴か？）」

ならば遠慮はいらん。山ほどある言いたいこと共に拳骨の嵐をお見舞いしてやる。仮に違っても構わない。人の部屋に『無断侵入』してくる奴には心当たりが腐るほどあるが、そのどれもが善人の付き合いではなく、死んでも心が痛む連中でもない。

陽太は、服の中に隠してあるグロック17を取り出し、音を立てないように静かにドアを開いた。

やはり鍵が開いており、いつも誰にも気づかれないうように挟んでいる防犯用の髪の毛も落ちてこない。恐らく束ではないと確信する陽

太。

「（あの女は人の部屋の風通りを良くするためにわざわざ窓を破壊してくるからな。ありがたいことだ……………クソアマ）」

悪態もそこそこに、無音でゆっくりと部屋の中を歩いていく……………侵入者はただ今……………

「（風呂場か……………）」

シャワーの音がしている。勘と気配でそれを確定させた陽太は、洗面室のドアをゆっくりと開いた。

この時、陽太は自分の不注意に気がついていなかった。

なぜわざわざ侵入者が逃げ場のない風呂場にいるのかということにそれになぜ自分が気がつかなかったかということに。そして昼間に真耶が『今日から相部屋ですよ！わかりましたか火鳥くん！！？』と言っていたことを忘れていることに……………。

完全に気配を絶っている陽太は、素早く風呂場にいる侵入者を打破するために、風呂場のドアの横に陣取り、心の中で三つ数える。

「（ひとつ、ふたつ……………）」

ドアノブに手をやり、一気に開いた陽太は最後の三つ目を読み上げた。

「みい……………っ……………」

「ふえ？」

この日のことを、陽太は後にこう語ったという。

「おやまがふたつ、ありました」

シャルル・デュノア？（後書き）

ドアを開けたら裸の美少女がいました。いや〜ん、エッチ。

•
•
•
○

•
•
•
•
○

•
•
•
•
•
○

•
•
•
•
•
•
○

•
•
•
•
•
•
•
○

会ってみてえーよ！！、そんなシュチエーションに！！！！WWW

シャルル・デュノア？（前書き）

ようやく、週一更新のペースが取り戻せてきたぜ。

というわけで、第三弾……今回は、戦闘はまったくありません。
ではお楽しみください。

シャルル・デュノア？

銃を構えて固まった陽太は、同じように驚愕の表情をして固まるシヤルロットを凝視する。

シャワーから流れる温かなお湯が彼女の肢体を濡らしており、日に焼けたことがないのではないかと疑いたくなるほど白い肌が、今はお湯に濡れたためか僅かばかり赤みを帯び、なだらかな体のラインは、そのバランスが計算しつくされているかのように整っていた。金色の背中まで届く髪が隠しているが、ゆつくりと上下する胸は、それなりの大きさと形の良さを作り出している。腰からのラインも妙に生々しく、男であれば一にも二にも興味を注がれることは間違いないであろう。

そんなことを銃を構えながらぼんやりと考えるほど、陽太はテンパっていた。そりゃ、もう、フォローできないぐらいにテンパリながら、彼は一言呟く。

「……………ごゆつくり……………」

何をどうゆつくりしろと言うのか自分でも理解していないのだろうが、とりあえずそれだけ言った陽太はドアをゆつくりと閉め、固まった状態で後退していき、自分のベッドの上にとりあえず座ってみた、正座して。

「……………）」

シャルの裸、シャルの裸、シャルの裸、シャルの裸、シャルの裸、シャルの裸……。

「ぐうおおおー!!」

頭を抱えながら枕に踞り、腹の底で絶叫する陽太。

「（落ち着け！、落ち着け火鳥陽太！！、感情に任せて行動すれば、手痛いツケを支払われるぞ！）」

冷静さを保つために、彼は目を閉じて別のことを考え始める。

「（全く関係のないことを考えるんだあ！……よし、今日の晩御飯はオムライスと・）」

―陽太、ご飯にする？、お風呂にする？……それとも―

『裸エプロンのシャルが脳内に出現した!!』

「きいいえええー!!」

ガンガンと何度も額を壁に打ち付ける陽太。

「（ご飯禁止!!……一夏達の育成メニューを考えるんだ!!……明日は一夏は今日と同じメニューで、箸とシャルは）」

―コーチ、ぼ、僕にだけ、特別メニューを二人つきりでしてください――

『ちよつと着崩れた女子の制服を着たシャルが脳内に出現した！』

「違っんだあああー！！！！」

更に激しく額を壁に打ち付ける陽太。ちよつと壁に亀裂が走った。

「（訓練メニューも禁止！！！！……だ、第一、なんで俺の部屋にシャルがシャワー浴びてんだよ！、おかしいよ！、女なのに）」

――陽太……僕を、陽太のものにして。お願い……―

『真っ白シートに包まれた、生まれたてのままのシャルが脳内に出現した！』

「ギャルゲー禁止！！！」

更に更に激しく額を壁に打ち付ける陽太。若干出血も見られる。事情を知らない人間が見れば、正直かなりアレな光景であるが、その時、ガチャツというドアが開く音が背後からして、かなり動揺した表情のまま振り返る陽太。

ジャージ姿で乾ききっていない髪を下ろしたシャルは、頬を若干赤らめながら浴室から出てきたのだった。

「
……………」

超気まずい。

何を言えばいいのか皆目検討も付かない陽太は、冷や汗を滝のように流し、目を高速で左右に泳がしながら、なんと謝ればいいのか思

案する……結局『ごめんなさい』以外出てこないけれど。

「（ココはごめんなさいでいいのか！？、それだけで良いものなのか！？、こういうとき、束が相手だと絶対にケリ飛ばす場面なのに！！）」

「……………あの……」

「ひゃいつ！」

声が裏返った。いつもの陽太では絶対に見れない姿である。

だが、その様子がなんだかとてもおかしくなってきたシャルは、まだ赤くなつてはいるが、だいぶ落ち着きを取り戻し、コホン、と一度咳払いをすると、陽太に説教を始める。

「あのね、陽太」

「へ、へい」

「僕も勝手にシャワーを浴びていたのはボクの不注意だったし、部屋の鍵を開けていたのも無用心だけど……」

「……………」

「女の子の裸を見ておいて、『ごゆつくり』はないと思うんだよ？」

「ほ、ほんにその通りでございやすー！」

土下座して頭を下げる陽太……………重ね重ね言うが、普段の彼からは絶対に想像できない……………いや、千冬相手だとわからないけど。

「反省してる？」

「反省してます。マリアナ海溝よりも深く」

「……………ねえ、陽太？」

「ん？」

シャルの声のトーンが変わったのが気になって、頭を上げた陽太が目撃したのは、顔を真っ赤にしながら指をモジモジとさせるシャルであった。

「……………見たいの？」

「????? ……何がです？」

「その……………ボ、ボクの……………」

「……………シャル？」

「ボクの……………裸？」

ポフッ！と吹き出す陽太。まったく想像もしていなかった言葉に先ほどよりも動揺してしまい、思わず言わなくてもいいことを口走ってしまう。

「だ、大丈夫！、シャルの倍はある胸の持ち主にしゅっちゅう抱き着かれてたし！」

「……………」

「それにさ！、オレは紳士を心掛けてるから、妹のような存在であるシャルに発情するなどという可能性は無いに等し・」

「……………」

その時になって、先ほどまでの甘ずっぱいはずの空気がいつのまにか掻き消え、代わりに身も凍るような冷たいプレッシャーが部屋全体を覆っていることに気がつき、すぐさまシャルを見直す。

笑顔である。それはとてもすばらしい笑顔である。だが……。

『な〜んだ、気のせいかな』と軽く流そうとしたが、視線が僅かに動き、顔の隣に振り上げられたシャルの拳に注目する。

「シャル…………それは何？」

「ん？、乙女の怒りかな」

直後、全体が震えるほどの激震が寮に襲い掛かり、その衝撃の大きさに住人達が何事かと騒ぎ始める。当然、隣の部屋にいた一夏と箒は何事かと飛び出し、急いで隣の部屋のドアをノックする。

「おい！、陽太！！、何があったんだ！！」

「返事をしろ、陽太！！」

「……………あ、一夏に箒？」

だが聞こえてきた返事は陽太のものではなく、シャルのものであった。不審に思いドアを開けようとするが、彼らが開けるよりも先に、元の三つ編みの髪型に戻したシャルが出てくる。

「シャル？、なんでお前がこの部屋に……………」

「あ、隣は一夏と箒だったんだ……………じゃあ、改めまして。今日からお隣さんになることになりましたシャルルです」

今まで陽太一人で使っていた部屋に、シャルが入ったのか。と納得する一夏であったが、箒はそれよりも重大なことを思い出す。

「シャル。先ほど何か途轍もない轟音が聞こえてきたんだが……………」

「ああ、アレ？」

その時シャルが見せた笑顔は、とても爽やかな笑顔であった。爽やかな笑顔であった……………大事なことなので二回言ってみたが、だが、なぜか爽やかな笑顔のはずなのに、背後からドス黒い何かが湧き出ているのが気になる一夏と箒。

「アレは、陽太が滑って顔を壁にぶつけたただだよ。ねえ！、陽太？」

「あ、ああ……………驚かしてすまない。大丈夫だ……………」

部屋の奥から陽太の声が聞こえてきた。若干声が掠れているようだが……………。

「騒がしてゴメン。まだボク、部屋の片付けが残っているから……………」

「あ、ああ。忙しいところすまねえーな」

何故か湧き出る威圧感に圧倒され、それ以上のツツコミが出来ない一夏は、そのままドアを閉めて部屋の前で立ち尽くしてしまう。

「……………結局なんだったんだ、アレ？」

「……………わからん。分からんが……………」

今のシャルには、何か妙な違和感があつたような？

頭の中で何かが引っかかる筈は、部屋に戻る一夏の背中を追いながら、考え込むのであった。

「陽太……………」

「な、なんでございましょう……………」

二人が部屋に戻ったことをドア越しの気配で確認したシャルは、満面の笑みで陽太のほうに戻ってくる。みれば、陽太は鼻頭を抑えながら、ベッドに蹲っていた……………指の間から鼻血を出しながら。

「うん。ちょっとキツ目にしちゃったこと、ゴメンね。」

「ちよつとどころじゃねえー！」と抗議しようとしたが辞めた。目が笑つてない……アレは本気で怒つた時の千冬に通じる何かだ……己の本能が告げるその言葉に素直に従つた陽太は、机の上においてあるティッシュを無言で鼻に詰め始める。

「……なんかに、こうやってるのっておかしいよね!」

二人の間に流れる沈黙に、先に耐え切れなくなったのはシャルの方であつた。

「ホントはね、陽太……さっきまで、すごく罪悪感を覚えてたんだ」

「今日から一緒に三年間過ごす人を騙さないといけないんだって……ボクは最低だって」

「でもね……陽太がルームメイトなのが、すっごく嬉しいんだ。」

これで騙さないでいいって」

「……………」

「だからね……………だからね……………ヨウタ……………」

肩が震える。言葉が繋がらない。目の前で何も話さない陽太が、今、自分を気遣っていることがシャルにはわかっただけに……………理由を何一つ聞かずに、自分の嘘に付き合うと言ってくれたことが嬉しくて、嬉しくて……………。

それが耐えられない。

「陽太！、やっぱりいいよー!!」

「……………」

「陽太がボクの嘘に付き合う必要なんて、何処にも無いじゃない！

！、ボク……………今から織斑先生に事情を……………」

「……………なに言ってるんだ？」

そこで陽太がはじめて口を開く。

「まだ初めて一日と立ってねえーじゃねーか。今から、そんなんじや先が思いやられるぞ」

「陽太！」

「大丈夫、大丈夫……………何とかなるなる」

陽太がベッドに大の字に寝転びながら、右手をヒラヒラと揺らす。その「まったく気にしていない」という様子が、かえって自分に気を使ってくれているとシャルは思い込み、目に涙を溜めながら陽太に詰め寄った。

「陽太！、ボクの話……………」

「オレはやりたいことしか、しねーんだ」

「……………」

「したいことをする、出来ることをする、やれることをする……………」
昔ッからそうしてきた」

「陽太……………」

「本気で嫌なら、オレは付き合ったりせん。シャルのその嘘とやらに付き合うと言ってるのは、オレが出来ることだから、やりたいからするんだ……………」他の何者でもない、オレがそう決めたんだ」

決断を下したのは自分なのだ。本気で嫌ならさっさと性別を誤魔化していることを誰かに告げることぐらい、陽太なら簡単にしただろう。

「そもそも性別誤魔化さんといかんぐらいに、なんか込み入った事情があつて転入してきたんだろ？」

「う、うん」

「だったら聞かない。聞いたって話せないことだろうし……………」
そいつはアンフェアだ」

なんだか、だんだんシャルは陽太の言っていることが理解できなくなってきた。

嘘に付き合う。

その理由も聞かない。

理由を聞いたらアンフェアだ。

アンフェアなのは自分のほうではないか。一方的に陽太が自分に合わせてきてくれるだけで、何か起こっても、全部陽太の責任になるのではないのか？

「陽太！、だったら事情だけでも説明させて！！」

「なんで…………？」

「これじゃあ、一方的にボクが陽太に甘えてるだけだよ」

「別に構いやせん」

「話させて！」

最後は涙目で陽太を見つめてくるシャル。

そこまでされて、黙っている！とも言えない陽太は、渋々シャルに事情を説明させる。

「なんで、性別を誤魔化して転入してきたんですか、シャルル君？」
「……！」

これも何かおかしい気がするが、とりあえず陽太が話をするのを許可したことによって彼女は事情を話し始める。

「ボクに男のフリをするよう、実家から命令されたんだ」

「実家？、デユノアからか」

「うん……………」

話し始めた途端、シャルの表情が曇り出す。

「二年前に父に引き取られた時に、検査して……………そこでISの適正が見られてね。色々あってテストパイロットしてたんだ」

「……………」

「父と会話したのは二回ぐらい……………それも大したことを話してないんだ。義理の母……………あ、父の今の奥さんには……………」

「毛嫌い……………された？」

陽太がなんとなく察してくれたので、若干気分が和らぎ、苦い笑み

がこぼれ出る。

「『泥棒猫の娘』って殴られちゃった。母さんもちょっとは教えてくれてたらよかったのに……………」

「シャル……………」

「それで少ししてから、デュノア社は経営危機に陥って……………」

「例の『欧州連合の統合防衛計画』^{イクニションプラン}の煽りか……………」

「よく知ってたね……………」

「業界じゃ有名だぞ。このままじゃデュノアは、第三次トライアルで見向きもされずに、援助を打ち切られて、社員一同漏れなく路頭に迷わされるって……………」

陽太の意外な情報通に驚くシャル。だが、陽太が気になっているのはそこではない。今の話が本当なら、現状明らかに矛盾していることがある。

「だが、なんでシャルがこの学園にくる必要があるか、だ……………もうデュノアは『ダ・ガーンX（準第四世代）』を手に入れた。一歩で遅れてたくせに、一足飛びでトライアルの最有力馬に名乗り上げたじゃないか」

「うん……………表向きは実戦データの収集だけ……………」

それなら性別を偽る必要が無い、堂々女子として過ごせばいい。その方が面倒なことにならずにすむ……………だが、シャルは『命令』されたと言った。これは明らかに違法を犯しても手に入れたい何かがあるということだ。

「……………」

「言いづらいなら言わなくていいんだ。元々、そんなに聞きたい話でもないしな……………ただ、ここからは俺の独り言だ」

「え？」

「デュノアは知ってるんだな……………白式が『完成された第四世代』だっということが」

「！！？」

シャルの顔色が一気に青ざめる。やはりか……………と、陽太は溜息を一回つくと、シャルの方を見直して改めて口を開いた。

「公式では世界初の男子のIS操縦者で、しかも使用しているのが篠ノ之束が作った『第四世代』。欲しくなるのは当たり前か……………」
「……………そう。ボクが命じられたのはダ・ガーンの実戦データの収集だけじゃない。一夏と白式のデータ収集もなんだ」

「……………ハア……………」

ここまで予測通りだと、かえって疲れると陽太は心の中で漏らす。そして、この一見の大体の構図も見えてきた。

そもそも、ダ・ガーンも白式も製作者は束なのだから、操縦者とISのデータなら束から貰えばいいだけの話だ。では何故デュノアはそれをせずに、ここまで回りくどいことをしたのか。

「（作るだけ作って、放ってどっかに雲隠れしたな……………何がしたいんだ、あのクソアマアアああああー……………！）」

相変わらず行動が意味不明すぎる……………自身のラボを使わず、デュノアの開発室を使うなどは……………

「（デュノアが倒産するのを未然に防ぐためにか？、なんで？……………まさかボランティアで？……………あの女ほど社会奉仕などという概念から遠い女もいまい）」

解らない。天才であるがゆえに誰よりも自由奔放な立ち振る舞いをする束に、一番振り回されている陽太ですら、未だに何を考えているのか理解に苦しむ。

だが、急に黙り込んだ陽太のことが心配になったシャルは、陽太が『自分の境遇に怒りを感じている』と勘違いしてしまう。

「ゴメンね……………陽太」

「あ？、あ、ああ……………いや、別にシャルが気にすることじゃないぞ」

「気にするよ！……………陽太には全然関係の無いことなのに、僕はそれに巻き込んで……………」

「シャル……………それは違う」

シャルの言葉を遮るように、陽太のひとさし指がシャルのおでこに優しく触れた。

その感触に一瞬ドキリツとするシャル。

「俺が勝手に首を突っ込んだだけだ……………イヤ、今回は突っ込まざるえないというか、そうじゃないというか……………」

「??????」

「とにかくだ！！、シャルが気にすることじゃない」

説明を求められると、何と答えたらいいのか困るため、話をぶった切るために、彼は何食わぬ顔で聞いてみる。

「そっぴやさ……………さっきから気になっていたんだけど」

「ん、何？」

「親父さんに引き取られたということは……………お袋さんはどうした

んだ」

その言葉を聴いた瞬間、シャルの心臓が一瞬だけ止まった気がした……。

「お母さんは……………」

「シャル？」

その只ならぬシャルの気配に、陽太は後になってから自分の失敗を自覚する。

「……………死んだんだ……………二年前」

「……………！！！！？」

シャルの顔は笑顔だった。それは綺麗な笑顔をして……………目から光が消え、人形のように感情が失われた笑顔（作り笑い）をしながら、その事実を陽太に伝えた。

「……………陽太のこと……………最後まで気にしてたんだよ」

「……………ウソ……………だろ」

「……………ホント……………」

いつそのこと熱が失われた顔で告げられたその言葉に、陽太は思わず声を張り上げ、シャルの腕を力強く握ってしまう。

「ウソだ！！」

「……………陽太……………」

「あ……………」

跡になるほど強く握り締めていたことに気がつき、手を離す陽太。

「すまない……………」

「いいよ……………これぐらい……………」

シャルがさすりながら、そう言ってくれたが、だが、陽太は気がついていていた。シャルの肩が小刻みに震えていることに……………。

「ありがとうね……………陽太」

「……………すまない、シャル」

「なんで謝るんの？、ボクは嬉しいだよ……………こんなにもお母さんのことを想ってくれる人が、僕以外にいてくれることに……………」

「そついう……………ことじゃない」

無遠慮に不躰に、シャルの心の中を抉ってしまった。一番触れて欲しくなかったことだろうに……………そのことが、陽太の心の中に、尚更強く後悔を刻み付ける。

「……………病気か？」

「……………うん……………気がついたときには、もう手遅れだった」

「なんで……………あんなに元気だったのに……………」

「……………ボクのせいだ……………」

シャルが吐き出した気持ちに、陽太は違うと叫ぼうとするが……………。

「ボクのことを育てるために……………いっぱい……………いっぱいムリしてたんだ！、なのに、ボクは全然気が付かなかった！！、お母さんのそばに誰よりもいたのに！！、お母さんに誰よりも守ってもらってたのに！！！！」

「違う……………シャル、それは……………」

「違うないさ！！、ボクはさっさとお父さんに引き取られるべきだ

ったんだ！！、お母さんを早く自由にしておけるべきだったんだ！！、それなのに……………ボクに少しでもいい学校行かせたいって、朝昼晩問わずに働いて！！」

いつの間にか嗚咽も混じり始める。

「病気のことだって！！、ボクのことなんて構わずに入院すれば助かったかもしれないのに……………ギリギリまで無理して！！、薬もロクに貰わないで……………食費も削って、自分の洋服代も、遊ぶお金も、全部ボクのために貯金して……………」

「やめろ……………」

「ボクの誕生日を毎年祝ってたくせに、自分の誕生日は仕事でいつもいなかった。僕にお小遣い渡したいって……………その次の日から、三日間『ダイエツトするから食事はシャルだけで』なんて言っ……………自分のご飯を無くしてまで、ボクはお小遣いなんて欲しくなかったのに！！」

「やめろ、シャル！！」

「お父さんからの援助金にも一切手をつけずに、ボクの名義にしてたよ！！……………そうだよ。何もかも、ボクなんかのために捧げて！！、ボクなんてさっさと見捨ててしまえば、もっと楽に生きたのに！！……………最後の最後までボクのためにつ……………！！、ボクなんかのため……………」

陽太は有無も言わずにシャルを抱きしめる……………これ以上、自分を傷つけるのを辞めさせねばならない。

「……………やめろ……………もういい。シャルは悪くない……………お袋さんだって……………」

「陽太……………陽太……………」

陽太は知っている……それだけは確信して言える。

「お袋さんは言ってたよ……『理由なんて無い。シャルロットは私の娘だから……だから私はこの娘のために出来ることの全てを捧げたい』って……」

「お母さん……」

「すごいな、シャルのお袋さん……自分の言葉に最後までウソを突かずに遣り通したんだ。尊敬するよ……」

「お母さん……う……あ……ええ……う……あぐ……う……」

その言葉でもう我慢できなくなったシャルは、陽太の胸に顔を埋めて喉から声が漏れることも押し殺さずに泣いていた。

泣いて、泣いて……陽太は、その姿を見ながら、昔のあることを思い出す。

シャルの手に引かれて、やってきた彼女の家……そして、そこで待っていたのは。

「良く来たわね！、待ってたわよー！」

少女をそのまま大人にしたような容姿。美しい金色の長髪と、藍色のワンピースの上に白いエプロンをしただけという、いたってシンブルな主婦の姿で、シャルの母親・エルーは、幼い陽太を注意深く観察する。

当時の陽太は、大人といえば自分を殴るものだと思い込んでいたため、一目散に逃げ出そうとしていたが、それも少女と母親の両方の手で押さえつけられており、脱出は不可能であった。

「うん！、眼はまだ綺麗ね。卑屈になってたらどうしようかと思ってたわ！」

だが、少女の母親が下した言葉は、少年には理解できないことだった……眼が綺麗？、卑屈？

「よし！、シャル！、まずはお風呂！、次に散髪よ！！」
「は~~~~い！！」

シャルが嬉しそうに手をあげるが、現状の飲み込みが未だに出来ない陽太にしてみれば、これから何をされるのかと、戦々恐々として半泣きになってしまう。

だが、それを見たエルーは、怒った表情で、陽太と同じぐらいの視線まで下げると、強い意志を込めた眼差しで陽太を見つめる。

「逃げない！、自分の人生は自分でどうにかしないと、結局は不幸になっちゃうのよ！！………だけど、今日は大丈夫。おばさんが一から貴方を鍛えなおしてあげるから……」

「い、いいです……ボクは……」

「遠慮禁止！、始めるわよシャル！！」

「は~~~~い！！」

言うや否や、家の中に引つ張り込まれる陽太……………そして彼は生まれて初めて…

「よし！、服を脱ぐ！！」

「ええ！？」

「出来ないの！？……………シャル！！、お母さんと一緒に服を脱がせるわよ！！」

「は……………い！！」

生まれて初めて『女性の前で全裸にされる』という屈辱を味わうのであった。

シャルル・デュノア？（後書き）

というわけで、シャルのお母さん登場です。

私の中では、シャルのお母さんは『肝っ玉母さん』です……人生の不幸云々など蹴り飛ばす勢いのバイタリテイでなんとかしてしまうイメージの方を想像してます。

おふくろさんの名前って、公式でもないよな……誰か知ってるなら、教えてください。

不安（前書き）

フッ！

週一更新とかのたもつても、この様ですよー！！w w

・・・自分の亀っぷりにはホトホト嫌気がさすなあ……では、本編をどうぞ。

不安

あれから数十分後……泣き疲れ、目元を赤く腫らしたまま眠りに
ついたシャルをベッドに寝かせた陽太は、彼女の寝顔をずっと見続
けていた。

「……………」

彼女の身に起こった事。置かれた立場。そしてたった一人の母親を
失った……悲しみ。

「（気を張っていたのか……それとも、流さずにずっと我慢して
いたものが今……エルーさん）」

自分の記憶にあるシャルの母親は、親も保護者も友達すらもいなか
った自分を、蔑む事も哀れむこともせず、親愛を持って接してく
れた。悪いことすれば怒り、良いことをした褒める。迷えば、諭す
わけでもなく、ただ黙って答えを見つけるのを待ってくれる。ただ
それだけ……。

千冬のような圧倒的な武力も、束のような常軌を逸した知力があつ
たわけではない。

だが、彼女は本当に何が大切かということを知っていたように今な
ら思える。だからこそ微笑んでいたのだろう……。

「（出来ること……俺が、俺として……シャルにしてやれること……）」

彼は自分自身に問いかけながら……静かに眠るシャルを残し、音を立てずに部屋を後にするのであった。

「箒……、飯食いにいくぞ！」

「ああ……ちょっと待ってくれ！」

シャワーから出てきてまだ半乾きの髪の毛であったが、空腹に耐えられない一夏は慌ててついてくる箒よりも先に部屋を出た。

「昨日はカツ丼だったから……今日はBセットでも……アレ？、陽太！」

だがちょうどその時、偶然同じタイミングで出てきた陽太に声をかける。返事をしなかったが、振り返り一夏の方を振り向く陽太。

「お前もこれから晩飯か？」

「………そうか、もうそんな時間か……」

「……？」

考え事をしていますっかり時間のことを忘れていた陽太は、今更ながらに晩御飯のことに気がついた。

「（シャルは……寝かせておくか）」

いったん部屋に戻って起こそうかとも思ったが、あの痛々しい姿が脳裏をよぎり、陽太の足を止めてしまう。

後で何か食べるものを部屋に持っていこうかと考えていると、一夏がシャルの事を聞いてくる。

「そっぴや、シャルは？」

「部屋で寝てる……………疲れてんだろ。『色々』あったみたいだし……………」

その時、一夏は気がついた。陽太の瞳が、今まで誰にも見せたことのない優しさと悲しさの両方を宿していることに。そのことが妙に引かかった一夏が理由を問いただそうとするが、それよりも早くいつもの仏頂面になった陽太は、さっさと歩き出してしまう。

「おい！、待てよ陽太！！」

「断る。何度も言わすな……………俺はお前らと仲良しこよしになる気は、ない」

振り返りざまに、強い意志で拒絶の言葉を言う陽太の姿にたじろぐ一夏。だが、筈はそんな二人の様子に一計を案じて、あることを提案してくる。

「陽太……………私としても、色々お前のことを聞いておきたいんだ」

「それも断る」

「……………一夏が今日は奢ってくれるそうだ」

「……？」

俺言ってない！、と無言で抗議する一夏であったが、次に陽太を見たとき、彼はいつもの仏頂面で……

「……………」一緒にさせていただこう」

「お前！！、意外に庶民派なんだなっ！？」

『現実派に訂正しろ』と言ってくるその姿を見ながら、自身の思わぬ出費に人知れず涙する一夏であった。

一夏がカツ丼、箸は天ぷらそば、陽太がカルボナーラという取り合わせでテーブルを囲いながら、無言の夕食が開かれていた。

陽太は食事中、誰かと話すということを自分から積極的には行わない。いや、普段の行動からして積極的に誰かと共にするということをしないのだ。だが最近では、千冬に頼まれたのか、無理やりに一夏たちのコーチの真似事をしており、嫌々そんな表情とはいえ、コミュニケーションを取るようになり始めていた。

つまるところ、とっつきづらいが悪い奴ではない……………カツ丼をかつ喰らいながら、一夏はぼんやりとそう考えていた……………そんな時、空気を読んでくれたのか、読み間違えたのか、箸が思わぬ質問を陽太にする。

「陽太……………」お前、シャルとは幼馴染だそうだな？」

「……………」そんなもんじゃない。ガキの頃に、ちよつと色々あっただけだ」

「色々？」

「色々だよ……………」

それっきり、また沈黙してしまいが、今度は一夏が陽太に質問し始めた。

「ガキの頃ってさ……シャルルって、フランス人だろ？」

「そうだな……」

「じゃあ、陽太もフランス生まれなのか？」

「……かもな」

一瞬だけフォークを止めたが、僅かな沈黙の後、いつも通りのロ―テンションで答える陽太。その様子がどこか違和感があったのか、一夏は更に言葉を続ける。

「かもなって……」

「気がついたらフランスにいたから、フランスで生まれたのか、日本か、どこか別の国で生まれてからフランスに来たのか、ようわからんってことだ」

「親に聞いたことないのか？」

「……親はいない」

その言葉に絶句する二人……その二人に対して、陽太は特に抑揚もない声で平然と話し出す。

「捨て子だったらしい……まあ、それも本当なのかどうかは知らないけど。唯一持ってたカバンに名前がかかれてたから、名前だけは判明してる」

「……おい、じゃあ……今までどこで……」

「6歳ぐらいまでは孤児院にいたが、出てった」

「出てったって……6歳の子供がか！？」

「ああ。よくある話だ……肌の色が違う、違う国の人間。そういう『異物』に対して排他的な扱いがあってな……気に入らんから自分から出てってやった」

孤児院でいじめにあった……ひょっとしたら、そんな生易しい扱

いですらなかったのかもしれない。

「それから1年ちよつとぐらいは、結構ヤバかったな。どこ行っても日本人は気に入られんし、当時はISの登場によつて急激に社会情勢が悪化してたから、治安も悪いし、殺されかけたことも何回もあった。主食は生ゴミだったし、生でネズミ食つて、バケツをひっくり返したぐらいの血便が出たときは死ぬかと思った……………失礼、食事中だったな」

陽太が何気なく謝るが、今の二人にはそれを気にするどころではない……………平和な日本では考えられないぐらいの扱いを陽太は子供の頃に受けていたという事実言葉に言葉を失う一夏と篤。

「そんな時だ……………シャルとシャルのお袋さんに助けられた」

「シャルルの……………お袋さん？」

「ああ、優しくて気さくな人で……………特別じゃなくても……………何よりも正しい事をしてくれる人だ」

陽太の目が、懐かしさに滲む……………それは一夏と篤が初めて見る『素の』陽太の姿だった。すぐさま元に戻ってしまったが。

「それからまた色々あつて……………また死に掛けたときに、束に会ったんだ」

「姉さんと……………」

「その時の話は割愛するぞ。思い出ただけで束の面を百発ほど殴りたくなる」

何があつたのだろう？

聞いてみたいが、陽太が思い出しながら『クロス。束八三回ホド』と、結構怖い表情になっているのを見た篤は結局聞けずじまいであ

った。

だがその時、隣にいた一夏の表情が歪んでいた…………おもに怒りからくるものによって。

「なんでお前がそんなに怒ってんだ？」

そんな一夏に陽太がツッコむ。一夏自身もなぜそれほどの怒りに震えているのか理解できなかったが、それでも我慢できずに表情にでてしまった。

「わかんねえーよ！……………」

「よくある話だろ」

だが、陽太は自身の体験を『よくある話』の一言で切って捨てる。それはすでに、自身の過去と決着がついている人間の言葉なのか？それとも何かを諦めてしまった者の言葉なのか…………その言葉が一夏には妙に腹立たしく聞こえてしまう。

「よくある話って！」

「全人類を見渡せ。探せば俺より悲惨な目に合ってる奴なんざ腐るほどいる。そして俺はそんな奴らと比べて自分のことを『不幸だ！』とか『幸せだ！』とか言う気はない」

「誰もそんなこと言ってねえーだろうが！」

「じゃあ、なんでお前は怒ってんだ？」

「それは……………」

「俺の境遇の何に怒りを感じたのか知らんけど、これだけは言っておく……………」

跳ね除ける言葉なのかもしれない。自身に言い聞かせる言葉なのか

も知れない。だからこそ、その眼に宿っている、陽太の根源ともいえる強い『意志』の存在が、一夏に何かを訴えてくる。

「世界のことなんざ知ったことか……俺は俺の意志で、^{いま}現在を生きてんだ。俺は誰にも縛られん、世界中の誰よりも自由に生きて、自由を抱いたままくたばる」

何物にも囚われることがない真なる自由を求める者……それは一夏が知りうるどんな人間とも違った存在であった。そして、その自由の探求者は、真っ直ぐ一夏の方を見据えて、問いかけてくる。

「俺もお前らに質問だ……お前らは何のためにISに乗っている？」

「え？」

「守るためだ」

戸惑う筈とは対照的に、一夏は即座に返答する。それだけは迷ったりはしない……誰かを守るために強くありたい。

一夏にとつての根源ともいえるもの……だが、陽太はそこに一滴の疑問という名の雫を垂らしてみる。

「守るため？……誰を、誰から？」

「俺に関わるすべての人を！、その人たちを傷つけるものからだ」

「そうか……確かにそうだな。俺もそれは否定する気はない……ただな……」

陽太の眼が鋭く一夏を射抜く。

「そのご立派な目標はいつ持った？」

「???」

「昨日か?、おとといか?.....それとも何年も前からか?」

「それは.....」

「スツカスカだな.....なぜ死ぬ気で足掻かん?」

「!」

陽太が言わんとすることが臆気ながら見えてきた一夏の心が底冷えする。

「お前は単に『棚ボタ』でISに乗れるようになり、それを良いことに『すべての人を守りたい』とか言う目標を持った」

「そのどこがいかん!」

箒が噛み付くが、陽太はそれを無視して容赦ない言葉をぶつけてきた。

「それが悪いとは言わん。強くなりたい理由なんて人の数だけ存在するんだ.....自由のため、名誉のため、誇りのため、金のため.....そして誰かのために.....だからこそ聞いてんだ。何故、お前はもつと真剣に『強くなるう』としないんだ?」

「俺はふざけてなんか・」

「ふざけてはない。だが誰よりも強くなろうと足掻いているわけでもない.....全部を守りたいって言うのであれば、お前は形振り構わず早急に誰よりも強くなるべきじゃないのか?.....俺よりも、そして千冬さんよりも.....」

一夏から体温が失われていく.....その言葉が心に突き刺さり、知らず知らずのうちに肩が震えだしてしまう。

「お前には我武者羅さが足りないんだよ。何故焦ってでも強くなる

うとしない？、『焦っても仕方ない』『力だけの強さなんてまやか
しだ』とか抜かすのか？…………随分とわかった風な口をききやがる
な、半端者のド素人が…………虫唾が走りやがる」

最後の一口を口に放り込むと、トレーを持って席を立つ陽太。そこ
に猛然と箸が口を挟んできた。

「分かった風な口をきいているのはお互い様だろうが！」

「…………ああ、確かにそうだな」

「ならば私もお前に言っただけでやる！、お前は人の心の痛みがわからな
い人間だ！！」

暴言とも言える言葉を陽太にぶつけた箸…………だが、陽太は一瞬だ
け動きを止めると、再びいつもの表情で箸に言い換えてしてみせる。

「まったくもってその通りだ」

否定はせず、それだけを言い残し、食器を返却口に戻して食堂を後
にする陽太。

怒りに燃えていた箸は、最後まで意識することはなかった。呆然と
なって座り込む一夏は見る事ができないでいた。

通り過ぎたホンの一瞬だけ見せた、陽太の僅かな寂しそうな瞳に…

…………。

陽太の言葉が心の中で反響し続けたまま、一睡もできなかった一夏は、何時もよりも遥かに早く着替えを終えて、ベッドの上で呆然としていた。

「（考えたこともなかった……俺は、真剣じゃないのか？）」

陽太は一夏のことを不真面目だと思ってはいないと言っていたが、それでもああ言われると揺らいでしまう自分がいる。

強くなりたい、千冬のように強くありたい。

彼女のように誰かを、大切な人を守る人間になりたい。

その気持ちは今も失われていないのに……なのに、

「（なのに……なのに……）」

迷いは晴れることはなく、一夏の中をグルグルと回り続ける……だが、いい加減そんな調子でいるのを我慢できず、起き上がると、少し早い朝食を取るため部屋を出て行こうとする。

「あつ」

隣に寝ている筈のことをすっかり忘れていた……ベッドの上を覗いてみるが未だに静かな寝息を立てていおり、起しては可哀想だと考えた一夏は音を立てないように静かに部屋から出て行く。

さてと、何を食べるか？……と思索しながら廊下を歩き出したとき、突然後ろから大きな音を立てて部屋を飛び出してくるシャルとバツ

タリ出くわす。

「シャ、シャル？」

「あ、一夏っ！！」

ものすごく慌てた様子で部屋から飛び出すシャルにびっくりする一夏。何事かと思いきや、その手に一枚の手紙が握られていた。

「一体何が……」

「陽太が！、陽太が！！」

「！？」

「朝起きたら、部屋にいない……これが部屋に……」

そこでシャルから手紙を受け取って中身を見る。そこにはかなり汚い字の日本語でこう書かれていた。

『に、三にちでかけてくる。しゅうまつにはかえってくるから新ばいしないように。あでいおす』

「（小学生並みに下手くそな字だな）」

陽太がいらないことをいいことに酷いツツコミを入れる。どうやら日本語自体が苦手なようだと意外な一面を見た気がする一夏であったが、今はそれどころではない。

「どこに行ったのかわからないのかシャル？」

「ボクもさっぱり……」

「どうした？、こんな朝っぱらから……」

と、そこへ朝の見回りにきた白ジャージこと千冬が、二人の会話に加わってきた。寝起きらしく、寝癖で髪の毛がアホ毛状態に立っているが、それをツツこめる人間はこの場にはいない。

「陽太の奴が、書置き一枚残してどっかに…」

小学生並みの字で書かれた紙切れと、半泣き状態になっているシャルを見比べ、大体の事情を察した千冬が大きくため息をついた。

「（いつまたこの間のような騒動になるのか分かんというのに……あのバ・カ・タ・レ・がああッ！）」

正直言いたくはないが、陽太の存在は学園防衛の切り札なのだ。

この間から二度ほど現れている謎の無人機相手に、単体で対抗できるIS操縦者と言えば、学園中探しても陽太と、生徒会会長ぐらいである。

所詮世界最強の称号を得ていようと、現時点で専用機のない自分は戦力にカウントできない。

最新鋭の兵器を取り扱っている場所としては情けない話ではあるが、『本当の意味』での実戦経験を持っているのが千冬を除けば陽太のみである以上、彼にはいてもらわないと困るというのに……。

「（この間話したはずなんだが……）」

『ん？、わーった。わーった』

思い出してみると、真面目に聞いてはいなかった。耳をほじりながら聞いていたのはポーズではなく、本当に聞き流していたのだろうか？

とりあえず帰ってきたらその辺りも含めてみっちりお仕置きをする

ことを決めた千冬は、怒りを外部に漏らさぬようにいつもの仏頂面を取り繕うと二人にとりあえず公言しないよう釘を刺す。

「事情があつて一時的に学園を離れているだけ……周囲の人間に聞かれたら、そう言え。いいな？」

「はい……」

納得して引き下がる二人……。

「（陽太がいない……）」

ただそれだけのことなのに、不思議なぐらい焦燥に駆られる。だが数日したら帰ってくるというのだ、ならばそれまでに見違えるように強くなつてやろう。心の中に渦巻く焦りを一旦中に押し込めて、不安そうなシャルを引き連れ食堂に向かう一夏であつた。

放課後。

昨日の続きをするように、鉄柱の間をひたすら左右にジグザグと高速で蛇行しながらのダッシュの練習をする一夏。昨日よりもタイムは上がってきているが、妙に緊張しているのか力み過ぎて力が入りすぎ、千冬の望むレベルには依然到達しておらず、厳しい声が飛び出す回数も増えてくる。

「何をしている！、シフトウェイト重心移動をもっとスムーズに行え！」

「は、はい……」

「またグラついたぞ！、正中からずれるからそんなことになるんだ

っ！、スラスターに振り回されるな！！」

「はいっ！！」

「スピードを落とすなっ！！！！最高速を維持しながら体を振れえっ！！！！」

だがタイムは思つうようにあがらず、その後も伸び悩み続ける有様なため、千冬は一息入れるために休憩を取るのであった。

汗だくになりながらISを解除し、インナー姿になる一夏にスポーツドリンクを渡したのは、同じようにインナー姿になっているシャルであった。

「お疲れ様、一夏」

「ああ、ありがとうシャル」

自然と気遣いをしてくれるシャルの姿に、さっきまで肩に入っていた力が抜ける。

「頑張ってるのわかるけど、頑張り過ぎるのは良くないよ一夏」

「ああ、わかってる……………わかってるけどさ」

一夏にもそれはわかってる。千冬もしばらくは基礎固めに専念すると念を押してきている。だけど予感が彼にはあった……………。

「強くならなくちゃ……………陽太がいらないんだ。俺がその分皆を守るようになつてないと」

「……………」

シャルの表情が暗くなるのを見て、自分の失敗に気がつく。考え事をしていると周りが見えなくなるのは悪い癖だなとぼやく一夏は、シャルの肩を叩き、心配させないように笑顔をとり繕った。

「心配すんなよシャル……って言っても、俺が言い出したことだけどな！」

「……………うん、わかつてる」

「大丈夫だよ！、アイツならすぐ帰ってきて『ちょっと出かけてた。お前には関係ないだろ？』とか言っって何食わん顔して帰ってくるからさ！」

「……………ブツ！」

ちつとも似ていないモノマネに噴出すシャル……………少しはこの寂しそうな表情も和らいだみたいだった。

そんな二人を千冬が遠目で眺めていた時、彼女の携帯に真耶からの着信が入り、何事かと通話ボタンを押してみる。

「どうかしたのか、山田先せ・」

『大変です！、織斑先生！！、学園の防衛用センサーに無数の・』
「手短に説明を！」

千冬の声が張りあがったのを聞き、一夏とシャルの二人もすぐさま振り返る。

『成層圏スレスレの高度から、無数の反応と……………多分ISと思われる反応も四つあります！！、投下予測ポイントは学園と見て間違いないません！！』

「無数の反応？、ISではないのか？」

『はいっ！、今照合を……………！！』

携帯の向こう側で真耶が息を呑むのを感じる千冬。IS四つというだけでも厄介なことになることが必死なのに、それに追隨する兵器

となると……。

「どうした山田先生？、やはり弾道型ミサイルか何か？」

『いえ！、この反応は「オート・マトン（対人暴徒鎮圧用無人遠隔操作ロボット）」ですっ！』

流石の千冬も息を呑む。

オート・マトン（対人暴徒鎮圧用無人遠隔操作ロボット）

それはアメリカとイスラエルが共同開発した新型の自立稼動兵器であり、世界中の軍隊でも採用されつつあるISと並ぶ最新鋭兵器のことである。

戦闘能力はISとは比べ物にならないほど低く、現行兵装でも十分に撃破可能なものであるが、その最大の特徴は完全に制御された自立兵器であることで、特に対人戦闘であまりの威力のため『世界中の歩兵の9割をリストラできる』とまで言われている。

だが、その最新兵器をよりもよってこの学園に投下してくるなど正気の沙汰ではない。そのようなことをすれば即座に世界中の軍隊を敵に回すことになる。

「（まさかアイツが？……いや、だったらオートマトンなど連れてくるはずはない！）」

一瞬だけ親友の顔が脳裏に浮かぶが、今回はやり口があまりに違いすぎる。迷いを断ち切ると、千冬はすぐさま真耶に指示を出した。

「校内に残っている生徒をシェルター及びアリーナに非難させる！、そして専用機持ちにすぐさま連絡を！、第三アリーナの通信室に集

まるように!!」

『はい!、わかりました!!』

「直ちに非常事態宣言を発令!!、以後回線は一般から専用回線に切り替えるように!!」

携帯を切ると、すぐさま二人のほうを振り返る千冬、そこにはある程度の事態を把握した一夏とシャルがいる……この分だと説明の手間も省けそうだと少しだけ安堵した気持ちになる。

「聞いてのとおりだ。どこかの軍隊が攻めてきたようだな」

「そんな……ここはアラスカ条約で不可侵になっているIS学園ですよ!!、手出ししようものなら世界中を敵に回すことに……」

「どこの国なのかはわからん……そもそも国なのかどうかすらわかっていない。だが、展開したISが四機とオートマトンが無数……とても穏やかに話を済ませる気があるとは思えん」

「……………」

「俺は何をしたらいい!千冬姉っ!!」

思わず先生呼びをやめてしまう一夏であるが、千冬も今はそんな細かいことにツツコンでいる場合ではないことはわかつている。

「私と一緒に来い。お前も戦力の一人として指示に従って貰うぞ、いいな?」

「おうっ!、任せとけ!!」

中々頼もしい面持ちになり始めていると、密かに心の中でほめる千冬。しかし、今はそれを前に出すわけにもいかず、いつもの厳しい表情を崩さぬまま歩き出す。無言で歩き出す千冬と、その後を追いかける一夏とシャル。

だが、現在の戦う姿を知らないシャルを除き、一夏の心には一抹の不安がよぎっていた。

―陽太がいない―

そのことが彼の心の中に重くのしかかってくる………自分が彼の代わりに戦わないと。その決意を乗せるように、拳を力強く握る一夏は、皆が集まっている集合場所に急ぐのであった。

不安（後書き）

というわけで、陽太が謎の失踪してます。よって次回には多分出てきません。

え？、つまないオリ主なんていない？

ですよ〜w

っと、冗談はおいといて、今回のお話は実は微妙にこれからのお話のターニングポイントになってます。

つまり、原作ではいまだ書かれていない、もしくは書かれることはないかもしれない、

『一夏の考え方の甘さ』

についてです。

こう書くと、『アンチな意見か〜』となりますが、私は原作一夏のことを嫌ってはいません。

ですが、今回陽太が一夏に訴えたように『ISがあるから強くなりたいのか？それとも強くなるための手段としてISを欲しているのか？』という疑問が解決されていない限り、一夏にはどうしても好感が持てんです。

まあ、このあたりは各自のご意見があると思うので、それぞれの感

想を待ってます。

まあ、難しい話はこのぐらいにしておいて……さてさて……次回
の更新はいつになるのかな？w

謎のIS集団／前編／（前書き）

タイトルの通り、謎のIS操縦者たちの登場です。

今回のオリジナルキャラたち………ひょっとしたら元ネタがわかる人があるかもしれませんね。

では、お楽しみください。

謎のIS集団へ前編へ

IS 学園襲撃よりも数時間前――

豪華な調度品が並べられたとても静かな最上階のスイートルームの一室から、シャワーの音が聞こえてくる。

この部屋を借りるに当たって、『彼女』は部屋どころかその階全てを貸しきっていた。それは彼女がうざったいホテルにいる人間とのやり取りを避けたためだ。

浴室も豪華であつたが、彼女の肢体はそれすら霞んで見えるほどの見事さである。

女性にしてはいささか大きめの肩幅に、限りなくマッチョに近い筋肉質で焼けた肌色をしているが、腰まで伸びたプラチナの髪に、千冬よりも頭ひとつ分高い長身に真耶すら凌ぐほどの胸、鍛えられた細いウエストに、張りのある尻を持ち、見ようによつては官能的に見えるが、彼女にはむしろ一種の野生を感じられる印象を与えるものがあつた。

それは彼女を見れば誰もが真つ先に目に付いてしまふだろう、眉間からへその辺り伸びた一筋の刀傷である。

彼女が暖かいお湯を出していたシャワーの蛇口を閉め、おいてあつ

たバスタオルで全身を無造作に拭いている中、振り返りもせずに彼女が言葉を発した。

「何の用だ？」

そこにあつたのは空中に投影されたディスプレイ、そして彼女にいつも『仕事』の以来をしてくる男のシルエットであつた。

『入浴中に失礼。少々急ぎの件でね……………』

「そういうのであれば、『それなり』の用件なのだろうな？」

プラチナの髪の毛の合間から真紅の眼光が見え隠れする……………それは前途で述べたように、人間というよりも野生の猛獣を思わせる鋭い眼光で、正面から見られれば大抵の人間は腰を抜かして何も話せなくなるだろう。

『とぼけるのもいい加減にしてくれ。なぜ私が依頼した『仕事』を君ではなく、部下に任せたんかい？』

「何の話だ？」

『話がかみ合っていないね……………昨日、君が承諾した『仕事』のこ
とだよ』

「……………知らないな」

画面の向こうで男がイラついているのが彼女には手に取るようにわかった。だが、だからと言って下手に出る気も機嫌を直してやる気も更々ない。

彼女は綺麗に髪の毛の水気をふき取ると、バスタオルを放り投げ、全裸のまま歩き出す。

『待ちたまえ！、これは我々にとっても重要なことなのだ！』

「私が知らないということは、部下が勝手に私の名を語って依頼を承諾したのだろう……まったく困った奴らだ」

『その程度で済ませてもらっては困る！、よりにもよって極秘に中東に配備する予定だったオートマトンを無断で使用してIS学園を攻めるなど！』

その言葉を発した瞬間、画面越しに男が腰を抜かすほどの殺意が背中越しに放たれる。

「……………アイツ等……………まったく、本当に困った奴らだ」

『お、おい！……………この責任を』

もう彼女は、返事もすることなく浴室を出ると、ベッドの上に放り投げられていた自分の服を着る。レザーのズボン、軍用の物を自分にカスタムしたブーツ。そして特注の黒いコートを上半身に何もつけずにそのまま羽織ると、壁に立てかけてあった二本の刀剣に手をかけた。

「あれほど、私の許し無しに織斑千冬がいるIS学園には、手を出すなど釘を刺しておいたものを……………これでは、私自らアイツ等連れ戻すしかないか……………」

言葉を聞けば部下の失態を咎めているように聞こえるが、その表情は違っていた……………それは長らく待ち侘びていた瞬間が訪れた歓喜のもので、瞳孔いっぱいに広げた真紅の眼と、犬歯を剥き出しにした口という、まさに『獣』を表すのにふさわしいものであった。

街を見下ろす数十階の窓に近づいた女が、おもむろに鞘に納まった刀剣を口に咥え、ゆつくりと刀を引き出していく……………拵えは西洋刀に近いものがあるが、中身の刀身は明らかに日本刀そのものである

る。

完全に刀を抜き切った瞬間、僅かな風切り音が室内に響く。

「まったく……感謝するぞ馬鹿共ッ!!」

直後、粉々に切り裂かれたガラスが地面に落下していき、その後を追うように飛び降り……猛烈な風圧に晒されながらも、彼女は嬉々とした表情で叫ぶ。

「さあっ!……感動の再会といこうか、織斑千冬っ!!」

ちょうど校門に二つ、第四アリーナに二つと第二アリーナに一つずつ、上空から無数のミサイル型コンテナが降下され、それが空中で更に無数の金属の塊に分裂してIS学園に降り注いだ。それこそ、現在の世界において最も凶悪と言われている対人兵器「オートマトン」である。

2mほどの金属の塊から突然4本の足が生え、中心から赤いセンサーが現れた……その様は鋼鉄の蜘蛛を彷彿とさせ、数十体が一斉に行動を開始する。

このオートマトンには、大口径機関砲とグレネード、そしてマイク

ロミサイルという対人戦闘にはあまりの威力をもった武装が持たされておき、近々とある中東地域でデモンストレーションを兼ねたテロ鎮圧作戦に使用される予定の代物である……これほどのものがなぜ、国際法で不可侵が決められているIS学園に投下されたのか？だが、今はその問題を深く考えている時間がない。基本、オートマトンは単純な自立パターンでしか動作できない。対人戦闘において手加減をしてくれる代物ではないのだ。如何に訓練されたIS学園の生徒とはいえ、非武装状態では死に行くようなものである……訓練用のISの数も限りがある。皆に装着させている余裕がない以上、丸腰の生徒たちに危害が及ぶ前に、即時撃破する必要があるのだ。

そしてこの目の前の脅威を撃破する一番の戦力と言えば、やはり専用機持ちである……そのことを理解している千冬の命令の元、学園側の対応は素早かった。

第二アリーナに投下され、不気味なセンサーを光らせながら獲物を探すオートマトン。この機械兵たちが集団で移動する中、一番前にいたオートマトンの動きが止まった。何かを見つけたのだ。

そこはアリーナから整備用のピットルームへと続く入口……そしてそこからオートマトンに向かって強烈な銃撃が浴びせられ、回避する暇もなくハチの巣にされた一機のオートマトンが爆発した。

爆風がオートマトン達を包み込む中、一陣の風が入口から飛び出す。

「はあああああああああつー！」

シャルのダ・ガンXである。

両手にガラムとヴェントを携えたシャルは、フルスロットルで加速しながら飛び出すと、続けざまにオートマトンに銃弾の嵐を喰らわせながら空中を縦横無尽に飛びまくる。オートマトンもたまらず大口徑機関砲で反撃するが、どれほど撃つてもその銃弾は空を切るば

かりであつた。

当たり前といえは当たり前なのだ。いくら対人用に作られていても、それはあくまで「生身」の人間が前提であり、自分たちを遙かに上回る「超兵器」を着込んだ専用機持ちなど想定されていない。兵器としての違いすぎるスペックが如実に現れ、一機、また一機と撃墜されていく。

ならば機関砲ではなくミサイルで、とモードを切り替えたオートマトン達が一斉に発射管を開いた。

ダ・ガンXのハイパーセンサーが、敵のFCSの動きに反応して、鳴り響くアラームを聞いたシャルが叫ぶ。

「セシリアっ！」

「心得ていますわっ！！」

間髪入れずに返ってきた返事とともに、オートマトンを無数のレーザーが貫いていく。ブルーティアーズのスターライトのレーザーだ。シャルが先陣を切つて敵を攪乱し、苦し紛れの反撃に出た機械人形たちにさらなるダメ押しとしてアリーナ最上部に隠れていたセシリアの狙撃が放たれたのだ。

二方向からの攻撃に対処できず、バラバラで反撃し始めるオートマトン。連携が取れず、数で攻めることができない以上、もはや彼らに勝ち目などはない。

侵入してきてから僅かに10分足らず、最後のオートマトンをセシリアが射抜くと、とりあえず一番数の少なかった第二アリーナを占拠していた敵勢力の駆逐には成功する。

「お疲れ様、セシリア！」

「お疲れというほどでもありませんわ……………面白いぐらいにあっけなかつたですわね。これならいつもの訓練の方がよほど疲れが来ますわっ」

自分の隣に降り立ち、優雅に胸を張るセシリアを労いながら、作戦が済んだこと知らせるために通信を入れるシャル。

「織斑先生、聞こえますか？、デユノアです」

『聞こえている。ガラクタどもの掃除はすんだか？』

「はい。目立った反撃も受けませんでした……………」

『そうか……………他の個所は上級生と教師たちでなんとでもなるだろう、すまなかったなお前たちだけで…』

「いえ、これくらいは……………」

『だが気を抜くな。後続が現れるとも限らんし、まだ敵I Sの方も姿を……………』

『シャルっ！！、そっちは大丈夫なのか！』

千冬の言葉を遮るように一夏の大声が聞こえてきた。その直後、何かに殴られる音がしたが……………。

「ハハハハッ……………僕もセシリアも大丈夫だよ一夏」

「この程度、食後の運動程度にもなりませんわよ一夏さん」

『そうか……………そいつはよかった』

通信越しに心配してくれる一夏に、シャルとセシリアはお互いの顔を見ながら苦笑する。

「とりあえず、他の場所の応援に向かおうと思います。いいですか、先生？」

『そうだな、よし、ならばそこから一番近い正門の方を……………』

千冬の声がいったん途切れたことを不審に思う二人。だが次に聞こえてきたのは千冬ではなく、慌てた様子の一夏の方であった。

『二人とも!!、なんか四つほどそっちに来てるぞ!!』

『バカ者!!、デュノア!、オルコット!!、例の正体不明のISが四機とも……』

「……………やあゝっぱり、こんなデク人形じゃ相手にならなかったか」

聞きなれない声が聞こえた瞬間、銃口をそちらに向けるシャルとセシリア。

そこには暮れかけた夕陽を背中に、四人のIS装着者が、武装を持ちながら二人を見下ろしていたのだった。

「まずいつ!」

「いくぞ、一夏!!」

未だ素人の域を出ていないということで作戦本部になっている第三アリーナの管理室で待機を命じられていた一夏と篤が、部屋を飛び出そうとする。

だが、

「バカ者!!、どこに行く気だ!!」

千冬が一夏の右腕を掴み、行く手を遮った。そのことにすっかり頭にきた一夏が、千冬に大声で抗議する。

「離せえッ！、俺はシャル達の所に行くっ！」

「敵の狙いも解らぬまま、迂闊な行動を起こすな！」

「狙いなんて直接聞き出せばいいだけだろうが！、離せよ千冬姉！
！」

次の瞬間千冬の拳が頬を捉え、吹き飛ぶ一夏。

「これで少しは頭に上った血が戻ったか？」

「一夏っ！、千冬さん！？」

「お前もだ篠ノ之。勝手に動き回るな、これは命令だ」

有無も言わせぬ眼力に一瞬怯む筈……………だがすぐさま目に力が戻り、殴り飛ばされた一夏の方に行き、彼が起き上がるのを手伝う。

「すみません千冬さん……………私も一夏も二人の援護に行きます」

「貴様ら……………」

言葉に本気の怒気が混じり始めるのを感じる一夏と筈であったが、簡単に引き下がるわけにはいかない。

「俺たちが行けば四対四だ。数の不利はとりあえず消えるぜ千冬姉？
」

「バカな素人が一端の戦力を気取る気か？、いつからそんな自惚れを持つようになったのだ貴様ら？」

「自惚れなんて持ってねえーよ。そんなもの持てるわけねえーだろうが」

一夏の瞳には先ほどの焦りはすでに息をひそめ、強い意志だけが残っていた……。それは、いつもの理想を語る時の一夏の眼である。

「俺よりも強い奴なんていくらでもいるけどさ……。でもやっぱり見てるだけなのは嫌なんだ」

「私も同意見です……。弱いことを口実に戦いから逃げ出したくはありません」

何もかも足りていないのかもしれない。実力も、経験も、時間も、強くなりたいという意志すらも……。でも今は友達を助けに行きたい。危ない眼に合いそうになっている友達をただ眺めるようなことをしたくはない。

そんなことをするぐらいなら、何のためにIS学園にいるのかわからなくなってしまう。

「何も解ってないけど……。何も出来ないかもしれないけど……。俺、イヤなんだ。ホンの僅かでも出来ることがあるのならしたいんだ」

出来ることを全力でやりたい。誰かのために戦うなんてカッコつけたことは今は言わない。今はただ友達を助けに行きたい……。一夏はただそれだけを願う。

それは一瞬とも一時間とも取れるほどの緊迫した時間であった。

溜息を一回ついた千冬が、親指を入口の方に向け、仕方なしにGOサインを出す。

「まったく……。お前というやつは……」

「！！？、サンキュー千冬姉！！」

「織斑先生だ………ただし」

走り出そうとした一夏と箒であつたが、箒の腕を掴む千冬。

「織斑は認めるが、お前はダメだ」

「なっ！？」

「早く行け織斑………」

「あっ？、ああ………」

後ろ髪を引かれる思いであつたが、とりあえず許可が下りたということと急いで第二アリーナに向かう一夏。

そして、管理室に取り残された箒は、千冬に激しく抗議をする。

「なぜですか織斑先生！！、一夏だけ出して私になぜ許可が・」

「お前は専用機がない………だが理由はそんなことではない」

「？」

千冬の言葉が理解できず、首をかしげる箒………だが次の瞬間、箒の心は激しく打ちのめされてしまうのであつた。

「今のお前の強さの在り方は、単なる暴力だ」

「！！？」

「なぜそう思われるのかは、自分で考えろ………さもなければ………」

「………」

「お前には学園から去ってもらふことになるかもしれないな………」

箒が凍りつく………だが、千冬はそれ以上彼女に何も話そうとはしない………ただ一人取り残された箒は、その場に立ち尽くすのみであつた。

謎の四機が、それぞれ違った面持ちでシャルとセシリアを見つめている。

「ふんっ!!、デク人形を倒したぐらいで粹がっている程度、やはり大した奴などIS^{ニッ}学園にはいないようだな」

黒いショートヘアに、一本だけ異様に長く飛び出した犬歯が特徴的で、東洋人の少女が二人を笑い飛ばした。

オレンジの装甲と両手にガトリング砲を持ち、背中のスラスタは小型に纏められたランドセル型のもので、腰部のスタビライザーにもミサイルが搭載され、どうやら機動力よりも火力で攻めるタイプのISを装備し、他の三人よりも何故か一歩前に出て威張り散らしている。まるで私がリーダーだと言わんばかりに……。

「うつとしいから、眼の前から消えてよ、このバカ『スピア』……」

……

「誰がバカだ、貧乳『フリーユーゲル』!!」

オレンジのIS操縦者をバカ呼ばわりしたのは、セシリアと同じ金髪を両サイドで纏めたツインテールの髪型をした少女で、灰色の装甲をしながら、どことなし蝙蝠を思わせる独特のウイングを持ち、右手にビームサイズ、左手に実体剣のついたシールドを取り付け、スタビライザーも小型にしており、どうやら機動性重視のISを装備した、他の三人よりも絶望的な胸のサイズの少女である……ただ気にしてのか言い当てられて顔を真っ赤にしてブチギレているようであるが……

「もっぺんっ言ってみなさいっ!!!、この脳筋ブスがつ!!!」
「んだと?、テメエはそんなに死にたいのか!!!!」

そんな二人を恥ずかしそうに見つめているのは、眼鏡をかけた理知的な印象の銀髪の三つ編みの少女であった。彼女もまたIS使いであり、銀髪に合わせるかのように銀色の装甲を全身覆われており、見た目からして堅牢である。そして背中に特徴的な巨大曲刀ショーテルを背負い、右手にも盾をもたられた近接仕様ISを駆っている。でも、とにかく二人のやり取りに関わりにならないように明後日の方向を向きながら口笛を吹いているが……。

「おまえはどっちの味方だ、『リユーリク』!?!」

「アンタ、また事なかれ主義をかまそうとか考えてるわね?」

「ギクッ!……そ、そんなことはないですよ」

思いつきり考えていたようである。そして最後にそんな三人を楽しそうに眺めながら、一人バナナを食している少女がいた。彼女の名は『フォルゴレ』、この中では意外に一番年長な少女である。

四人の中では最大級の胸の大きさを持ち、その大きさは山田真耶にすら劣らないほどであるが、今はそんなことを気にしている場合ではないのでこの場で割愛させていただくが、全身を青い装甲で覆われ、両手に東洋の竜の意匠を施された独特な手甲を持ち、背中に長尺の柄を持つ長刀を背負ったISを持つ茶髪のお団子ヘアの少女は、一人上機嫌そうにひたすらバナナを食していた。

「ハムハム……みんな仲良しだね」

独特である。ものすごく独創的な見解を持って三人のやり取りを眺めている……。

濃いんだか薄いんだか凹んでるんだか凸ってんだかわからない四人組が、自分たちをそっちのけで漫才を

展開する中で、遂にたまりかねたセシリアが大声で怒鳴りつける。

「貴方達っ！！、私たちを差し置いて何をさつきからペラペラと…

……いったい何をしにきたというんですかっ！！」

「「「「！！！！？？………おお、そうだったっ！！！！」」」」

自分達の本来の目的をようやく思い出した四人は、各自武装を前に突き出し、スピアーが代表して要件を突き付けてくる。

「アタシ等の要求はっ！………要求はっ！！………要求は………要求はっ」

が、なぜかその言葉の続きが出てこずに言葉を詰まらせるスピアー………となりではフリーユージェルがかなりジト目で睨みつけている。

「ねえー、ねえー、スピちゃん？」

「その呼び方はやめろって言うてんだろっが！、そんでなんだ！？

………今、良い所なんだぞっ！！」

そこにすかさずフォルゴレが質問してきた。

「どうして私達はここまで来たのかな？」

「何度も言っただろうが！、『親方様』に代わってアタシ等がっ！」

「………第四世代ISの『白式』と、世界最高のIS使い『織斑千冬』の命を貰いに来たんでしょ？」

いい加減に自分達の漫才に疲れたのか、フリーゲルが呆れながら自分達の目的をシャルたちに告げる。

「白式と……………織斑先生の命!？」

「……………そのためにこれだけの騒ぎを？」

「織斑千冬をいぶり出すのに使えるかと思っただけ……………予想以上に使えない機械どもだったわね」

ビームサイズを構えるフリーゲルの目に鋭い殺気が籠ったのを感じた二人は、即座に臨戦態勢を取る。

「さあ、おとなしくこの二つを渡しなさい……………そうすれば命は助けてあげるわよ？」

両者の間で張り詰めた空気が広がる……………だが、その空気を切り裂くように、一陣の白い風が舞い降り、フリーゲルに襲いかかった。

「ふざけんなあああー！！！」

「！！！！？」

一夏の雪片式式と、フリーゲルのビームシザーズが激しく鏝競り合う。そして一夏は突進した状態で更にスラスターを全開にして、パワーで押し切ってみせた。

突然の乱入に浮足立つ四名……………だが、バカっぽく見えても場数を踏んでいるのか、すぐに立ち直し、それぞれ別方向に展開する。

「一夏っ!？」

「一夏さんっ!？」

「千冬姉の命を寄せたか?……………テメエー等、ふざけんのも大概にしるよ!!!!？」

激怒した一夏が、刀を構えながらフリーユージェル達を威嚇する。今の一夏には敵の狙いの一つに自分の白式があることなど眼中にもない。千冬の命をコイツ等は脅かそうとしている……………そんな奴らを見過ごせる一夏ではないのだ。

「あれが第四世代の白式と……………」

「男のIS使いにして、織斑千冬の弟……………織斑一夏」

「結構いい男です〜」

「でも怒ってるよ〜？」

後半にかけてかなり緊張感のない感じになっているが、目の前に目標の獲物が現れた以上、彼女たちも黙っているわけにはいかない。すぐさまフォーメーションを取りながら、空中を高速で飛びまわり、一夏に襲いかかる。

最初に来たのは、不意打ちを食らわされたフリーユージェルであった。

「何のために千冬姉の命を狙ってんだ!？」

「織斑千冬が私達にとっては敵だからよ!!」

ビームシザーを大きく振り回しながら斬り込んでくるフリーユージェルを、正面から受け止める一夏。

「何っ!？」

「織斑千冬は私達の親方様の宿敵!!、ならば私達が親方様に代わって倒すのは当たり前でしょ!!」

「そんなことのためにか!？」

「そんなこと?……………何も知らない人間が気安く『そんなこと』だなんて言わないでよっ!!」

フリーゲルの一撃の威力に、今度は一夏が吹き飛ばされた……
空中でバク転して態勢を立て直す一夏。互いの獲物を構えながら、
両者が睨み合う。

「お前らの理由なんて今はとにかく知らねえーよ!!、けどな、
お前らが千冬姉を狙うってんなら、俺は何があってもお前らを許さ
ねえー!」

「上等よ……立ちふさがるってんなら、死んで後悔しなさい!」

両者が再び、空中で激突する。

IS学園に襲撃を仕掛けてきた謎のIS使い達と、一夏達の攻防は、
いよいよ本格的ヒートアップし始めるのであった……。

謎のIS集団く前編く（後書き）

前編終了です……やっぱり馬鹿はいいなw

さて、この馬鹿集団……読者の人たちに愛される馬鹿どもに昇華するか？ それとも単なるモブとして消えうせるか……

後編につづきますw では！！ノシ

謎のIS集団〜後編〜（前書き）

うん、亀更新がそろそろデフォになってきたぜw

ではようやく載せれた後編。

意外に強いセシリア。

バカキャラ確定か！？、ファルゴーレ？

主人公だけど最弱だぜ、一夏君。

の三本をお楽しみください（嘘

謎のIS集団〜後編〜

赤熱の刃が高速で首筋に迫り、それを間一髪のタイミングで体を捻って回避する一夏。

「ホラホラホラッ！！、不意打ちかましてきたかと思えば、だらしなく逃げ回るなんて……………もうちょっと根性見せなさい、最新鋭の第四世代IS！！」

右斜め上からの斬り落としをバックステップでしのぐが、その直後、コンビネーション追撃の斬り返しである斬り上げが真下から襲い掛かり、それを何とか雪片で受け止めてみせる。

「コイツウ！、動きが速いつ！！」

「アンタがトロいだけよ！、名ばかりの新型さんっ！！」

罅迫り合いの状態から押し飛ばされる一夏。

フリーゲルのISである『デスサイズ』は、突出した瞬発力と機動性を以って敵機に高速で接近して一撃を見舞うという白式と同じ近接特化型のISのようである。すなわち、同コンセプトである以上、ISの相性で一夏が弾き飛ばされているわけではない。ましてパワーや性能ならば最新鋭の白式が劣る道理はない。

「（あのビーム鎌を掻い潜って、懷に飛び込めばっ！）」

「遅いつ！」

純粹に操縦者としての技量で劣る一夏は、フリーゲルの巧みな近接戦闘に翻弄される。

左腕に装備されたバスターシールドの先端を展開させビーム刃を出した状態で、バスターシールドを射出させるフリーゲル。

その予想もしていなかった攻撃に虚を突かれ、なんとか受け止めるが、衝撃でアリーナの外壁に突っ込む一夏。

「な〜んだ。どんな奴が選ばれたのかと思つててみれば、全然大したことないド素人じゃない……」

「くそっ！………舐めてんじゃねえー！！」

強気に吠えてみせるが、敵の実力に内心冷や汗が止まらない一夏は、ちらりと仲間の現状にも目をやつてみる。

シャルのダ・ガーンが壮絶な弾幕を張りながら、フォルゴレの『

ドラゴンハンゲファイヤー

シエンロン』が放つ炎放射器から距離を置こうと高速で飛びまわる。距離を詰めようとするフォルゴレを、巧みな距離感と射撃の弾幕で足を止め、すかさず離脱するシャルの戦い方に、仲間内から『バカの体現者』と揶揄されているファルゴレでは手も足も出ないでいた。

「待てえええええー！！！！、逃げるなあ！」

「『待て』と言われても、待つ訳にはいかないよっ！」

左手のガラムを量子化させ、62口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』に一瞬で持ち帰えた即座に連射する。どちらかといえは守りに入っていたシャルだが、敵の武装が近接に偏ったもの

しかないことを確認すると、一気に攻勢に回ってみせた。

「おっ！、そっ！、れっ！、はっ！、んそっ！！、くうだよおお！！！」

半泣きでシャルに今度は追いかけて回されるフォルゴレ。

元来フォルゴレの機体は近接に特化しているためか、射撃兵装が豊富なシャルのダ・ガンにしてみれば、格好のカモなのだ。

レインでフォルゴレを撃ちながら、今度はフリーゲルにヴェンドで牽制を入れるシャル。突然の攻撃に不意を打たれたフリーゲルは思わず一夏から大きく距離を開いてしまう。

「一夏っ！、早く起き上がってっ！」

「ああっ！」

シャルの指示に従って起き上がった一夏は素早くその場を離脱すると、シャルのそばに行く。

「サンキュなシャルっ！」

「油断しないで一夏！」

厳しい言葉であるがまさにその通りである。これは先日セシリアと行った練習試合ではない……本物の実戦なのだ。

「（素人の俺でもわかるぐらいに殺気が籠ってやがる……………ちくしよー！！、これが本当の戦闘ってやつなのかよ！）」

考え込むとビビッて動けなくなってしまうそうになる自分を奮い立たせ、一夏は雪片を強く握り返す。

「シャル！、俺のISは接近戦しか出来ない！！、だから援護頼めるか！！？」

「一夏！？？」

「あいつら千冬姉の命を狙ってる！、命をだ！」

「……………一夏」

「絶対に許せねえー！、許すわけにはいかねえー！！、何があつても！！……………だから俺は何が何でも勝たなきゃならないんだ！！……………だから…頼む！！！」

絶対に譲るわけにはいかない。

ここでもし逃げ出したら、今まで何のために生きてきたのかわからなくなってしまう。

千冬姉がコイツ等みたいな奴にやられるとは思わないけど、逃げたことを責めるとは思わないけど……………自分は一生後悔をしながら生きていくことになる。それだけは理解している一夏だからこそ、その瞳には強い真剣な想いがこもっている。

シャルにもそのことが理解できたのか、彼の言葉を心良く引き受けてみせる。

「まず一機に的を絞るよ。最初はあの鎌を持った黒いISだね」

「……………ありがとう！！！」

礼を言いながら、即座にフリーゲルに向かって突っ込む一夏。その様子がいたく腹立たしかったのか、逃げることはせず真正面からフリーゲルは受けて立つ。

「上等よっ！、ド素人の分際でえっ！！！」

「そっちはただのテロリストだろうが！！！」

互いの獲物を振りかぶった瞬間、デスサイズのビームサイズをシャ

ルの援護射撃が弾き返してくれる。その衝撃にフリーゲルがバランスを崩すと、一夏は斜め下からの斬撃でフリーゲルに攻撃を加えた。

「!!」

反射的に後退して直撃は避けたものの、黒い翼の先端が一部斬り飛ばされる。

予想だになかった手傷と反撃に、一瞬で思考が沸騰したフリーゲルは顔を真っ赤にしてしゃにむに斬りかかるが……

「死ねっ！」

「させないよっ！」

だが巧みなシャルの射撃に勢いを殺され、動きが止まった所に一夏が斬り込んでくる。そのコンボに圧倒され徐々に不利になっていくフリーゲルは、先ほどまで自分と一緒に戦っていた仲間の存在に気がつき、思いっきり叫んでみた。

「フォルゴレっ!!」

「ん？」

思いっきり観客席でバナナを食べていた。その姿を見た瞬間、フリーゲルの頭の血管が二、三本ブチ切れたのは言うまでもないであろう。

一夏の雪片を鎌の柄で受け止めながら、なぜ一人おやつタイムを取っているのか、怒りを抑えながら聞いていみるフリーゲル。

「アンタ、何一人思いっきり観戦モードに入ってるのよ!？」

「お腹減ったからね〜!、フリちゃんも・」その呼び名は今す

ぐ止めるバカッ！！！」

一歩間違えれば最悪のあだ名になりそうな名前呼び、胸にコンプレックスを持つている自分を前に、豊満な胸の谷間からバナナを取り出して差し出すフォルゴレに、三重の意味で抑えきれない殺意が湧き上がるフリーユゲル。

「フリちゃんが馬鹿って言ったあああゝゝ！、フリちゃんが、フリちゃんがゝゝ！！」

「女としての自覚があるなら今すぐにやめろ！、もしくは今すぐ心臓止めろっ！！」

泣き叫ぶフォルゴレを怒鳴りつけるフリーユゲル。その光景を見ていたシャルと一夏は人知れず戦慄する。

「（すごい……真剣勝負なのに緊張感台無しだ）」

「（天然ゆえに、恐ろしい……）」

一方上空のほうでは、地上の漫才とは無縁の火力同士の激突で無数の火花が散っていた。

セシリアの二挺レーザーハンドガン『スターダスト』が、スピアーのIS『ヘビーアームズ』の両肩から放たれたホーミングミサイルを全弾撃墜してみせた。

敵の攻撃を凌いだセシリアは、返す手でブルーティアーズを射出しながらIS内部のサポートOSに呼びかける。

「ハロ！」

『シールドビットテンカイ、シールドビットテンカイ』

ブルーティアーズからパージされたシールドビットとBTが不規則な軌道を描きながらスピアーに迫り、獣の牙のようにレーザーを撃ち込む。その攻撃からスラスターを全開にして逃げ惑うスピアーであつたが、元々が高火力砲撃型のISであるため、すぐさま追いつかれしماう。

「チツ！、うつとしいハエみたいにつ！」

左腕に装備されたビームガトリングが火を噴くが、ビットのスピードは彼女の思っている以上に速く、軌道も複雑で元来大雑把な性格の彼女では捕らえきれるものではない。一撃もかすりもしない状況に業を煮やしたスピアーは、犬歯を剥き出しにしてセシリアに狙いを定める。

「このうつとしいビットごと、消えてなくなれっ！」

「！！？」

左腕のガトリングと両肩のホーミングミサイルだけではなく、両膝からはマイクロミサイルを、胸部からは装甲を展開してガトリング砲を一斉発射するスピアー。その圧倒的な火力に背筋を凍らせるセシリアであつたが、立ち止まっているわけにはいかない。

すぐさまビットを呼び戻し、BTのレーザーとハンドガンとでミサイルを撃墜しにかかる。

「（数が多すぎるっ！……………全弾は…撃ち落せない！）」

全弾撃墜を諦めたセシリアは、高速で回避運動を取りながら追尾してくるミサイルを撃ち落していく。

「ミサイルは撃ち落せても、コイツはどうする気だ！」

だが、そんな彼女にガトリングの追い討ちをかけるスピアー。間近にビームの嵐が迫り冷や汗をかくが、ハロが気を利かせてシールドビットを集結させて、大型のシールドを形成して受け止めてみせる。

「ナイスサポートですわハロ！」

『セシリア、ウエー！、セシリア、ウエー！』

喜びも束の間、ハロの警告を聞いたセシリアがすぐさま見上げた瞬間、ミサイルの撃墜が作り上げた爆煙を突き抜けて、踊り来る白銀の刃が現れる。リユーリユクのIS『サンドロック』のヒートシュテルであつた。

反射的に両手に持ったスターダストをクロスさせて、セシリアは巨大な曲刀を受け止める。

「くっ！」

「そのまま落ちてくださいねっ！」

激しい火花が散る中、若干気弱な発言をしているがセシリアの手に伝わってくる相手ISのパワーは尋常ではない………ジリジリと押されるセシリアはシールドビットでリユーリユクを撃ち落そうとする。

「どさ紛れでアタシの相棒撃墜しようとしてんじゃないよ！」

「きゃああああっ！」

だがその狙いをスピアーは読んでおり、動きが止まったセシリアに一点集中のガトリングを立て続けに撃ち込むことによって狙いを阻止され、しかもあまりのその威力に9枚あったシールドビットのうちの3枚が破壊されてしまう。そしてスラスターの勢いを強めたりユーリユクのパワーに弾き飛ばされるセシリア。

空中で錐揉み状態になるが、なんとか体勢を立て直し、視線を二人に向けるセシリアであったが、内心この状況に焦りを覚えていた。

「（流石に二対一はいただけませんわね……………）」

火力重視の遠距離型と重装甲の近距離型という極めて相性のいい二機の連携に苦戦を隠せないセシリアは、とりあえず一機に集中して連携を分断することにする。

「ハロっ！、シールドビット・アサルトモードっ！」

『リョウカイ！シールドビット・アサルトモードッ！』

四機のシールドビットが連結し、大型のビーム砲台にその姿を変え、手持ちのスターダストと共にその照準をスピアーへと向けた。まずは足の遅い火砲から仕留める寸法である。

「（あの銀色の方は遠距離武装を持つてはいませんでした。ならば先に火力のほうから潰して、近距離型には中距離の射撃戦で仕留める。これが現状で一番の良策のはず！）」

「アタシがご指名かい！？、ならやってやるよっ！」

敵のスピアーのほうも、そんなセシリアの目論見にあえて乗る形でガトリングを向けた。目が合ったその瞬間、引き金を引く両者。

「勝ったっ！」

セシリアは信じて疑わなかった。一撃の重さと弾速ならばこちらのほうが上だと……今までの撃ち合いで確信があったのだ。だが、その思惑も思わぬ伏兵によって防がれてしまう。

「もう~~~~っ！」

「邪魔すんな、リユーリユク！」

「そんなこと言っただけでほっとけないよー！！」

「！！？」

同時に撃ち合った瞬間、相方を守るために割って入ったリユーリユクのシールドが、アサルトモードのビームとスターダストのレーザーの両方を受け止めてしまったのだ。

足が遅いと思い込んでいたセシリアにしてみれば、まさかこれほどの瞬発力を敵が有しているなんて思っておらず、これが手痛い誤算になってしまう。

『セシリア！ビット、エネルギーギレ！エネルギーギレッ！』

「えええっ！？」

『チャージ！、チャージ！』

ついにビットのエネルギーギレ、アサルトモードを強制解除してブルーティアーズにドッキングするシールドビット達。これはかなりマズい。再チャージに要する時間は少なくとも数分かかってしまうのだから……。

「どうやらビットのエネルギーギレが切れたみたいですね……………スピア
ー！！」

「いちいち言われなくてもわかってんよっ!!」

再びガトリングの猛威がセシリアに襲い掛かる、しかも今度はシールドビットが使えず、純粹に回避機動
しか手がない。

なんとかスラスターを全開にして敵の射線から外れようとするが、それも間に合わず、ビームの嵐にセシリアの左足が穿たれる。

「きゃあああっ!!」

絶対防御が発動し、シールドエネルギーが持っていられる……しかし
かも衝撃で装甲が吹き飛び、バランスが大きく崩れた。そこに更に
リユーリユクが追撃のヒートシュテルを振りかぶって叩きつけてき
た。

「くっ!!」

「一本では防ぎきれませんよ!!」

「あぐっ!!」

スターダスト一挺で二本のシュテルを受け止めようとしたが、勢い
を殺すことは到底できず、スラスターごと右肩の装甲が深く斬り咲
かれた。更に減ったシールドエネルギーがレッドゾーンに突入し、
ハイパーセンサーが激しい警告を鳴らす、どうも様子がおかしい
……… バランスを崩したまま立て直すことをしていない。

そう……… 今の衝撃で、セシリアの意識は遠退き、気絶した状態で
地面に向かって墜落しているのだ。

そんな仲間の危機にさらされる姿を見た一夏の脳裏が一瞬で焼き切
れたのは、至極当然といえる。

「セシリアアアアアッ！！！」

「一夏っ！！？」

シャルの静止を無視し、雄叫びを上げながらスラスターを全開にして、一夏はセシリアを助けよう飛び立つが、それを黙って見過ごすフリーゲルではない。

すぐさま一夏の狙いに気がつき、彼の進路を塞ぐ様に立ちふさがる。

「どけっ！」

「退く分けないじゃない。敵が一人いなくなってくれんだから、通してやる理由はないわ」

「うるせえええっ！」

頭に血が上った状態で雪片を振りかぶり斬りかかる一夏であったが、その攻撃をいとも容易く弾き返すフリーゲル。

「この程度のISを欲しがるなんて、『アイツ等』は何考えてんだろ？、まあ私にはどうだっていいわ………とりあえず、親方様のために、仲良くあの世に行ってなさいよ！！」

大きく振りかぶり、ビームシザースを一夏に向かって振りぬくフリーゲル。

「一夏っ！」

「ここは通さないのだ！、そしてこれはさっきのお返しなのだ！！」

シャルが助けに入ろうとするが、それをバナナを食べ終えたファルゴーレがタックルをして阻止してしまう。

「一夏っ！」

シャルの悲痛な声も、今の彼には届かない……………一夏の目には自分に向けられたビームシザースすら入ってはいない。

今の一夏には、気を失って地面に向かって堕ちていくセシリアしか入っていないのだ。

「（やめろっ！、邪魔すんな！、このままじゃセシリアが死んじまう！）」

怒りで沸騰した思考に、自身の心の声が響く。

「（ちくしょおおおー！！、俺は結局見てるだけか！？、見てるだけなのか！！）」

何もできない苛立ちと、助けに入ることができない無力さが一夏に襲い掛かる。

―お前には我武者羅さが足りないんだよ―

こんな時に、『彼』の心の声が自分に響くのは、きっとそれが真実だから……………自分がもっと必死なら、もっと強ければ、もっと上手くISを使いこなせていれば…………

―俺に関わるすべての人を！、その人たちを傷つけるものからだ―

自分が『彼』に言った言葉だ。守りたい。自分に関わる全ての人を守りたい……………そのために強くありたいのに……………強くあり続けたい

「見ればわかる……だが、これは……」

真耶の報告にも動じず、モニターを見つめる千冬の眉間に皺が寄る。通常、600で固定されているシールドエネルギーの数値が、現行ですでに3000を更新している。しかもその数値の上昇はリアルタイムで加速的に増加しているのだ。

「……………一夏……お前……」

同じようにモニターを食い入るように見ていた篤が、思わず吐息を漏らすように一夏の名を口にする……………モニターに映っている一夏の姿が、あまりに美しく思えたからだ。

第四アリーナを埋め尽くすほどのエネルギーを発生させた白式を駆る一夏は、すぐさまエネルギーの『余波』だけで吹き飛んだフリーゲルに目もくれず、落ちているセシリアに向かってスラスターを全開にして助けに入る。

スラスターから限界を超える光の余波を生み出しながら、彼の意識は更なるスピードを白式に求める。

「もっと速く、もっと速くだ!!」

その要求に応えるように、白式はその最高速を更新させ続ける……………それはあたかもブースト系列のテクニクである『イクシヨンスラスト瞬時加速』を使っているかのような、弾丸と化した一夏が一直線にセシリアに向かって飛んでいく。

「てめえ！、いつたい何なんだよ！！」

だがそこに上空からスピアーの苛烈な砲撃が放たれ、加速状態の一夏に襲い掛かってくる。

「（今止まったら、間に合わなくなる！）」

急停止してはセシリア救出に致命的なロスになる、だが弾幕に直撃してもそれは同じこと。一瞬の判断を迫られた一夏であったが、その時通信越しに千冬の声が聞こえてくる。

『特訓を思い出せ！、考えるな！！、動けえっ！』
「！！！？」

その声を聴いた瞬間、彼は考えるよりも先に体を動かした。軸をずらさない様にしつつ、瞬時に左右に高速で移行する体重移動シフトウェイトを行い、弾幕を掻い潜っていく。

それは、図らずとも千冬達が考えていた特訓の完成系。不器用な一夏が間合いを詰めながら敵の攻撃を回避するための手段。と同時に自分フーストテクニクが有利な位置に移動するための方法である攻防一致の加速技術。

「あれはっ！」
↑
「『自由軌道加速』！！」

残像ができるほどの高速でのランダム機動により、的を絞らせないようにつつ敵との間合いを詰める上級加速技術を披露する一夏に驚きの声をあげるシャルと真耶。彼女たちにしても、国家代表選手でも使い手が極僅かにしかないような上級技術を、一月足らずの素人が披露したことに驚きが隠せずにあった。

「（ツインドライブの恩恵が八割方だとはいえ……小僧、お前もつかつかしていると直ぐに私の弟に追い抜かれるぞ？）」

千冬にしても、完成まであと一ヶ月はかかると思っていた技をいきなり実戦で披露する弟の才能に驚きが隠せずにいた……そして何よりも自分と同じように考えていたヨウタが、この話を聞いたときにどんな顔をしてくれるのかとほくそ微笑む。

敵の攻撃を一瞬で潜り抜けた一夏が、地面ぎりぎりの寸での所でセシリアを抱きかかえる。

「おい！、セシリアっ！」

「……………一……夏さん？」

「よかった、気がついたのか！！」

抱きかかえた衝撃で目を覚ましたセシリアが見たのは、本気で自分を心配している一夏の顔であつた。その表情を見た瞬間、なんだか胸の中の何かがキュンツとして、思わず顔を背けるセシリア。

セシリアのそんな僅かな変化に戸惑いながら彼女を地面に降ろすと、上空にいるスピアーに向かって突撃を仕掛ける。

「この野郎！」

スピアーも一夏に向かって攻撃を仕掛けるが、掠ることすらできない。先ほどまでとはケタ違いの速度と、幾重もの残像を生み出しながらの不規則な動きに、ハイパーセンサーを持っても捉えることができないのだ。

「チッ!!」

ガトリングだけでは足りない。残弾を全て使い切る覚悟でミサイルを含めた全砲門の一斉正射を仕掛けるスピアー。その挑戦を受けるように、一夏は白式に秘められた切り札を使用することを決断する。

「白式!、零落白夜!!」

雪片が変形、練習時を遙かに上回る光量のビームの刃を形成し、一夏はその刃を横薙ぎに振るう。

――閃――

たったそれだけで、襲い掛かってきたビームとミサイルを斬り捨てる一夏。あまりのその圧倒的な威力に目を見開いて固まるスピアーを助けに入るように、一夏の後方から迫るISがいた。

「なに呆けてんのよ!、バカスピアー!!」

「フリーゲルっ!」

光の放流に吹き飛んでいたフリーゲルが復帰し、彼の背後から斬り捨てようと迫る。それに気がついた一夏が背後のフリーゲルに向かつて、刃を振るった。激突する雪片とビームシザースの刃……
だが、フリーゲルは知らなかった。白式に備わった単一仕様能力が^{キル}どれほど理不尽なものかを、そしてそれがツインドライブ搭載機が振るうことによって、加速的に威力が激増することを……

結果、刃と刃が激突した瞬間、一瞬でシザースは柄ごと斬り裂かれてしまい、それだけではなく先ほどのセシリアの分を返すかのよう
に、フリーゲルの右肩の装甲を吹き飛ばし、一気に絶対防御を発

動させてしまう。

「フリーゲルツ！」

仲間の思わぬ姿に我を忘れたのか、スピアーが彼女を受け止めようとフリーゲルに迫る。だが、一夏は自分に近接戦闘を仕掛けに来たのかと勘違いし、雪片の刃を彼女に突きたてようと構えた。

「スピアー！！、危ない！！」

スピアーを援護するために、リユーリクがシールドを構えながら一夏に突進する。シールドで一夏を弾こうとするリユーリクであったが、完全に機能が作動しだした白式の性能を思い知らされることになる。

「なっ！」

突進に気がつき、目標をスピアーからリユーリクに変更した一夏の突きが離れた。

ビームではなく実体盾である以上、簡単に貫通することはないと思っていた一夏であったが、その威力は彼の予測を上回り、サンドロツクのシールドを紙切れのように貫き、リユーリクの左脇腹の装甲ごと彼女の絶対防御を発動させてしまう。

白式のその超絶的な性能に、一夏は強い戸惑いを覚えた……………これはいったいなんなんだろうか？、先程までとは全然違う、圧倒的な力の解放に一夏の感覚が追いつかず、雪片を握る自分の手を見つめる。

「リユーリクッ！」

「リュっちゃんは私がつ！」

意識を失ったフリーユージェルとリュウリユクをそれぞれ抱きとめたスピアーとフォルゴレ。だが、状況はいよいよ彼女たちには絶望的になってしまっている。

仲間二名は戦闘不能で意識なし、スピアーはすでに残弾が尽き、無事なのはファルゴレのみである。

「ちくしょうーっ！っ！、よくもフリーユージェルとリュウリユクをつー！」

尽きたガトリングの砲口を、それでも怒りに任せながら一夏に向けるスピアーであったが、そんな彼女を静止するフォルゴレ。

「ダメッ！、スピちゃん！、今は逃げるのー！」

「ふざけるなっ！、敵討ちもせずに帰れるかっ！ー！？」

「ココは敵討ちよりも皆の安全が最優先だよっ！」

先程までのボケた感じはなりを潜め、代わりに仲間内では一番最年長の少女の顔つきに変わっている。

「クッ！………だが……」

尚も洩るスピアーであったが、一夏だけではなく、無傷のシャルが代わりに銃口を向けながら、彼女たちの行く手を遮ってしまうのであった。

「これだけのことをして、黙って帰れると本気で思ってるの？」

「チッ！」

「ムッ………」

「オートマトンの制圧も粗方完了したそうだよ。まもなくIS学園の全戦力がここに集合する。悪いけど君達の負けだ……おとなしく投降してほしい」

シャルの冷静かつ、本気の警告に背筋が凍りつくスピーアールとファルゴーレ。そんな二人を一夏は先程までとは違った印象で見つめていた。

仲間のことを本気で心配して、怒ったり、喧嘩したり、敵を討とうとしたり、二人を助けようとするその姿に、すでに一夏は敵意を向けられなくなっているのだ。

「なあ、シャル……できれば……」

「流石にこれだけのことをして、無かった事にはできないよ一夏……！！？」

背筋が凍りつくような何かが、シャルを背後から射抜く。

「シャル……！！？」

遅れて一夏も感じ取った……『何か』に見られていると。

「な……な……」

地上にいたセシリアは、その正体は何なのかを肉眼で確認していた……だが、それは上空の二人よりも遥かに深刻なものであった。視界に入れただけで、息も上手くできなくなるような圧倒的な重圧な^{プレッシャー}ど、セシリアは生まれてこの方感じたことはないからである。

上空の一夏とシャルが、ゆっくりと振り帰り、アリーナの巨大なディスプレイの上を凝視する。

「あれは……………」

「親方様っ！！！！」

スピアーが驚き、ファルゴーレが嬉しそうに叫ぶ。

「なっ！！」

「お、織斑先生？」

その様子をモニターで見つめていた真耶は、隣にいた千冬の驚愕の表情に驚いていた。

彼女達が見つめる先に、夕日を背に獰猛で残忍な笑みを浮かべる女性……………

腰まで届くプラチナの髪の毛、焼けた肌色、真紅の眼光、黒いジャケットとブーツ、二本の刀……………そして、隠すことなく見せ付けるような額から臍の辺りまでの斬り傷。

『ダイノガイスト 暴龍帝』の異名を持つ、アレキサンドラ・リキユールはその圧倒的な存在感で、IS学園に恐怖を撒き散らしにきたのだった。

謎のIS集団〜後編〜（後書き）

というわけで、親方様登場ですw

夕日をバックに獰猛な笑みとか、個人的にはたまりません。そして親方様の通り名から、元ネタがわかる人は中々の通であるとか、フウ太が賞賛の言葉をお送りさせていただきます。

ちなみに現在で判明している登場キャラ強さランキング（個人）

諸事情でヨウタと千冬と親方様は省きます。

一夏（TD発動時）>セシリア>フリーユージェル^{いつもの}スピア>シャル
>フォルゴレ>リユールイク>箒>のほほん>一夏

おい、主人公……お前の明日はどっちにあるんだ（泣

恐れと嘆き（前書き）

お盆シーズンに最低3話は進めたかったんですが、現実とはままならないものですな・・・。

ではでは、お楽しみください。

恐れと嘆き

アリーナの巨体ディスプレイの上に仁王立ちした女を目にした瞬間、一夏とシャルとセシリアは呼吸も出来ないほどの強い圧迫感を覚える。

「（な、なんなのこの女！？………見てるだけで、気が…）」

背筋から嫌な汗が噴き出て、今すぐこの場所から離れたい気持ちでいっぱいになってしまふシャルを、アレキサンドラ・リキユールは静かに見た。

目が合う。ただそれだけなのに、シャルの心の中は絶望でいっぱいになる。

「……………ほう……………ブレイブシリーズか…しかも見たこともない最新型…」

「……？、貴方は……………」

「貴様……………噂のミスターネームレス（正体不明の男）か？」

何の話を聞かれているのかわからず、一瞬呆然となるシャルであったが、聞いてきたリキユール自身が首を横に振ってそれを否定するのであった。

「噂通りならば、現役のどの国家代表をも凌ぐ実力者と言われているが……お前にはそこまでの力はない」

「ただの候補生だというのは事実だけど、初対面の人間に失礼じゃないかな？」

放れた無礼とも取れる言葉に僅かばかりムツとなりながらも、牽制と警告のために銃口を向けかけるシャルであつたが、リキュールはそんなシャルに向かって手を差し出し、待ったのポーズをする。

「……なんのつもりですか？、今さら怖気ついても……」

「自惚れるな」

その一言……たったその一言で、身を感じていたプレッシャーは倍に跳ね上がり、無言でリキュールを見ていた一夏共々、背中にぐっしりと嫌な汗が流れ出、呼吸がさらにしくくなってしまう。

「お前達のために待ったをかけたただけ………私に銃口を向けるということは『即、殺し合おう』という意味表示だ」

「………」

「分かりづらいか？、もっと分かりやすく言えば、銃口を向けた瞬間お前は即死している……という意味だ。今度は理解できたか、『小娘』？」

思わぬ発言にシャルは呆けていた思考を再始動させ、猛然と今の発言を否定しにかかる。

「違う！、僕は『男』だ！！」

「そうなのか？………ならば済まなかったな『小娘』」
「だから違う！！」

必死になつて否定するシャルを不思議なものを見る目で見つめてきた。だが彼女はもうすでにシャルには興味がなく名たつと言わんばかりに、今度はその視線を自分の部下たちへと向ける。
リキユールの視線が向けられた瞬間。スピアーとファルゴレはこの世の終わりに直面したかのような絶望感を味わう。

「（終わった……何もかも終わった……）」

「（きつと帰ったら皆で仲良く地獄のエターナルマラソンだよ）」

「スピアー、ファルゴレ……後、フリーゲルとリユリユク」
「「！！！？」」

名前を呼ばれた瞬間、先ほどまで気絶していたはずの二人の肩がびくりと動くのをスピアーは見逃さなかった。

「てめえ、起きてんのかフリーゲルっ！」

「シィーッ！大声出すな！！」

「なにちゃっかり気失ったフリして、一人逃げ出そうとしてんだよ！！」

「リユーちゃんも起きてるよ〜」

「黙って……お願いだから今だけは！」

「フッ……私は嬉しいのだぞ、お前ら？」

「「「へっ？」」「」「」」

マヌケな声を上げ、四人が一斉に親方に向かって振り返る。以外に機嫌がいいのか？、それともお仕置きなし？、ラッキー！、ついに私の愛が親方様に通じたあ！、とか考えて表情が緩む四人であったが……それがいかに都合のよかった妄想であつたか思いしる台詞を聞き、背筋と表情が凍りつく。

「私に対して報告を怠り、尚且つ勝手に独断専行をした上に、この

無様な負けっぷり……つくづく上司思いの部下を持って、私は幸せだな……そうは思わないか、お・ま・え・ら？」
「……（ひいっ！）」「……」

怒っている、怒っている。親方様は大変にお怒りじゃ……絶望的な状況を理解して、全身から冷や汗を流す四人であつたが、ふと肝心の親方様の視線が明後日の方向に向いていることに気がついた。その表情が歓喜に震えていることにも……。

「……まさかお前が生きていたとはな……」

一夏達も遅れて気がつく。アリーナの観客席の入り口から日本刀を携えた千冬が現れたことに。

「あの程度で殺されるほど、私のお前への想いは脆弱でも貧弱でもないぞ？」

「想い？、虫唾が走るな……逆恨みもいい所だ！！」

抜刀して切っ先をリキュールの方へ向ける千冬に対して、不敵な笑みを浮かべたまま目元を手で覆うリキュール。

「逆恨み？、私が敗北の理由を勝者のせいにするような輩だと？」

千冬は気が付いていない。今、リキュールを突き動かしているものは、そんな生易しい感情ではないということに。

「クツクツクツ……まったく、お前はやはり私をいちいち興奮させてくれるな？」

「なに？」

指の隙間から僅かに眼光が漏れる。

「今のお前は『初夜において、夫婦の寝室で行われる行為が何なのかまるで理解していない純真無垢な花嫁』の様だぞ？」

「！！？、貴様ッ！」

思わぬ表現に、珍しく顔を赤らめて激高する千冬であったが、次の瞬間、リキュールが突如モニターの上から観客席にいる千冬目に向けて突撃する。十数メートルはあるモニターからスタンドに向かつて着地するというだけでも人間離れしている処に、更に疾風のような速度でスタンドを走るリキュール。

「千冬姉ええっ！！！」

我に返った一夏が悲鳴と共に駆けつけようとするが、その時、一夏の白式に異変が生じる。

「！！？、白式？」

先ほどまで圧倒的な力を放っていた機体から光が一気に失われ、最大値で6000まで伸びていたシールドエネルギーのメーターが一気に一桁のレッドゾーンに突入したのだ。

それがツインドライブが停止してしまった影響であるとし、一夏が認識した時、すでにリキュールは千冬の目前まで迫っていた。

「織斑、千冬っ！」

「チイイッ！！！」

両手に持たれた刀を左右に高速で振るい、鞘を千冬目掛けて投擲す

るリキュール。

「ふんっ！」

だが、その誇張抜きにライフル弾並に加速された二本の鋼鉄製の鞘を、千冬は居合い抜き一閃で斬り払う。そこへ速度を全く緩めずに突進してきたリキュールが右手の刀で千冬を突き刺そうと水平にした刀で突きを見舞った。

―千冬の残像を貫くりキュール―

「!?!」

「はあああああっ!!」

残像を残すほどのスピードで回転しながら側面に回り込んだ千冬が、峰打ちで側頭部を狙い、その刃を振り下ろす。

完全に不意を突いたと確信していた千冬であったが、直後、甲高い金属音でそれが間違いであったと気がつくのであった。

「おまえっ!?!」

「フッ!」

余ったもう一本の刀で千冬の斬撃を受け止めたリキュールは、その場で踏み止まると同時に突進の威力をそのまま上乘せした廻し蹴りで、千冬を蹴り飛ばす。逆に不意を打たれた格好になった千冬であったが、ギリギリガードが間に合い、受け止めると同時にその場を蹴って衝撃を逃がそうとするが、ただ一つ想定外の事態が起こる。

「（この威力は……!!）」

あまりの威力に衝撃を受け流しきれず、数メートル後ろの壁に叩きつけられたのであった。肺の中の空気が外に一気に排出させられ、意識が持つて行かれそうになるのを必死に堪える千冬。

「いいぞ、失神なんぞされたら興醒めだ」

「リキュ・！」

いつの間にか眼前まで移動していたリキュールに向かって刃を振り抜こうとする千冬。だが、

「だが遅いつ！」

逆に刃を振り抜かれ、甲高い音と共に刀が半ばから砕け散る。振りぬいた刀を持ち替え、斬り上げる構えをみせるリキュール。

「止めだああつ！」

「!!？」

「千冬姉ええええええええええつ！！」

リキュールの宣告と一夏の絶叫がアリーナに響き渡り……その刃が振り上げられた。

一瞬の静寂が訪れ、誰もが最悪の結果を想像した……鮮血が吹き出し、千冬が地に倒れ伏せる……ハズだったのだが、

「……物足りないな……」

千冬が自分の服だけが切り裂かれていることに気がついたとき、リキュールはすかさず左の刀の鰐元を喉に、右の刀を利き手ごと胴に

押し付け、不審な動きをしようものなら即座に斬り裂ける状態にするのであった。

「貴様……………手元に専用機がないな？」

「……………それがどうした？」

服だけではなく、見れば下着ごと斬り裂かれ、自分の胸元が見えそうになっている状態には流石の千冬も羞恥が隠せず、顔を赤くしてしまっている。だが、そんな状態でも強気な態度が消えていないことに、リキュールは喜びを感じていた。

「ISも無しで私に相對しようなど、自惚れからきた自信か？、それとも……………」

「ひゃうつー!!」

リキュールが千冬の肌を『愛撫』するように、首筋から胸元に向かって舌で舐め下ろす……………まるで長年会えなかった『恋人』を愛おしむように情熱的な表情で。

「私にこうやって愛でられることを望んでいるのか？」

「誰がキサマなんぞにつー!!」

「……………フツ……………お前は何も変わっていない」

リキュールの眼は先ほどまでの獰猛さよりも、むしろ官能的な情熱さがこもり、更に強く唇を千冬の肌に押し付ける。

「私が男なら間違いなく、今この場で、いきり立った股ぐらのものでお前を貫いているぞ？」

「……………この変態が……………」

「傷つくな……………私はこんなにもお前を想っているというのに……………」

「あうっ！」

「（このまま連れて帰って、一晚中喘がせてもいいかもしれんな）」

普段の千冬では絶対に聞けないであろう喘ぎ声を上げていることに、リキュールの暗い興奮がより一層に燃えあがる。

が、そこへ、残り少ないシールドエネルギーの状態であることを忘れた一夏が突っ込んでくる。

「千冬姉ええええええっ！！」

「！！！」

雪片をリキュールの首元に押し付けた一夏は、彼女にこの場を退くよう警告を発した。

「千冬姉から離れる！、そして大人しく投降……」

ISを纏っていないリキュール相手なら、今の状態でも十分に対処できるはず。それは普通ならば思い込みでも何でもなく、世界の常識といえることであつた。事実、シャルもセシリアも敵の首謀者を捕まえて王手であると思ひ込んでいた。

だが、一夏達はある誤解をしていた。

ISを纏っていないリキュールに一夏が迫っていたにも関わらず、なぜフリーゲル達は助ける素振りも見せなかったのかということに。それは『リキュールを助ける必要がない』という信頼と事実から成り立っているということに気がついていなかったのだ。

「……………小僧」

「！！！！！！？」

リキュールが言葉を発した瞬間、一夏の全身の毛孔から冷や汗が噴き出て、全身の筋肉が一瞬で硬直する。

そして一拍遅れて気がつく、それがリキュールの放った本気の『殺意』であるということに。

「私を止めたいのであれば、そんな眠い脅しを言う前に、とっとと殺しておくべきだぞ？」

「な……に……？」

「それができないのであれば………邪魔をするな」

――野生の肉食獣などではない。伝説の龍に似た獰猛で圧倒的な凶暴さを秘めた眼――

振り返ったリキュールと眼が合った瞬間、一夏の首が跳ね飛ばされるイメージが頭をよぎる。

「……!?!?」

息ができない、体が動かない………逃げることもできずに立ち竦む一夏。

対してリキュールは、本来なら眼に入れる必要もない「雑魚」に、せっかくの再会を邪魔されて、大層ご立腹であった。すぐさま首を跳ね飛ばしてやろうとしたが、ふと、その手が止まった。

よく見れば、その姿はどことなし、かつての『織斑千冬』を彷彿とさせる純白のISを身に纏う少年である。

そして記憶の奥底にあった、『仕事』の内容がここにきてようやく頭の中に蘇り、大きく溜息が出てしまう。

「（せっかくの楽しみだったというのに……残念だ）」

己の世知辛い「立場」というものを思い出したりキュールは、至極残念そうに刀を千冬から引く。

束縛から解放された千冬は、真っ先にその場を蹴り、完全に棒立ちになっている弟を守るように立ちふさがった。

「本来なら、このままお前と『あの日』の続きを楽しみたいところなのだがな、仕方がない……私もこの数年で色々忙しい身分になってしまったのだよ」

ゆっくりと二人の横を通り過ぎるリキュール。

「逃げるのか!？」

「……見逃してもらおう、間違いだろ？」

あくまで強気な発言を崩さない千冬であったが、現状はリキュールの言うことが正しい。彼女が本気になれば、この学園の、今の自分も含めた総てを皆殺しにすることは可能なのだ。

「少々寄り道をしてしまったが、仕事の総量は見えた……帰るぞ、フリーユゲル、スパアー、リユーリユク、フォルゴレ」

自分の元に降りてきたスパアーに乗っかると、そのまま上昇し、何事もなかったかのように学園を去ろうとする。

そのあまりに傍若無人な態度に腹を立てたシャルとセシリアが、その銃口を彼女たちへと向けるのであった。

「そんな勝手な理屈！」

「通ると思っているのですか！！？」

「やめろおっ！！」

二人を大声で制止する千冬。

「止せ……………手を出すな」

「織斑先生！？」

「ですが……………」

「手を出すなと言っている！」

ここまで感情を出した千冬を見たことがない二人は、その尋常ではない表情に思わず硬直してしまった。

「良い判断だ……………」

そんな千冬をわざと逆撫するように褒めるリキュール。

「キサマっ！」

「あと、できればうっとおしい追撃も無しにしてもらいたい……………」

欲求不満気味で思わず『丁重』に相手をしてしまいそうだからな……」

「……………」

沈黙を了承と判断したりリキュールは、悔しがる千冬にせめてもの詫びのつもりで、ある情報を与える。

「そう怖い顔をするな、お詫びの印に今回の目的であるお前の弟とそのIS……………しばらく預けておいてやる」

「！……？」

「大層ご執心だったが、なんてことはない。肝心な時に動かないシステム。そしてふるえたまま守られるだけの操縦者………依頼主には『視界に入れる価値すらないので置いてきた』と言っておこう………」

「なっ！………お、俺は………」

「姉に感謝しろよ小僧。本来なら私の邪魔をする者は………
…皆殺しにするところだ」

未だ震えて動けない一夏を、心底見下すような表情で吐き捨てたりキョールは、そのまま四人を引き連れ、いつの間にか暗くなっていた夜空の向かって飛び立ち、瞬く間に溶け込んで消えてしまうのであった。

数時間後、事情聴取のために理事会に呼び出しを受けた千冬を除き、学生寮の食堂に集まった一夏達は遅めの夕食を取っていた。もつとも、その雰囲気はお通夜のような状態であったが。

「……………」

未だリキュールの放った殺意の呪縛から抜け出せず、表情を青ざめる一夏。

「……………」

なぜか俯いたまま、食事に手をつけようとしないうち。

「……………」

二人掛かりとはいえ、賊に後れをとり、不覚を取ったことにプライドが傷ついたセシリア。

「……………」

「……………」

そんな三人をどう慰めたらいいのか分からず、シャルとのほほんは困り果てていた。

もともとシャル自身も、学園から姿を消している陽太のことが気掛かりで本当は落ち込んでしまいたいところなのだが、この場にいる三人を放っておくわけにはいかないという気遣いもあり、できるだけ明るく振舞おうとしてはいるのだが…………

「みんな、思春期真つ盛り？」

「少し………… いや、大分そういうのとは違うと思うんだけど…………」

のほほんの勘違いに僅かな苛立ちと安堵を覚えるシャルは、また一つ溜息をつく。今日一日で色々なことが起こりすぎて、シャルも少しは整理をしたいぐらいなのだ。

「（謎のIS集団に、なんだか分からない凄い怖い人に……………」

ここにいない、自分の幼馴染。

「（ねえ、陽太……………君は今、どこにいるの？、なんでそばにいてくれないの？）」

自分の秘密を共有してくれるただ一人の理解者……………彼がそばにいないことが、いつそうシャルの心を締め付ける。

駄目だ。ふと考えると自分まで沈んでしまいそうになるのを、シャルは無理やり振り払うと、明るい笑顔を作り、三人に夕食を食べるように施す。

「ホラ、皆手が止まってるよ」

「シャル……………」

「色々あったから疲れてるのはわかるけど、今は食べないと……………ね？」

思い悩む一夏たちをなんとかしようシャルが笑顔で語りかけていたとき、ようやく緊急査問会から解放された千冬がスーツ姿で食堂に足を運んできた。

「千冬姉！！？」

「織斑先生だと何度言えば解る、バカ者」

いつもなら一夏に一撃加える所なのだが、千冬自身も気疲れしているのか覇気もなく、テーブルに重たい腰を下ろすだけに留める。

「織斑先生……………」

「安心しろ。特にお前たち生徒にどうのという話にはなっていない

……むしろ我々教職員の危機管理能力のやつかみを受けたただけだ。まあ、実際に情けない話ではあったと思うがな……」

『いつの時代も現場の苦労を上は知ろうともしない』と愚痴る千冬であったが、心配そうに見てくる弟と教え子達に、いつもの自信に溢れた笑顔で答えるのであった。

「安心しろ。次は問答無用で私達が責任を持ってあいづらを潰す。危険も今日までの話だ……」

「織斑先生……一つ質問をしてもよろしいですか？」

そこへ、セシリアが真剣な表情で千冬にある疑念をぶつける。

「なんだ、オルコット？」

「あのアレキサンドラ・リキュールという女……織斑先生と面識があったようですが……」

「友達というわけではない……今も昔も变りなく、歴然とした敵だ」

「結局、彼女達は何者なんですか？」

シャルもリキュール達の素生に興味を持つ。何よりブレイブシリーズのことを知っていたことも気掛かりだ。このISは今現在、白式を除けば世界最先端のISであり、自分と陽太の二人しか所有していないのだから。

「何者かと問われると答えづらいな……テロリスト……基本的にはその認識でいいだろう」

「いったい何処でお知り合いに……」

シャルが更に突っ込んだ質問をしようとした時、隣に座っていた一

夏が無言で立ち上がる。

「一夏……?」

「一夏?」

シャルと箒が怪訝な表情で一夏を見るが、彼は何も話さないまま、ほとんど手をつけてない食事を残して食堂を出て行こうと席を立ったのだ。

「どこに行くの一夏……?」

「……………訓練してくる」

「こんな時間から!?!」

驚きの声を上げるシャルを無視して、彼はトレーを持って歩き出す。いつもの明るい感じが完全に消え、どこか不穏な空気を醸し出す一夏の手を箒が掴む。だが、いつもの彼とは完全に分かれた今の一夏は、不安そうに見てくる箒と目も合わせず、その手を振り払うのであった。

「離せよっ!」

「一夏っ!?!」

驚くべき行動に固まる箒、そんな二人のやり取りを見ていた千冬が、厳しい表情で一夏に話しかける。

「織斑……………今日はもう遅い。訓練に熱心になったのはいいが、明日にしる」

「いやだ!」

「織む・」

「アイツはっ!?!、アイツはっ!?!」

突然、堰を切ったかのように一夏の激情は爆発する。

何事かと食堂にいた一同が彼を見つめる中、普段の彼からは考え付かないような追い詰められた表情で、一夏は話し出した。

「俺のことを虫けら同然みたいな眼で見やがった！、俺もふるえたままでも出来なかった！！、アイツの言う通りだ！！……………視界に入る価値すら今の俺にはない！」

「一夏……………」

「もう我慢できないんだ！！、俺だけ弱いのは、もう沢山だ！！！」
「違う！、一夏……………お前は……………」

筈が何かを言おうするが、そんな彼女の言葉を、彼は激昂しながら否定する。

「お前に何がわかる！！？」

「！！？」

「セシリアを助けられたのだって、白式の性能のおかげだ！、あいつ等と互角に戦えたのだって陽太の特訓のおかげだ！！、俺は何もしてねえーんだよ！！！」

「……………夏……………私は……………」

「そうだよ。俺なんかよりも陽太がいたら良かったんだ！、アイツなら四人まとめてぶっ飛ばせたハズだ！！、虫ケラみたいな眼で見られなかったはずだ！！！、俺なんかよりも陽太が……………」

「いい加減にしろっ！、一夏あつ！！！！！」

そこで千冬の怒声が食堂に響き渡り、その後、静寂が訪れ……………一夏が泣きそうにな顔をしたまま食堂を走って出てってしまう。
後に残されたのは、呆然となってしまうシャル達と、苦い物を嚙

み潰したような表情となっている千冬と……溢れる涙を拭うことすら忘れた筈の姿であった。

それから十数分後。

呆然となった筈を部屋まで送ったシャルは、相方がいない自室に戻ると、部屋の明かりもつけないままとりあえずパジャマ代わりのジヤージに着替えると、力尽きてベッドに寝転がる。

「（一夏……）」

あの後、走り去った一夏を千冬は『アイツも頭が冷えれば戻ってくるだろ』と言い、追いかけてようとしたシャル達を制止したのだ。

「……………もう……………今日はホント色々起こりすぎだよ」

ゴロンと寝返りを打ちながら頭を抱えるシャル。色々起こりすぎて、一人部屋の中においても余計に頭の中のもやもやは晴れずにいた。

「……………一夏は、陽太のことが羨ましかったのかな？」

実際に、シャルは生で戦っている陽太の姿というものを知らない、ゆえに陽太がどれほどの猛者なのか正直判り兼ねる部分があるのだが、シャルの眼から見れば、ISを稼働させて間無しの一夏の戦いぶりはむしろ凄いの一言である。自分ならまだ飛行の基礎訓練の

域も出ていないところで、彼は実戦を立派に戦い抜いているのだ。

「陽太……………なんでこんな時にいてくれないの……………!!」

頭のモヤモヤが最高潮に達し、八つ当たり気味に隣の陽太のベッドを睨みつけるシャルは、しばらく考え込むと、一足飛びで陽太のベッドに乗っかってしまう。

「帰ってきたら、キツ……………イお説教が待ってるんだからね。覚悟してよ、陽太？」

若干頬を赤らめながらシーツを被ると、枕を抱きしめたままようやく眠りのところにつくのであった。

「へくちいっ！」

『誰かが俺の噂をしている』、と鼻頭を掻きながら、手に持ったア

タツシユケースの中身を確認すると、いつもの不敵な笑みを浮かべながら、巨大な高層ビルの自動ドアを潜り、正面にいる受付嬢の元へ向かう。

「すみません、社長に会いたいんですが？」

ズバリ、物恐しせず^{ズバリ}に受付のカウンターに頬をつきながら、彼は余計な言い回しをせず、本題だけを告げる。だが、受付嬢にしてみれば、眼の前の『珍客』をどう扱ったらいいのか、正直対応に困ってしまう。

なぜなら、アタツシユケースをもった『男子学生』が、いきなり社長に会わせると言いだすのだ。

悪い冗談か性質の悪いいたずらか……とりあえず自分の手に余ると判断した女性は、少年の死角になっているカウンターの下に手を伸ばし、警備員を呼び出そうとする。

「…………俺は社長に会いたい。天下の『デュノア社』の受付嬢なんだから、相手を間違えるのは良くないよな？」

だが、少年はそんな受付嬢の考えを見抜き、笑顔で訂正を要求する。

「警備員じゃなくて、社長ね」

「あ、あの…………アポの方はお取りなのでしょうか？」

「取ってないね。なんせ思いつくまま来たし…………あ、素生が分からないから危なくて会わせられないってやつか、ゴメンゴメン」

あまり悪いと思っていない笑顔のまま、彼は笑顔で己の名と身分を告げる。

「篠ノ之束の使いで来た、火鳥陽太だ。少々お聞きしたいことがある。つて遠路はるばる日本からフランスに直接出向いてきた。さあ、社長に会わせてもらおうか？」

恐れと嘆き（後書き）

親方無双はしばらくお預けです（えっ？、地味に人外してるって？、
気のせい気のせい・・・）

誤解のないように言っておきますが、親方はノーマルです・・・多
分w

だけど、世界広しといえど、千冬姉ちゃんを「純真無垢な花嫁」呼
ばわり出来るのはきつと親方しかない！！

さてさて、主人公の一夏くん・・・親方からは虫ケラ呼ばわりされ
てカチンときたのか・・・彼の明日は更に迷走しそうです。

そしてもう一人の主人公は、皆が大変な時に何食わぬ顔でシャルの
実家に突貫！！

今回は、バトルがお休みの陽太VSデュノアです。

ではノシ

ライアーゲーム（前書き）

今回はIS学園襲撃事件と、ほぼ同時の時間軸で行われていたことです。

もっとも、本編には全然そのことが載ってません。

では、お楽しみください。

ライアーゲーム

いきなりデュノア社に乗り込んできた我らが陽太!!

受付嬢に『社長を出せ』と上から目線で要求し、不敵な笑みを浮かべてこれ見よがしに余裕な態度を見せつけたのだが・・・果たして、彼を待つ次なる展開とは!?

「……………って、現実逃避のセリフはともかくとして……………参ったな、こりゃ…」

時々ピクピクと痙攣しながら気絶して床に転がっている十数名の屈強な警備員の上に乗っかりながら陽太がぼやいてみせる。ご丁寧に数名単位で円陣を組んで襲い掛かってきてくれるものだから、陽太も張り切って骨の二、三本をへし折ってしまい、見た目は完全に陽太が襲撃をかけてきたテロリスト同然であった。

「デュノアは変わった会社だな。社長を出せというと、グラサンかけた190以上の『社長サン』が集団で出迎えてくれるとは……………てか、こんなに社長ばかりで大丈夫か、この会社?」

隣で顔面蒼白になっている受付嬢に世間話をするかのようなフレン

ドリーな調子で話かける陽太。その時、また一人、警備員がトンフアー片手に襲い掛かってくる。

流石に拳銃の発砲は許可されていないのか、未だ銃を撃ってくる警備員がいないが、このままだと拳銃どころかマシンガンやロケットランチャーまで登場しそうな勢いである。なんせ軍事産業だし……と、心の中で0.1秒の思考を終了させた陽太は、首を捻り、最小限の動きで警備員の攻撃を首の皮一枚で頭の上に空振りさせると打ち終わりの隙を突いて手を捻り上げると、てこの原理を応用して肘を砕き、本来は稼動しない角度まで腕を曲げて声にならない悲鳴をあげている警備員を蹴り飛ばす。

「13人目の社長さんK.O.！、さて……まだ続けんの？」

のた打ち回る社長（13人目）の顔を足で踏みつけながら、物凄く怖い笑顔で受付嬢に問いかける陽太。もう完全に悪役である。

だが、凍りついた場を動かすように、一つの拍手がロビーに響き渡る。

「……素晴らしい。流石はプロフェッサー篠ノ之専属のIS操縦者ですね」

並み居る屈強な警備員達を押しつけて現れたのは、金髪のショートヘアをした美人秘書……ではなく、細みな長身と、高級そうな白いスーツをきっちり着こなし、秘書の女性と同じ髪の色をした髪をオールバックにし眼鏡をかけた柔和な笑顔をした青年であった。

「……14人目の社長さんは随分とひ弱な優男みたいだな。しかもとても『15の娘』がいる外見じゃねえーし、な？」

「!!」

拍手が一瞬だけ鳴り止み、場の空気が凍りつく。陽太と青年との間に隠すことができない何かが生まれたかのように……。

「……………残念ですが、僕は社長ではありません。社長は今所用で国外に視察に行つてまして、その代理として今本社を預かっているジョセフ・デュノアといひます。是非ともお見知りおきを、ミスター火鳥」

「副社長!!」

「（副社長？）」

警備員の一人がジョセフと名乗つた人物煮詰めよる中、それを胡散臭そうに見つめる陽太。

好青年かつ人当たりの良さそうな雰囲気醸し出してはいるが、どうにも自分の直感に引っかかるものがある……………学園に来る前まで、真つ当な人間との付き合いをしたことがない↑（千冬が聞いたら間違ひなく殴られる）陽太は警戒心を抱かずにはいられないのだ。

「君達、もう結構。後は私が引き受けるから通常業務に戻りたまえ」
「し、しかし……………」

なお食い下がろうとする部下の警備員であつたが、一瞬だけ目が合うとすぐさま敬礼をし、気絶しているほかの警備員も含めてロビーから立ち去つてしまう。

「いやいや、本当にすまないことをしてしまつた。貴方だと解つていればすぐさま私のオフィスまで通したのに……………それに先に連絡をいただければ部下を迎えにも寄越しましたよ？」

「アポなしで来たのはこつちなんだし、そこまでお氣遣ひしていた

だかなくても結構だ」

「………… ハハハッ！、話に聞いていたよりもずっと謙虚な人ですね。いや失礼、笑うなど無礼なことをしてしまつて」

年下にも関わらず敬語も使わずにタメ口で話す陽太を咎める事もせず、上品かつ優しげに接してくる態度は、それはまさに大人の男性の余裕そのものである。

「すまない、飲み物を用意してくれ。後、できれば何か菓子もセツトでお願いするよ」

「かしこまりました副社長」

秘書に用事を申し付けると、陽太の方を振り返り、柔和な笑顔で彼を自分のオフィスへと案内するジョセフであつた。

「失礼します」

ビルの最上階部分、ロビーよりも豪華な調度品で副社長室において、ソファーに腰かけた陽太にコーヒーを差し出す秘書。よくみれば顔立ちはどこなしシャルに似ている気がする。そんな彼女を注意深く見つめる陽太に、ジョセフは笑顔で説明してくれた。

「彼女は僕の妹なんです。クリス……」

「クリス・デユノアです。御会いできて光栄です、ミスター火鳥」

丁寧にお辞儀をしてくるこの年上の女性に、陽太は頭を掻きながら照れ隠しのようなことを言い出す。

「…………そのミスターとかいうのは止めてくれないか、そういう言われ方に慣れてないんだよ」

「これは失礼！！、では火鳥さん、でもよろしいかな？」

妹の代わりにジョセフが訊ねると、陽太は『まあ、それでいいか』と軽い返事を返す。その時、ふとあることが疑念となつてたずねてみた。

「あんたら、デュノアと名乗っているけど……………」

「ああ！、僕たちは現社長の兄の子供…………社長の甥と姪なんだよ」

身内か…………通りで全員金髪だ。などどうでもいいことを考えていた陽太であつたが、これ以上世間話をする気はなく、ずばり話の本題を切り出す。

「さて、早速で悪いんですが、本題に入らせて貰つても宜しいですか、火鳥くん？」

「ああ、俺も日本から世間話にくるほど暇じゃないしな……………今回の来た目的は三つ……………」

陽太がジョセフに三本指を立てると、彼はここに来た目的を解りやすく告げる。

「一つ、東が技術協力した目的を教えてください。一つ、東から俺の事を聞いているというなら話しは早い…………俺の腕を買って貰いたい」

「！！！？」

いきなりの展開に流石に表情を強張らせるジョセフ。だが、更に告げられた陽太の発言に、今度こそ驚きの声を上げそうになった。

「最後に一つ……シャルのことだ」

「……？……君はやはり、彼女の事を……」

「勘違いするな。シャルは外部の誰にも自分の性別のことを話していない……ただ単純に俺はシャルが『デュノア』を名乗る前からの知り合いなだけだ」

「なるほど……こちらのリサーチ不足ということですか」

顔を伏せながら、悲壮感のある声で答えるジョセフは、暫く沈黙した後、意を決して両手をテーブルにつけて、陽太に向かって頭を下げて申し出る。

「こんなことを頼める義理ではないのは承知していますが……どうか、彼女を救ってください！」

「……」

「僕の権限では彼女を守ることは出来ないんだ！！、会社の権限は叔父……シャルロットの父親が握っている。彼女のあの道具のようない扱いも全て叔父の仕業なんだ！！」

「……」

震える拳をテーブルの上に置きながら、無念に滲む声で陽太に必死に頼み込むジョセフであったが、陽太はそんなジョセフに追い討ちをかけるようにキツイ質問をぶつけた。

「それで……アンタはただ見てただけなのか？」

「……？……その通りです。僕は彼女を守れず……本当に申し訳ない」

唇と肩を震わせながら、彼は目の前の少年に胸の内を語って見せる。

「叔父に隠し子がいたことは驚きましたが……ですが、年端もいない少女にあのような仕打ちをすること自体、決して許されることではありません！」

「……………」

「話をしてみても、素直ない子なのに………あんなに優しい子を道具のように扱うなんて……ボクには許せない!!」

穏やかそうな物腰とは裏腹に、ジョセフは熱い言葉で陽太に訴えるが、陽太からはそれと反比例して、恐ろしく冷たい空気が発せられ、一気に副社長室の気温が下がる錯覚をジョセフは覚えた。

「俺は人を道具扱いする奴は原則皆殺しにすることを心掛けている。理由なんざ知りたくもないし、知ったところで考えを変えてやる気もない。どんな理由があろうとも、やって『いいこと』と『悪いこと』はあるはずだ」

「そ……………それは……………」

「そんで周りで見てるだけで何もしない奴も同罪だ。ましてやシャルとシャルのお袋さんには、俺は昔命を救われた……………人間としての道を歩ませて貰った。それゆえに今回のことは……………正直、腹に据えかねてる」

陽太から発せられる気配が段々と殺気が混じり始めるのを、素人であるジョセフにも理解できる……………素人でもわかるほどに、陽太が既にキレかけているということなのだ。

物理的な威圧感すら伴いそうなプレッシャーの中、それでもジョセフは必死に陽太に願い出る。

「君の言うことは最もだ……………気が済むなら、ボクの命を差し出してもいい!……………だが、せめて!、その前にシャルロットに謝らせしてほしいんだ!!」

「……………」

「彼女を助けられなかったのは僕の責任だ。だから……………せめてそれだけは…」

「勘違いするな。原則皆殺し……………だが、今回は特例だ」

陽太は頭を抱えながら、真剣に見つめてくるジョセフに手をプラプラしながら待ったをかける。もしその気があればこうやって正面から乗り込んで話し合いなどする気はない。

「正直、このデュノアを地上から物理的に消滅させるのが一番手っ取り早いんだろうが、それをすればどう隠そうがシャルの耳に届いちまう。自分が発端で空前の殺戮が行われたと聞いたら流石に堪えるだろ、つつわけで今回は無しだ」

言葉の端々に物騒な単語を並べながら答える陽太にジョセフは啞然となる。普通ならただの自惚れかバカな話だと笑い飛ばせるが、彼はIS操縦者……………しかもISの生みの親である篠ノ之束の言葉を信じるなら、世界最高峰の一人なのだ。その戦力は旧時代の一個大隊……………どころか、現在の大国の軍事力にすら比類するほどである。一人の人間が持つには余りに強力無比な力を、迷うことなく『気に入らないものを壊す』ために使うと言い放つこの少年に、ジョセフは寒気すら覚えた。

「だから、こうやって取引に来たんだ……………シャルの自由と引き換えに、デュノア専属のIS操縦者としての契約、そして……………」

陽太は持っていたアタッシュケースを開けると、中に入っていた『資料』をテーブルの上にぶちまける。

「第四世代『白式』のデータが手土産だ。悪くないだろ？」

「!!!!」

ジョセフとクリスは今度こそ完全に開いた口が塞がらなくなる。世界中がやつきになって手に入れようとしているこのISのデータを、こんなに簡単に自分たちに渡してくる陽太の神経が信じられない。

世界のパワーバランスすら左右しかねない『白式』のデータを、手土産として気軽に扱ってよいものでは断じてないはずなのに……。だが……。だが、陽太は悪びれもなく、また事態の重さを理解しているのかいないのか今一判別できないぐらいの軽さで気軽に聞きなおしてみせる。

「契約してくれるかな？、俺は束と違って『約束』は守る男だぜ？」

「では今後の予定はメールで、詳しい内容などについては私の方から直接ご説明させていただきます」

「ん？、悪いな……。突然押し掛けて無理言っちゃって」

それから数十分後、細々とした内容の契約書に拇印を押した陽太は、挨拶もそこそこに副社長室を後にしようとする。

「お見送りは私がします。副社長は職務の方を……。」「そうかいクリス？、じゃあお願いさせてもらっよ」

一緒に空港まで送ろうと言ったジョセフであったが、陽太が遠慮したためクリスが代役を務めることになる。アタッシュケースを持った陽太がエレベータに乗り、続いてクリスも同乗した。

「ではミス……ではなく、火鳥さん」

「どうした？」

「僕は正直、IS開発のことも統合防衛計画にも興味はありません……貴方の言った通り、どんな理由があろうとも叔父の非道を許すことができない」

「社長を敵に回すと？」

「ハイ！、貴方と二人でならシャルを救うことができます！………です。是非とも、僕に力を貸してください！！」

あくまでもシャルを救うことが第一目的だと言い切る目の前の男に、陽太は短く一言で返事をまとめてみせる。

「了解した」

「！！……ありがとうございます！」

嬉しそうに頭を下げるジョセフ。この人当たりのいい青年は、どこまでも愚直に陽太を信じてくれているのだ……そんな青年を見て、『笑顔』になった陽太は視線で美人秘書に合図を送り、クリスもエレベーターのボタンを押し、扉が閉める……頭を下げた状態のジョセフを一人残して。

そして一人取り残された、ジョセフは顔を地面に向けたまま、誰に言うというわけでもなく、ポツリと独り言を発し、いつもの人当たりの良い笑顔を浮かべるのであった。

「………ありがとう。陽太君……本当にありがとう」

ガラス張りのエレベーターの中から、フランスの街並みを見続ける陽太の背中を、クリスはただ黙って見つめ続けていた。

「（不思議な子……大胆なのか何も考えていなのか……）」
「何か用があるみたいツスね」

そんなクリスの視線に気がついてた陽太は、視線はそのままに話しかける。

彼女が自分に何か訴えたいことがあるのは話の途中から感じていたことで、現に兄の前では決して前に出ないよう一步下がった位置にいたが、その視線が絶えず自分を『査定』するような含みのあるものであったことが気になっていたのだ。

「いえ、私は………」

「兄貴の前じゃ話しづらいことなのか？、それとも………」

振り返り、目を細めながら彼女がわからないように握り締めていた『それ』を指差し、いたずらが成功した子供のような無邪気な笑顔で質問する。

「その『盗聴器』を俺に取り付けるタイミングを見計らってるのか？」

「……！？」

「信用されてないんだな俺……まあ、当たり前か」
「貴方は………」

笑顔を崩さぬまま、特に気にした様子もなく陽太は『エッフェル塔の塗装塗りなおしたのかな？』など全然関係のないことを口走って

いた。

「このまま日本に変えられるおつもりなんですか？」

「いや……………まだ用事が済んでないんでな」

「用事とは……………社長のことですね？」

今度は陽太が驚く番であった。あくまでも笑顔は崩してはいないが、それは口元だけで、目は笑ってはいない。鋭い勘をしていると内心褒めていた陽太であったが、エレベーターの中で沈黙が続くが、突然クリスがポケットから紙切れを取り出し、陽太に無理やり握らせる。

「中身はどこか人目のつかない所で開いて。もしバレたら貴方はもちろん、私も危なくなるわ」

「……………これって……………」

「いい？、現時点では私ができるのはここまでなの……………だからお願い、慎重に動いて……………」

「慎重につて……………」

「貴方は迂闊過ぎるわ……………IS操縦者としてどんな窮地も潜り抜けるという自分に自信があるのはわかるけど、周囲の人間のことまで考えて動いて……………」

チンツ！、とエレベーターがロビーにつく音が聞こえ、ドアが自動で開く。すぐさまいつものクールな表情に戻った美人秘書は、陽太を優雅に案内してくれた。

「こちらです火鳥様……………」

「あ、ああ？」

「空港までわたくしどもがお送りしましょうか？」

「い、いや……………」

「それではまたのご面会をお待ちしております……」

会社の入り口まで案内された陽太は、美人秘書の変わりように圧倒されながらデユノア社を後にする。

「女つて怖え」

などとぼやきながらしばらく歩いた後、とりあえず誰にも尾行されていないことを気配で察知すると、街中の路地に入り込んだ。

まさか人間一人に偵察衛星を使うとは考えにくいが、念には念を入れて、真上からは完全に死角になるよう天井のあるところまで小走りでいくと、さっそく手渡された紙の中身を確認する。

手渡された紙は二通、それぞれ数字が書かれたもののみであるが、陽太にはすぐさまそれが何を示しているのか推測し、片方の番号で携帯をかける……。それが特定の人物の電話番号だと確信していた陽太は、三度のコールの後、向こうが通話ボタンを押したことを確認し、陽気に問いかけてみた。

「ハ口~~~~、陽ちゃんd」

『それが迂闊だって言ってるの!!!!、何速攻で電話してきてるのよっつ!!!!!!!!!!』

物凄い怒鳴り声で返される陽太。右の耳がツーンとなりながらも、左の耳に当て直して話を元に戻す。

『本当に周囲に誰もいないの?、物陰に隠れてる?………まったく、よりもよって唯一の便りがこんな子供だなんて、不安で仕方ないわ……………』

酷い言われようだ………というか、こっちの方が素の性格か、この二重人格め………という言葉が口まで出かけるが、とりあえずそれを胸の内に仕舞うと、電話口の向こうでプリプリと怒っている美人秘書に必要なことを聞く。

「お怒りのところ失礼するが、手早く聞いておきたいんだが………社長はどこにいるんだ？」

「もうひとつの紙に書かれているのがその住所、社長とご夫人はそこで療養されているわ」

「軟禁………の間違いでは？」

電話の向こうで相手の息が詰まるのが手に取るようにわかる………どうやら、ここにくるまでの陽太や、シャルが知らされている以上に、『シャル』の家庭の事情は複雑になっているようだ。

「貴方がどう思うが、私は別に構わないわ………私は社長とご夫人を助けただけよ」

「兄貴と言っていることが真逆だな。夫人がどうなのか知らんが、少なくとも社長は血も涙もない冷血漢なんだろ？」

「違う！」

クリスがここで叫ぶ。それは先ほどのジョセフのような芝居がかった台詞ではなく、心底焦った人間味のある否定の言葉のように陽太には聞こえる。

「全部誤解が生んでしまった悲しいすれ違いなの！！、社長やご夫人は本当はシャルちゃんのことを愛してる………」

「知るか、そんなこと………」

だが、そんなクリスの悲しい訴えを陽太はあっさり切り捨てる。

「俺はこの目で見たものしか、この耳で聞いたものしか信じん……
……社長がどうなのか、これから行ってみて確認する。その中で
もし、社長が気に入らないなら俺は容赦なく社長を切り捨てさせて
もらう。ご夫人も同様だ」

『貴方！！………わかった。それでも構わない』

まだ何か言いたそうであったが、クリスはそれ以上何も語ろうとせず、陽太にすべて任せることにする。

『後払いになるけど、もし社長達を助けてくれたのなら、私が貴方に言い値で報酬を支払うわ』

「ご提案ありがたいが、却下だ………俺はそもそも社長を救いにきたんじゃない………シャルを取り巻く環境の確認と、その環境の中でシャルに悪影響を与えるものの排除をしにきたんだ」

『それでもいい！、社長達を助けて………お願い』

必死になって訴えてくるクリスに陽太は疑問を覚える。なぜこの女性はこのままで必死になって社長達を助けようとしているのか、と。

『社長は………私達兄弟の父親代わりをしてくれたわ』

「実の娘を放っておいてか？」

『それは！！………仕方ないじゃない！、社長もご夫人も本当に最近になるまでシャルちゃんのことを知らなかったんだから！』

いくら認知していなかったとはいえ、色々問題もあるだろうに………
……。だが今それらを彼女に言っても仕方がない。文句を言うべきは社長なのだからと、考えを切り替えた陽太がもう少し話を聞こうとした時、電話相手のほうがなにやら慌しくなる。

『また後でかけ直すわ……………』

短くそれだけ言い残すと電話を切られる。

ツーツ、ツーツ、という音だけが響く中、陽太は溜息をつきながら、とりあえず手のひらに残るもう一つの番号を眺めながら、ポツリと呟いた。

「しゃあねーな……………そうじゃまあ、突撃お宅訪問といきますか……………」

路地裏から空を見上げながら歩き出す陽太であったが、昔に聞いた話を思い出していた。

「……………シャルの父親は、質実剛健な生真面目さだけが取り柄な人間)」

それは遠い記憶……………多分シャルと再会しなければ思い出すこともなかったはずのこと。

「（その嫁さんも真面目なツンデレさん……………）」

説明としては甚だ問題があるが、言ってる本人がいたく気に入っていたようだが、当時の陽太には理解できかねていた。

「（エルーさん……………貴方を疑うわけじゃないが、どうにも俺は二人のことが信用できないな……………）」

それはシャルが陽太を家に呼び入れた初めての日の夜のことであつた。

友達を家に泊めるのは初めてとはしゃぐシャルと、ほとんど未体験といつていい優しい扱いに戸惑う陽太。そしてそんな二人を心底楽しそうに見つめる母親のエルーという構図で、夕食も大騒ぎしながら食べた後、シャルははしゃぎ疲れて最初に眠りに落ちてしまう。ベッドの上に母親によって寝かされたシャルは、幸せそうな寝顔を浮かべていた。

その光景をどこか遠い目で眺めていた陽太であつたが、エルーはそんな陽太を手招きして呼び寄せる。

「おいで陽太……………」

「は、はい……………」

まだどこか怯えた表情になる陽太にエルーはどこか困つたような笑顔を浮かべ、優しく頭を撫でながら諭してくれる。

「そんなビクビクしなくても取つて食べたりしないのに……………」

「あ、あの……………」

「ん、どうしたの？」

「き、きよ、今日は、ああ、ありがとうございました……………僕は……………それで……………」

シャルとエルーの二人には本当に感謝しているが、陽太はここにいるのがなんだか悪い気がしてならず、夜も遅いというのに家から出て行くとする。

「ちょいさっ！」

「イダッ！」

だが、そんな陽太の頭にエルーはチョップを一発かまし、更に怒った表情で陽太を捕まえる。

「遠慮禁止っ！、子供がこんな時間に何を言ってるの！？」

「だ、だけど……僕は……」

「この国の子じゃないから？」

「……！？」

「親がないから？」

「そ……それは……」

「一人ぼっちだから？」

「僕は……」

陽太の胸の内を、いつそのこと気持ちのいいくらいにずばずば抉ってくるエルーであったが、彼女の目には嘲りも差別も存在してはいない。

ただまっすぐな気持ちで彼女は大人として子供に接してくる。

「だから優しくされちゃいけないの？、だからいじめられても当然なの？、だから一人ぼっちなのも当然？………ぜんぜん違うわ」

「辛いなら言ってもいいの、寂しいなら言ってもいいの、怖いなら言ってもいいの、悲しいなら言ってもいいの………」

「私は貴方のことが知りたい。大丈夫、ちゃんと私は貴方の話を聞くわ」

そして彼女は、目の前の幼子を優しく抱きしめた。

「だから私に教えて…………貴方の本当の気持ち…………」
「ボク…………は…………ボクは…………」

震える肩、熱くなってくる目頭、その時陽太は生まれて初めてありのままの気持ちを誰かに語ってみた。

「わかんない…………全然わかんない！、なんで皆と違うのかも、皆がなんでボクをいじめるのかも！、なんでお父さんもお母さんもいないのかも！……………なんで！、なんで！、なんで！！」

嗚咽が混じり始め、自分でも制御できなくなる気持ち。なぜ自分と皆が違うのか、一緒ではないのか？

物心ついた瞬間からすでに始まっていた差別に、陽太はどうしたらいいのかかわからず、ずっと翻弄され続けていた。

そんな陽太を見ながら、エルーは彼の額に優しくキスをする。

「私のお母さんが教えてくれたの。大切なものにはキスをしなさいって……………シャルにも教えているわ」

もう一度、キスをしたエルーは泣きそうになっていた陽太の額に、自分の額を当てながら、今まで聞いてきた中で一番優しい声色で目の前の少年に告げてくれた。

「偉いわ陽太、よく頑張ったわね……………だけでもう大丈夫。安心して、貴方は一人じゃないの」

その言葉に、陽太の中にあった何かが完全に壊れる音が、彼の中だけで聞こえた。

「貴方は一人じゃない……………」

その時の気持ちを言い表す言葉を未だに俺は持っていない。

だけど、あの日の俺は……………エルーさんの胸の中で、生れ落ちた
時と同じぐらいに……………本気で心の底から泣いた。

泣き疲れてエルーさんの腕の中で眠りに落ちるまで……………。

라이어ゲーム(後書き)

嘔吐はいつたい誰だ？

ということで、書かれたこの話ですが、フウ太的にはやはりイマイチだ。

ああ、早くIS学園に視点を戻したいぜ。

明かされた真実（前書き）

というわけで、デユノア夫妻の登場です。

一応、このSSでは夫妻は悪い人どころか、普通に良い人達という設定です。

ではお楽しみください。

明かされた真実

夜の静かな闇が広がるパリの郊外にある広い敷地に設けられた一軒家。本来ならこのような場所に住むことはないはずの二人が、向き合い、途方に暮れていた。

一人は無精ひげを生やしすっかりやつれてしまっているが、本来なら端正な顔立ちのハズの中年の男性と、もう一人はどこか疲れた表情の実年齢よりも若々しい女性。

男の名は、ヴィンセント・デュノア。

女の名は、ベロニカ・デュノア。

シャルロット・デュノアの実父と義母である。

大会社の社長とその夫人であるこの二人がなぜこのような場所に監禁されているのか？

「……………」

ヴィンセントは荒れた手付きでウィスキーを手に取ると、グラスに入れてストレートで一気に飲み干す。ここ最近、彼のアルコールを摂取する量は加速的に増えており、妻であるベロニカが心配して止

めるように何度も説得しても一向に聞こうとはしなかった。

「アナタ、もうそれぐらいにしてください。このままでは身体を壊しますよ……」

「放っておいてくれないかベロニカ。もう……私は……」

グラスを乱暴にテーブルに置くと、再びウィスキーを入れて飲み干してしまう。

ベロニカは、やり切れない表情のヴィンセントを見るとどう声をかけたらいいいのか戸惑い、それ以上の言葉を書けることができずにいた。

この屋敷に『監禁』されてからというもの、毎日定期的な事後報告の書類のみが送られ、書類にサインだけを求められる。仮にそれを拒否しても、彼らには別段痛くも痒くもない。偽造してしまえばいいだけの話なのだ。

それでもヴィンセントに一応の報告をするのは、外交的にはいまだヴィンセントはデュノア社の社長であるためであり、そういう意味では未だに生かされているのは何かの目的があるからである。本来ならとつくの昔に殺され、どこかの山中に遺体を捨てられていてもおかしくないというのに……。

外出しようにも、家の中にさえ数人の護衛という名の監視役があり、外には更なる数の警備員達が四六時中見張っていて、外出や連絡は一切できず、外部に連絡を取って助けを呼ぶことすら出来ずにいた。

食事やその他の扱いは未だにVIP待遇であるが、それすらも嫌味にしか取れない。まるで何も出来ない自分達を嘲笑うかのよう……。

「こんなに情けない姿で生きなければならぬなら、いつその事一
思いに殺してほしいぐらいだな……………」

「アナタツ!!」

「解っているよ。このままでは死ねない……………せめて、シャルだけ
でも助けなければ……」

叱責するベロニカに苦笑いをしながら、自嘲気味な発言をするヴィ
ンセントが再び、ウィスキーをグラスに入れようとした時であった。

部屋に一陣の風が吹いたのは……………。

二人が振り向くと、バルコニーにいつの間にか人影があることに気
がつく。警備員か?……………と一瞬誤解するヴィンセントであったが、
それがすぐさま違うことに気がついた。

そもそもこの屋敷のものならば、わざわざバルコニーに登らなくて
も用があるなら正面から入ってくればいいのだ。そしてその人影が
随分年若い少年のものであると気がついた時、ヴィンセントが口を
開く。

「こんな時間に何用かね?、どうやらこの屋敷の人間じゃないみた
いだが?」

「……………いろいろ聞きたいことがあって、遠路はるばる『日本』
から来た者だ」

挨拶もせず堂々部屋の中に入ってくる黒い髪 of 東洋人の少年に、
眉をひそめるヴィンセント。

「君が何者か知らないが、早くここから出て行ったほうが……」

「セキュリティーのことなら心配いらねえーよ。さっき連絡して、
世界『最狂』の天才殿が適当に誤魔化してくれたからな。おかげで

文句ブイブイ言われたけど……」

『自分のことを棚に上げやがってあのウザミミがつ!!』とかグチグチ小声で文句を言っている少年に怪訝な表情を浮かべる夫妻。だが、少年はそんな視線に突然、敵意に満ちた瞳で睨み返す。

「君は……私達の命を狙いに……」

「寝惚けるな。その気があるのならわざわざこんな回りくどいことはしねえーよ」

少年がソファにドカツと座ると、突然ウイスキーのボトルを手に取り、一気に飲み干してしまう。そのあまりの豪快な飲みっぷりに啞然となる二人。

空になったボトルをテーブルに乱雑に置くと、目の前の少年は以前とした手厳しい視線で夫妻を見ながら自己紹介を始める。

「俺の名前は火鳥陽太。アンタの敵になるか否かはこれからの話次第な男だ」

「どういう意味かね？」

「………血の繋がった娘を道具扱いした上に、自分はこんなところで生き恥さらしながら飲んだくれてる男相手に、俺の我慢にも限度があるっていう意味だ」

現状をズバリ言い当てた上に、容赦なく彼を糾弾する。目の前の少年の言葉に頭に血が上ったヴィンセントが立ち上がり襟首を掴み上げる。

「アナタッ!？」

「キサマッ!、私の一体何を知って、そのような言葉をっ!」

妻の制止も振り切つて陽太を殴り飛ばそうとするヴィンセントであったが、襟首を掴んだ手を力任せに外した上に逆に捻り変えす陽太。

「ぐっ!!」

「……………」

数秒だけ彼を睨みつけると、興味が失せたように手を離し座り治す陽太とソファに体を投げつけられたヴィンセント。

手首に走る痛みを我慢しながらも睨み返してくる目の前の男に、陽太は深々とため息をついた。

「『不器用で頭が固くて融通が利かないけど、本当は誰よりも誠実で勇敢ないい男』」

「？」

「『口下手で思っていることを素直に言えないけど、心が優しくてお人よしのいい女』」

「？」

それぞれヴィンセントとベロニカを見てそんな言葉を言った陽太が、次に敵意ではなく何かを懐かしむ眼で二人を見つめる。

「……………エルーさんが嘘ついているとは思いたくないけど、話に聞いてたとはだいぶ違うな、あんた等……………」

「「!?!?」」

その人物の名前を出された瞬間、二人は大いに動揺する……………その名前を知っているのはシャルを除けば誰もいないはずなのに……………。そんな二人に陽太は、自分が一体どういった存在なのかを簡単に説明するのであった。

「俺は昔、エルーさんとシャルに命を救われた。家族を覚えてもらった。人の道を歩ませてもらった……………」

「君はエルーのことを知って……………」

「だからこそ教える。なぜアンタ達はシャルを道具扱いしたんだ？、なぜこんなことになったんだ？、包み隠さず……………今この場で全てをだ！！」

「なるほど……………」

先ず陽太は自分の身の上の説明をし、ヴィンセントとベロニカは少年の正体を知った。

孤児として異国に取り残され、想像を絶する苦汁を舐めさせられ、生きる気力も喜びも知らなかった少年が、エルーに抱きしめられ教えられた『ぬくもり』を如何に大事にしているのかということ。

たった一人の家族であり友達であるシャルロットを救いに来たということに。

そしてそのために、自身を売り払い、代わりにここの情報を手に入れたということに。

解ってしまったがゆえに、ヴィンセントは陽太に頭を下げることに出来ずにいた。

「すまない……………君にまでそのような苦勞をさせてしまうなどと」

「勘違いするな。断じてお前のための苦勞ではない……………それにシヤルのためでもない。ましてやエルーさんのためでも……………俺が望んで手に入れた結果だ」

「いや、それでも……………」

「自惚れるな」

ピシヤリと言い放つ陽太。それは陽太が自身のプライドであり、そんな安首一つが頭を下げて釣り合うと思って貰っては困ることなのだ。

「俺の話は以上だ……………続けてアンタ達の番だぜ」

「ああ……………ところで一つ聞いておきたい。エルーは君に私達のことをどれだけ教えていたのだ」

「さっきの言葉以上のことは何も……………そもそもシャルに再会しなかったら確実に忘れてたことだからな」

「そうか……………」

ヴィンセントが懐かしさを滲ませながら、ある写真立てに眼をやった。

「私と妻のベロニカ……………そしてエルーとは高校のクラスメートだった」

―当時の私はデュノア社の次期後継者、ベロニカも財閥の令嬢という間柄というだけだったんだが、その間になぜか一般家庭出身のエルが入ってね……………三人でよく行動を共にしていた。

私は勉強やスポーツを誰よりも負けないように努力していたが、こ
と友人関係についてはからきしでね。ベロニカも言葉が上手い方
ではないため、よく対人関係でトラブルを起こしていたよ―

ヴィンセントの言葉に、ベロニカは苦笑しながら言葉を続けた。

―ええ……………私もこの人もよくトラブルを起こしていたけど、そんな時いつもエルが私達を助けてくれたの。彼女、人見知りをしない気さくな性格だったから、あつという間にいつも私達が起こしたケンカを止めてくれて……………その度にエルに叱られてたわ。

でも、いつも叱った後に、私達にケーキを奢らせて……………『これでチャラだから』って……………大学に行ってもその関係は変わらなかったわ。

いつまでもそんな日々が続くと思っていた……………けど、それが突然終わりを迎えてしまった―

そこでベロニカが言葉を止め、眼を伏せて表情を歪ませる。そしてその代わりにヴィンセントが話を続けた。

―最初のきっかけは、私とベロニカの両親が勝手に私達を許嫁にしたことが始まりだった。当時の私は……………エルと付き合っていて私は彼女と結婚するつもりでいた。両親の勝手な戯言だと私は取り合わず、ベロニカも私とエルが付き合っていることに賛成してくれていたんだが……………その時、エルにある異変が起こった―

ヴィンセントが一瞬だけ言葉を詰まらせ、そしてその瞳に堪えようのない悲しみと怒りが湧き上がっていたことにベロニカと陽太も気

がついてた。

―エル―が……妊娠したんだ。私は最初はそのことに気がつかず、能天気にな彼女との日々を過ごしていた……今思えば、私はもっと早くに気が付くべきだったのに…… -

―アナタの責任ではありません！……私がいけなかったんです！妊娠したことを彼女に相談された私が、不用意に父が経営する産婦人科の病院に通院させたのがいけなかったんです！……彼女の妊娠が父達の耳に入り、それからというもの彼女はありとあらゆる嫌がらせを父達に受けることになるなんて…… -

―執拗に父達の追求と嫌がらせを受け、心身ともに疲弊していたのに、エル―は私達にはそのことを一切話さず、いつも通りに過ごしていたんだ……私達に話せば、子と親の間で骨肉の争いに発展することを彼女は察してくれていたんだ……だが、妊娠して五か月が過ぎた辺りで、業を煮やした私達の両親はとうとう物理的に彼女を排除しようし始めた―

―一日のうちに何度も身に覚えのない危険な目にあえば、さすがに私達の眼にも留ってしまい……私達はすぐに真実を知ることができました―

―私は生まれて初めて怒りに震えた。上流階級の血筋に拘り、人道から外れてまで自分の『孫』を排除しようとする父達のやり方に……吐き気を催したよ―

―私も同じでした。ヴィンセントには確かに男性としての好意を抱いてはいましたが、ですがエル―はそんな私などよりも遥かにヴィンセントを愛していて、彼のご両親との確執を避けるために自分の

命の危険すら笑って許していたのに……そんな彼女をなぜ認められないのかと、私は父達に詰め寄ろうとしました……ですが――

――エルーにそれは止められたわ。私達が両親と争って何が残る、残るのは眼に見えない憎しみの溝と、そんな中に産み落とされたこの子の未来だけだと……。だったら私はそんな中に愛する子をいさせることはできないと……。それから数日後だった。彼女は一通の手紙を残して、私達の元を去ってしまった――

――その手紙には、私とヴィンセントに両親と争うのではなく、解り合うよう務めてくださいと……。そして……。

――『ベロニカは貴方を愛している、彼女を幸せにしてあげてください。私は大丈夫……。貴方との想いの絆がもう宿っているのだから……。そして出来ればこの子が大きくなった時に、四人で会いましょう。』……。手紙にはそう書かれてあった――

そこで一端話を止めたヴィンセントが、夜空を見上げながら呟く。

「だが結局それも叶わなかった……。私達が彼女の行方を突き止めたときには、すでに彼女は帰らぬ人になっていた」

「それだけじゃないわ……。私が……。エルーを失って傷ついていたシャルに……。エルーの忘れ形見のあの優しい娘にっ!!」

ベロニカが頭を抱えて涙を流す……。抱えきれないほどの後悔と罪悪感で胸がいっぱいになり、それが眼から流れ出たのだ。

「シャルが見つかるほんの少し前……。ベロニカは流産したんだ」

「!?!」

「恥ずかしい話、私はベロニカと夫婦らしい生活をしたことはほとんどなかった。エルーへの罪悪感と会社経営の責務……いや、ただ仕事に逃げていただけだった。結果、ただでさえエルーへの負い目でいっぱいになっていたベロニカを更に追い詰めることになってしまったね……」

心身の疲弊と流産へのダメージによって、心のバランスを崩したところに、降って湧いたようにもたらされたシャルの存在は、彼女の心の均衡を完全に崩壊させてしまったのだ。
結果……エルーとシャルは、最悪の初対面を迎えてしまう。

「それからは以前にも増して輪にかけて仕事に逃げようとしたんだが……そんな様だからこそ、隙が出来ていたんだろう。私はあっさりと罠にハマってしまった」

「……あの副社長殿が……」

そして物語は現在に繋がる。

会社の実権を水面下で奪われ、ヴィンセントとベロニカはこのような場所に監禁されてしまったのだ。

「甥のジョセフには、IS関係の全権を委ねていたのだが……まさかシャルにまでそのような待遇を強いているなどと……」

「シャルはあなたに何も話さなかったのか？、確か二回ぐらい会って話をしたんだろ？」

「ISの適性の話すら今日初めて知ったぐらいだ……残念だが、私とシャルの間には親娘の会話が……私は所詮親としてあの娘には信用されていないのだ」

自分の撒いた種とはいえ、娘には他人以上敵未満の感情を持たれていてという状態にヴィンセントは自嘲する以外の術を持っていない。

「諦めんな……………」

だが、そんなヴィンセントを陽太は叱り飛ばした。

とりあえず真相を知った今、とりあえずこの二人を敵認定から外す^{エネミー}ことを決意する陽太。

「シャルは戸惑ってるだけだ……………話せばちゃんと解ってくれるさ。後、その熟女」

「!?!?……………わ、私のこと?」

流石にそんな失礼な言い方をされたことない社長夫人は戸惑いながら陽太を見る。

「アンタはそれでいいのか?」

「?」

「シャルに恨まれたままでいいのか?……………言われたんだろ、エルーさんに。親子で解り合うよう務めろって…」

「!?!?……………そ、それは……………」

「だったらつべこべ言わずに、解り合えよ……………百回恨まれても、百一回目に解り合えりゃ、それでいいじゃん」

簡単に言い放つ陽太をベロニカは不思議そうに見つめる。言い方も雰囲気もまるで違うというのに、何故だかその纏う空気は、かつての自分の親友に良く似ていたからだ。

「とりあえず、アンタ等がシャルのことを愛していることと、エルーさんを裏切ったわけじゃないことが知れて良かった……………返答次第じゃ、マジで物理的に消し飛ばす気でいたからな」

「……………ずいぶん物騒なことを言ってくれるね」

実はかなり危ないラインに立たされていたことに、今になって気がつくヴィンセント。

「じゃあ、俺はこれぐらいで……」

「帰るのかい？」

「いや、その前にデユノア社行って副社長絞め殺してくる」

「待ちたまえ!!」

とんでもないことを言い出した陽太を制止するヴィンセント。だが呼び止められた陽太は、かなりうっとおしそうに対応してくる。

「何？、俺はとつと済ませて日本に帰りたいんだけど？」

「君はさつきから何を言っているんだ!？」

「何って……あの副社長が悪モンだから、潰せばいいんだろ？」

「事はそんな簡単な話ではない!!、それにこれを機に私はデユノアの膿を全て出したいんだ……それにはまだジョセフを泳がせておく必要がある」

「……………あ、そう」

あっさり了解する陽太にずっこけるヴィンセント。本当に彼は理解しているのか甚だ怪しい。

「理解してるよ……………あ、でも 크리스からは二人をここから連れ出してくれって頼まれてんだよな」

「!?!……………クリスと連絡が取れるのか？」

「ああ」

陽太の言葉に思考を張り巡らせたヴィンセントは、急いでメモ書きを取り出し、伝えたい内容を書き上げ、それを陽太に手渡す。

「これをクリスに伝えてくれ……………くれぐれもジョセフに気が付かれないに……………」

「パシリかよ……………ま、しゃあないな……………」

そして急いで立ち上がると、陽太は無言で外を見つめながら気配の異変に気が付く。

「流石に長居しすぎたか……………なんか慌ただしくなってきたな」

「！！……………ならば早くここから脱出を！」

「わかつてるよ……………」

元来た道を帰るために、バルコニーに乗り出した陽太であったが、その時彼の手をベロニカが掴む。

「火鳥陽太……………私はもう一度あの娘に会いたい……………会って伝えたい。私は貴方の母親になりたいと……………例え、それがもう許されないことでも。もう一度だけ……………」

「もう一度と言わず、何度でも言えよ……………生きてるんならいくらでもやり直せるんだぜ、人間って……………」

その言葉を聞いたベロニカが自然に微笑むと、陽太も釣られて笑い変えず。

短いやり取りを交わした後、陽太がバルコニーから飛び降り、あつという間に夜の街に姿を消した後も、ベロニカとヴィンセントは彼の眼に見えない姿を追い続ける。

「不思議な少年だな。傍若無人に振る舞い、敵意を見せたかと思えば、あつという間に信用してしまった……………普通なら考えられないことなのに……………」

「あら、アナタ……………私には解りましたわ」

「何をだい、ベロニカ？」

バルコニーから部屋に戻ったベロニカは、今までにはない生き生きした表情でヴィンセントに振り返り、こう言い放ってみせた。

「エルの『息子』ですもの……………私達が信用するのも当然でしょう？」

フランスを陽太が後にしたのは翌朝のことであつた。

メールでクリスが自分に航空機の手ケットを用意してくれていることを知ると、彼女が用意した手順で連絡を取り、手ケットを受け取って、そのまま搭乗手続きを済ませる。

航空機の手配のお礼に、ヴィンセントから預かったメモを渡そうとした陽太であつたが、その前に『そんな大事な内容をホイホイ伝えようとするな！』と叱られてしまい、結局メンドクサイ手段を取ってメモを渡すことになってしまった。

陽太にしてみれば、こういうまどろっこしいやり取りというのは毛色に合わない。やるなら正面から堂々ぶっ潰す。やっぱり正面きつ

てのタイムンがいい陽太である。

旅客機が離陸すると、陽太はその振動に揺られながら、ようやく自分が一番安心できる空に上がったと喜び、飛行機が日本に到着するまで情眼を貪ることにした。

だが、陽太は知らない……………

今、日本のIS学園が大変な事態になってしまっていることに……………

そんな中で、新たな美少女^{ヒロイン}が、同じように日本のIS学園を目指していたことに……………

「一夏あーッ！、待ってなさいよあー！」

彼の乗る旅客機が中国『北京』で止まった時、元気良く搭乗した少女がそんなことを言っていたのだが、未だ夢の世界にいた陽太は知ることはできないでいた……………。

明かされた真実（後書き）

ようやく、セカンド幼馴染登場。

ええと………名前は………なんだっけ？w

覚えている人はフウ太に是非ともご一報を！↑（酷い）

「シャルの両親は実はめっさいい人」というのは連載前から決めていたことです。理由はいい人説をあんまり聞かないからw

さて、今回はようやく陽太が学園に帰ってきます。中華娘も同時に登場。

現在絶賛ヘタレ中のアイツを見て、この二人はどんなリアクションをするのか？

乞うご期待です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7515r/>

インフィニット・ストラトス～太陽の翼～

2011年9月19日21時36分発行